

ルーラー喚ぼうとしたら、
なんか違うのが来た
たby聖杯

陣代高校用務員見習い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

携帯からの初投稿になります。

Fate/ZeroとExtraのクロス物です。

今のところ、連載予定はありません。

かなり短く、一発ネタ扱い。

オイラの文章力、低すぎる（泣）

2016年5/3

短編から連載に変更しました。

亀更新&低い文才ですが、出来るところまでやってみるつもりです。

目次

来たのが違うb y 聖杯	1
ムーンスセル絶対許さねえ!! b y 聖杯	9
早くあつち行け! b y 聖杯	21
俺だつて大変なんだ! b y ムーンセル	33
あれからb y 聖杯	41
気絶している場合じゃねえ! b y 聖杯	52
無銘の罪状	61
未知との遭遇	76
僕の名は	89
ゴッドハンド白野	99
ぐだ男の冬休み	113
A U O	135
そして事態は動き出す	146
青髭大炎上	161
間桐邸の戦い	181
〇〇〇〇降臨! 冬木市最後の日!!	214
決着A U O!そして……	241
S w o r d , o r D e a t h	281
会合	311
魔術師達の帰還	331

来たのが違うby聖杯

『聖杯戦争』

それは極東日本の地方都市において密かに行われる、万能器『聖杯』をめぐる魔術師達の闘争。

その聖杯戦争も、ついに4回目を迎える事になった。

聖杯は考える。

今回こそは大丈夫だろうか、と。

前回の戦争では、いつも小聖杯を用意する陣営が、危険すぎる英霊を用意してきた。あらかじめルーラー『ジャンヌ・ダルク』を召喚していなければ危なかっただろう。彼女が命がけ（文字通り）で浄化してくれなければ、今頃何か不都合が出ていたかもしれない。

聖杯は確認した。

今回召喚されそうな英霊を。

シード扱いのハサンは既に召喚されている。

触媒で喚ばれそうなのは、英雄王、征服王、騎士王 e t c .

聖杯は確信した。

これはアカン、と。

『王』のサーヴァントが3騎同時に暴れたら、直上の大地が無くなる可能性がある。

特に、原初の英雄王は絶対に制御不能になる。

誰だよ、コイツ喚ぼうとしているバカは。

聖杯は決断した。

今回もルーラーを喚ぼう、と。

最有力候補のジャンヌ・ダルクは、前回で既に教会に姿を確認されてしまった。

同じ英霊を出せば、何かいらぬトラブルを招くかもしれない。

ならば、新たなルーラーを選ぶべきか。

十字教の影響の低い極東であっても、ジャンヌ・ダルクに匹敵する知名度補正の聖人が望ましい。

だとするならば、やはりこの英霊であろう。

聖杯は召喚した。

ルーラー『フランシスコ・ザビエル』を!!

聖杯は困惑した。

誰だコイツら、と。

自分はたしかにフランシスコ・ザビエルを召喚したはずだ。

記録通りならば、フランシスコ・ザビエルはスペイン人、もしくはバスク人だったはず。

では、出現した東洋人の少年少女は何者なのだ。

少女の着ている服は、直上の土地の教育機関で採用されている制服に酷似している。

少年の着ている服は、全体的に黒っぽく、一昔前の制服デザインである。

この2人、どことなく似ている。

双子の兄妹というか、同じ人物の性別違いというか。

しかし少年と少女はお互いを見て驚いている、やはり初対面なんだろうか。

聖杯は警戒している。

己が喚びだした未知の存在達を。

少年と少女は、お互いを観察しているようだ。

そして、2人同時に動き出す。

「ラム酒よりきいたあ」

「酔っぱらっているのかよおまえ！」

「森の恵みよ」

「圧制者への毒となれ！」

「おいかけたくなっちゃうよね」

「ウサギとか！」

「七孔噴血」

「巻き死ねい！」

「遠坂」

「マネーイズパワーシステム！」

「この剣は太陽の映し身」

「かつ負債を回収するもの！」

「武器など無粋」

「真の英雄は目で殺す！」

「人間とは」

「そもそもニートなのだ！」

「まるごし」

「シンジ君！」

そして固い握手をする2人。

その表情は無二の戦友に再会したかのように輝いていた。

聖杯は

考えることを

放棄した。

sideザビエル(仮)

妙に親近感がわく少女が目の前にいる。

クラスで3番目くらいに可愛いけど、表情が乏しそうというか。

見た目は小動物、実際は鉄の女、魂はオヤジというか。

そして彼女の制服、アレは『月の表側』の制服ではないか？

少し観察していたら、少女が問いかけてきた。

そして理解した、目の前の少女は自分と同一人物なのだ。

その事に驚きつつも安堵する。

あらゆる物が信じられなくても、彼女だけは信じられる。

なぜなら、彼女(自分)は自分(彼女)なのだから。

最高のドヤ顔をしながら、少女が手をさしのべてくる。

自分はその手をとった。

意見交換していくうちに、自分と彼女の違いが多少明らかになった。

まず戦友であるサーヴァント。

自分は『セイバー』だったが、彼女は『アーチャー』だったらしい。

特徴を聞く限り、自分たちみたいな性別違いではなく、完全な別人のようである。

そして第3回戦終了直後の行動も違っていた。

自分は自爆に巻き込まれそうだった『遠坂凜』を助けたが、彼女は自爆しそうだった『ラニ＝Ⅷ』を助けたようだ。

その影響か、その後の対戦相手が一部変化している。

最後に『黒いキューブ』の事だ。

自分はまだポケットに入れたままにしているが、彼女は持っていないらしい。

制服が戻ったせいかな？

そう言えば、2人とも『月の表側』『月の裏側』両方の記憶がある。

表側に戻ったら、裏側の記憶は消えるって聞いていたんだけどな？

ひよつとして、自分達が同時に存在しているのは、自分達の正体や『月の裏側』での事が関係しているのだろうか？

少女が眼で問いかけてくる。

自分達はどうするべきか分かっているな、と。

自分も令呪をかざしながら無言で答える。

当然だ、と。

記憶があやふや、見知らぬ土地、状況不明。

そんな事、これで3回目だ。

こういう時は、情報収集や拠点確保が大事だ。

だが、それらより先に行う事がある。

それは

「来い！」

「来て！」

やはり

「セイバー!!」

「アーチャー!!」

戦友との再会であろう。

side out

ムーンセル絶対許さねえ!! by 聖杯

sideザビ男(仮)

目の前で2つの強大な力が渦巻く。

『サーヴァント』

人智を超えた力を持つ『英霊』を、人の手である程度制御できるようにした存在。そして、聖杯戦争における剣であり、パートナー。

それが今、目の前で顕現する!!

自分の頼れるパートナー

白衣の『セイバー』

「奏者よ！余は待ちくたびれたぞっ！……………むっ!？」

自分と同一人物である『彼女』のパートナー

黒衣の『アーチャー』

「マスター、君はなぜ毎回こんな面倒な事に……………何っ!!」

再会したサーヴァント達が臨戦態勢に。

…基本サーヴァント同士は殺し合う存在。

まずは互いのサーヴァントに分かっている事を伝えるべきか。
とは言っても、分かっている事はあまり無いのだが。

「うーむ。つまり奏者は気づいたらココにいて。

目の前にあの少女がいて。

その少女が奏者と同じ存在？

……たしかに言われてみれば、似ているような？（あれはあれで悪くない。むしろ良
い……3人で、という事になったら最高だな!!）」

「……おまけに月の両側の記憶もある、と。

たしかに私も両方覚えているようだな。

その代わり、ここに来るまでの過程や原因が不明か。

マスター、ここまでトラブル続きだと、もはや何も言えんよ。（あの少年、生前の俺以
上の女難持ちな気がする。∴強く生きてくれ!）」

……何故だろう、彼女のアーチャーに同情されているような気がする。

状況が不明なので、自分達はしばらくの間は一緒にいるべきだと思う。

まずは、今後の行動について話し合いたいのだが。

「うむ。わかったぞ奏者よ」

「私も、マスターがいいのならば異論はない。

所持品の確認はまだか？

もし戦闘になった時、礼装が使用不可では少々厄介だからな。

マスター、端末はあるか？」

少女が端末を取り出す。

自分も……うむ、持っているな。

取り出す際、ポケットの中の黒いキューブが自己主張していたような気がしたが、と
りあえず今は無視しておこう。

ん？メールが届いている？

「先輩達へ」

このメールを読んでいるという事は、無事に地上に着いたようですね。

その場所は『S.E. R.A. P.H. 聖杯戦争』のモデルになった『冬木聖杯戦争』の開
催地、冬木市です。

冬木の聖杯が先輩に縁の英霊を召還しようとしていたので、平行世界からハッキングして先輩達の一時避難に利用させてもらいました。

現在S.E. R.A. P.H. は、月の裏側に出現した9匹の駄狐達『タマモナイン』によって、面白おかしい事になっています。

『サクラファイブ』に対処させていますが、状況はあまりよろしくありません。

駄狐達の最終目標は先輩達のようなので、ほとぼりが冷めるまで地上に避難して下さい。

なお、サーヴァント達の維持はこの端末を通してこちらで行っていますので問題ありません。

ただし大ダメージを受けた際や、神話礼装を使用した場合は休息が必要ですので注意を。

また先輩達の所持アイテムですが、こちらはS.E. R.A. P.H. 内での使用を前提としていますので、地上での使用は不可能となっています。

地上で使えるよう改造したコードキャストを、いくつか端末に入れておきましたので、そちらをご利用下さい。

戸籍改竄や銀行口座偽造なども全て終わっていますので、ある程度の期間は生活できるはずですよ。

それでは、東の間の冬木ライフをお楽しみ下さい！
あなたのムーンセルより♪」

「……………」

「……………」

「……………」

……………これは酷い。

本来なら中盤以降に明らかになりそうな事が、全力でネタバレされている。

というか、差出人は『ムーンセル』になっているけど、コレって明らかに……

「……とりあえず原因は分かった。

礼装は使用不可だけど、代わりに手がある。

生活基盤の問題もなんとかなりそう。

あとは、今後どうするか考えるのみ」

このまま話を進めるだど!?

ザビ子（仮）、恐ろしい子!!

しかし、このメールが本当なら、今 S.E. R.A. P.H. は2つの意味で大ピンチなのでは？

やはり、すぐにでも戻った方がいいのだろうか。

「…止めた方がいい。」

BBの話からすると、タマモナインの狙いは私達自身。

あのBBがわざわざ逃がしたという事は、私達が今戻れば状況が悪化するかもしれない」

薄々気付いていたけど、今はつきりと『BB』って言った！

しかしザビ子（仮）の提案も理解できるが、当事者である自分達だからこそ出来る事があるのではなからうか？

「…それに」

ん？

「…せっかく冬木に来たのだから、本場の麻婆を食べないと！」

なんだとっ!!

まさか、この冬木はあの激辛麻婆の縁の地だったのか!?

「…前に神父に聞いた。間違いない」

なんという事だ！

くつ、だけど今頃月では……!!

「もしや、あの赤い料理の事か？」

色は良いが、余の口には合わなかったな。

あの料理はともかく、せつかくの地上なのだぞ。

すぐに帰るといふのは、つまらないではないか？奏者よ」

セイバーの気持ちも分かるけど……

「少年、本当に良いのか？」

どういう事だい？アーチャーさん？

「タマモナインというのは分からんが、サクラファイブはおそらく『パッションリップ』

や『メルトリリス』の同類だと思われる。

今戻れば、ヤンデレが大量追加だぞ？」

……………せつかくの地上、思う存分楽しもう！

「自分で誘導しておいてなんだが、見事なまでの手の平返しだな」

当たり前だ！

月の裏側でヤンデレはお腹一杯なんだ!!

リップは色んな意味で重かったし、メルトには刺されそうになったし！

2人でも大変だったというのに、5人なんて耐えられるわけないだろう！

「待て少年、そちらのメルトリリスは君を追いかけてまわしたのか？」

もちろんそうだけど？」

なんか、自分を二次元キャラにするみたいなさ言っていた。

「……………そ、そうか」

アーチャーさん、なんかレ○プ目だけど大丈夫？

あの、ひよつとして……

「お願いだから、思い出させないでくれっ！

マスターが近くにいたから我慢していたが、あの時本当は磨耗した記憶が絶叫をあげていたんだからな!!

いい歳した男が、マジ泣きしそうだったんだからな!!」

アツハイ

「……アーチャー？ そう言えばメルトや過去の件、まだいろいろ聞きたい事があるんだけど？」

「勘弁してくれ、いや勘弁して下さいマスター!」

「…令呪をもって命ずる!」

「止めろ! マスタアアアアアアアアアア!!!!」

10分かけて狂乱したアーチャーさんを落ち着かせた。

ちなみに、さすがに令呪は冗談だったらしい。

「……とりあえず全会一致で、地上を堪能するという事で。第一目標は麻婆」
異論なし。

「うむ！余は『プリクラ』とかいうのがしてみたいぞ！」

「麻婆はともかく、しばらく地上でおとなしくしていた方がいいだろう。サクラファイブはマジ勘弁」

アーチャーさん落ち着いて。

冬木には貴方を追いかけるヤンデレなんていませんよ。

「……………そうだといいいんだがな……………」

それはどういう？

……………いや、この件はここまでにしよう。

じゃないとアーチャーさんがまた壊れる。

「すまない助かる。」

ついでに、先程の醜態も忘れてほしいのだが」

2人の端末でバツチリ記録済みです。

「貴様ら、地獄に落ちろ」

とは言うものの、たしかにサクラファイブは気になる。

だが自分の第6感が告げているのだ。

負けず劣らずタマモナインもヤバい、と。

「奏者よ、たしかBBは『駄狐』と言っておったな。

もしや月の裏側『時空の歪み』で出てきたキャスター関係ではないか？」

過去のトワイズと一緒に出てきたキャスターの事？

言われてみれば狐耳だったような。

見慣れない術を使ってきて、かなり手強かった。

「うむ。戦っている最中、奏者に色目を使っていたから、少し気になっておったのだ」

……………ははっ、まさか。

あんな状況で、目をつけられるなんてアルワケナイダロ？

「少年、顔色が悪いぞ!」

「…大丈夫。私も目をつけられている。

捕まる時は一緒」

出会って間もない2人の友情に、目頭が熱くなる。

とりあえずタマモナインの件も、今はそっとしておこう。

いずれ戦う事になるかもしれないが、地上にいる間ぐらいは現実逃避したい。

：『時空の歪み』で思い出したけど、ひよっとしてアーチャーさんって？

「君達はアレとも戦っていたのか。」

アレは同一存在であって、同一人物ではない。

全くの他人というわけではないが、本人ではない。

今の君達と同様だ」

『時空の歪み』にいた方と比べると服装が現代風ですけど、それは？

「………これはマスターの趣味だ」

「…メガネのためならば、令呪も惜しくない」

ザビ子（仮）の業は予想以上に深かった。

でも少し納得。

今にして思えば、隣にいた凜もなんかいろいろ違っていたしね。

「…具体的には胸」

「マスター、女性を胸部で判断するのは正直どうかと思うぞ」

「…今は、セイバーのグラマーボディを揉みほぐしたい」

カミングアウト!?!

「そ、奏者以外に触られるのは嫌だぞ!?!」

「…同一存在の性別違いだから問題なし」

「駄目だこのマスター、早くなんとかしないと」

アーチャーさん、自分はメガネな貴方をまさぐりたいなんて思っていますよ？

「そういうところは違うようだな。」

本当に安心したよ」

セイバーを揉みほぐしたいという熱い想いには共感しますが。

というか、一度押し倒したし。

「…その話、詳しく」

ムラムラしてやった、後悔はしていない。

辛うじてソリッドブックみたいな展開にはなりませんでした。

「前言撤回。君達はやはり同じだ」

side out

早くあつち行け！by 聖杯

sideザビ男（仮）

「奏者よ、そろそろ移動せぬか？」

せつかくの地上だというのに、ここは殺風景すぎる」

む、たしかに随分と長い話し込んでいたな。

そろそろ移動を開始すべきか。

気のせいか、奥から『早くあつち行け！』と急かされているような気がするし。

「…スタート地点の洞窟でウロウロしていても仕方ない。

移動しよう、そして麻婆を」

「この場所は、むしろゴール地点だと思いがな。

移動するのは構わないが、早めに決めておきたい事がある。名前の件だ」

「…チーム名なら『麻婆メガネ愛好会』で」

「む、余は『インペリアルローマ・プロダクション』がよいぞ！」

自分は無難に『特攻野郎ザビチーム』がいいかな。

「違う！決めるのはチームの名前などではなく、マスター達の呼び名だ」

自分と彼女の呼び名？

それはもちろん………あつ！

「ようやく気付いたか。」

君達は2人とも『岸波白野（キシナミハクノ）』なのだろ？

別々の呼称を決めておかないと、ややこしくて仕方ない」

うーむ、普通に会話出来ていたから気にしてなかった。

仕方ない、本名は彼女に使ってもらい、自分はザビエルと名乗る事に

「…待って、ザビエルは譲れない。本名は貴方が使って」

何っ！自分こそザビエルだ！

「…私こそがザビエルにふさわしい」

これだけは譲れない。

相手が自分（彼女）だからこそ折れるわけにはいかない！

自分がフランシスコ・ザビエルだ!!

「アーチャーよ、奏者達がさっきから言っている『ザビエル』とは一体何者なのだ？」

「簡単に言うときリスト教の聖人だ。結構有名だぞ？」

「……あの宗教の関係者か」

「しかし、まさか本名の方を譲り合うとは。」

お互いに押しつけあって、この様子ではなかなか決まらなさそうだな。そういえば、2人とも月ではどのように呼ばれていた？」

自分は『キシナミ』と。

「…私は『はくのん』」

な…なんだ…と！

「やはりその名称は違っていたか。」

我々の間では、とりあえずそれでいいだろう」

「つまり奏者を『キシナミ』と呼び、少女は『はくのん』と呼ばばよいのか？」

「自分のマスターに関しては、無理に変える必要もない。」

どちらかというと、相手のマスターの呼び方だな。

B Bの偽造戸籍の名称も気になるが、おそらく公の場面でしか使われないだろうし、そもそも慣れないかもしれん。

4人の間では、しばらくはこれでいこう」

「うむ心得た！改めてよろしく頼むぞ、はくのん!!」

「…(´)ち(´)そよろしく、セイバー」

「ではキシナミ、そろそろ移動し……………どうした？何やら崩れ落ちているようだが？」

性別違いの同一存在

彼女はあだ名呼び

自分は苗字呼び

なんだというのだ、この差は。

これが……これがザビ子（仮）推しというものなのか!?

自分を唯一の友人と呼んでくれたユリウスよ、君も仏頂面で彼女の事を『はくのん♪』とか呼んでいたのかい？

それならなぜ、自分はずっと苗字呼びだったのだ？

自分が『無個性』だからか？

自分には何が足りなかったのだ？

教えてくれユリウス!!

「奏者よ！気をしっかり持て!!余は、私はそなたの方が好きだぞ!?!」

「キシナミ、こういう場合は女性の方があだ名をつけられやすい。」

俺も高校時代、友人達からは苗字呼びだった。

だから気にするな」

「…ちなみに私のあだ名は自己申告」

「マジで!!」

すまない、取り乱してしまった。

もう大丈夫だ。

「…ゴメンね。まさか呼ばれ方で、ここまでショックを受けるとは思わなかった
いいんだ。

これも全て『無個性』な自分が原因だ。

意味もなくジャンプしたり、水着や体操服でサクラ迷宮突撃しても無視された、自分の影の薄さが悪いのだ……!」

「キシナミ、君は一体何をやっているのかね!」

ああ!そういうツツコミが、あの時欲しかった!!

アーチャーさん、もっと早くあなたに出会いたかったよ。

「…ダメ。アーチャーは私の執事（バトラー）」

「ん?アーチャー、おぬしエクストラクラスの適性があるのか?」

「……ノーコメントだ」

「…ようやく洞窟の出口。」

アーチャー、周囲に人影は？」

「今のところ無いようだ。」

ただし、近くに寺社がある。

誰か出てくる前に、早めに移動すべきだろう」

「日は既に沈んでいるか。」

残念だが、奏者と一緒に街を見るのは明日になりそうだな」

「ところでセイバー。」

「この山を出たら、君は霊体化してくれないか？」

「む？何故だ!？」

「君の格好は目立ちすぎる。」

地元警察の職質は免れないだろう」

たしかに、ウエディングドレス風な拘束具スーツだしね。

自分はいぶ慣れたけど、たしかにセイバーの格好は目立つ。

「……仕方ないか。」

明日の探索では服を選ばなければならんな」

「その時は、マスターやキシナミの服も選んでおいた方がいい」

自分達の格好は、そんなに目立たないと思うが？

「君達、学生服しか持っていないだろう。」

時間帯によっては、警察の世話になってしまうぞ」

それはたしかに厄介。

アーチャーさん（保護者）と別行動中に補導されてしまう危険性があるのか。

「…では明日の予定は、服選びと麻婆で。」

今晚は、とりあえず拠点への移動で大丈夫？」

うん、それでいいと思う。

BBが戸籍偽造と同時に住居も用意してくれたから、今はそこに向かおう。

えーと？『深山町』？

ミヤマチヨウって読むのかな？

端末のデータ見る限り、なんか大きめな家が多い区域みたいだけど。

「……………この住所…おい待て…まさか…………」

「アーチャーどうしたのだ？

また顔色が悪くなっておるぞ？」

「……………大丈夫。」

ああそうだ、大丈夫だとも。

いささか磨耗した記憶が疼いているが、全く問題ないさ。

問題など起きるはずがない」

はくのおん、目的地に到着したら、またアーチャーさんがぶっ壊れそうな気がするんだが。

「…記録の準備しなくちゃ」

容赦ないな!?

「なんでさああああ!!!?」

アーチャーさん落ち着いて下さい!近所迷惑ですよ!?

「…アーチャー落ち着いて。」

早く落ち着かないと、令呪で服装を水着に固定するよ?」

「……………すまない、また迷惑をかけた」

「アーチャー、お主本当に大丈夫か?」

向かい側の屋敷が相当気になっておるようだが?」

あれって、武家屋敷って言うんだっけ?

まだ人が住んでいないようだけど。

「…見た目だけなら、私達の拠点と同じ」

そうみたいだね。

外見が同じだから、道路を中心に線対称みたいになっている。

違いはお隣さんかな？

こちらの隣は無人みたいだけど、向こうにはお隣さんがいるみたいだ。

「…『藤村組』って、まさか『タイガー』？」

「すまないマスター、この件はここまでにしてくれないか。

そうでないと、私の硝子の心が碎ける事になる。

キシナミとセイバーも頼む、イイネ？」

アツハイ

「…わかった。でも、いつか聞かせてもらおう」

「余は特に興味ないから、別に構わんぞ。

では、そろそろ我らの家に入るとするか！」

なんというか、知識にある『純和風建築』という感じだね。

「奏者よ、外には蔵や道場があつたぞ！」

「……………中の構造…俺が住んでた頃と完全に一緒じゃないか……………どうなっているんだ

よ……………」

「…アーチャー、気をしつかりもって?」

アーチャーさんがこのままでは3度目の狂乱になってしまう。

今日は早めに休むべきかな。

ん? 居間のテーブルに何枚か紙が置いてあるな。

「…これは戸籍関係かな?」

B Bが偽造したものだね。

自分達はどんな風になっているのかな?

苗字・江宮 (エミヤ)

アーチャー↓長男・士郎 (シロウ)

岸波白野 (男) ↓次男・岸波 (キシナミ)

セイバー↓長女・音呂 (ネロ)

岸波白野 (女) ↓次女・白野 (ハクノ)

何か辛い事があつたみたいだ。

「…もう休む?」

そうだね。

「アーチャーさんも部屋に行つてしまつたし、自分も適当な部屋で休むとするよ。

「余は寝る前に、湯浴みがしたい。

はくのん、一緒にどうだ?」

「…ごつつあんです」

その返事、湯浴みのセリフとしてはいかななものか?

side out

俺だつて大変なんだ！ b y ムーンセル

sideキシナミ

欠けた夢を、見る。

「このムーンセルには神は無く、呪いも無く、宿命すらも無い」

「無いからこそ、私は今度こそ……今度こそ、対等の者として貴様の息の根を止めねばならん！」

欠けた夢を、見る。

「嬉しいよ、ギル。また君とこうして、性能を比べる事ができるなんて」

「ふっ……エアよ、思う存分に謳うがいい!!」

欠けた夢を、見る。

「シータ? シータなのか!!」

「ラーマ様! こうして会えるなんて!!」

欠けた夢を、見る。

「オラオラオラアッ! ぶっ 飛べっ!!」

「七孔噴血……巻き死ねい!!」

欠けた夢を、見る。

「自害せよランサー」

「ガハアアア!! ……また…かよ…」

「クーちゃああん!!」

「ランサーが死んだ!」

「この人でなし!」

欠けた夢を……？

「牛魔王様、モー孩児。食事前の『消毒』『殺菌』の時間です」

「もうオキシドールのバケツで顔面ザブザブは嫌だあああ！」

「モー孩児、後ろに乗れ！今は退くぞ!!」

欠けた夢……？

「……シエイクスピア、あとどれぐらいだ？」

「……こちらは約20ページですかね。そちらは？」

「……約30ページだ、クソツタレ！このままではパイケットに間に合わん！締め切りはまだ俺を苦しめるか!!」

欠けた……？

「アツセイツ!!」

「ローマツ!!」

「プロメテーターウスツ!!」

欠け…………?

「…………魔神柱が…………全滅だ…と!?!」

「手強かった…」

……………いや、これ絶対自分の夢じゃないよね?

「ああ安珍様!

あなた様は今、月にはいらつしやらないのですね!

ですが、絶対に逃がしませんよ?

うふふ、うふふふふ。うふふふふふ……………」

人違いです。

「…ヴァイオレット、状況は?」

「一言でいうならカオスですね、BB」
「……………もう…いや……………!!」

頑張れ頑張れBB!!

「…なんか先輩に応援してもらえた気がする。うん、あと数百年は戦えるわ」
「いえ、休息すべきかと」

うん、休んだ方がいいよ？

「Fateの法則が乱れる!!」

何を今さら。

……………つて、この娘は。

まさか、タマモナイン？

「あはっ♪みいつけた♡」

「そんなところに、逃げ込んでいたんですね?」

「でも」

「どんなに頑張っても」

「太陽からは」

「逃げられないんですよ?」

何やら凄まじい夢を見ていた気がする。

グラウンドでオーダーな感じというか、カーニバルでファンタズムな雰囲気というか、とりあえずBB、頑張ってくれ。

あと、自分は安珍ではありません。

「む？起きていたかキシナミ」

おはようございます、アーチャーさん。

エプロン似合いますね。

「ああ、おはよう。」

朝食はもう少しかかる。

とりあえず顔を洗ってきたまえ」

セイバーとはくのんは？

「まだ寝ているようだ。」

すまないが、10分後に起こしてきてくれないか？

その間に準備を済ませておく」

わかりました。

……ところで、その、大丈夫ですか？

「キシナミ、何かあったかね？」

いえ、この家に到着した時の事ですけど。

「あれはすまなかつたな。」

予想以上に消耗していたのでね、先に休ませてもらったのだよ」

いえ、そうではなくて。

「うむ? 到着してからはナニモナカッタハズダガ?」

アツハイ。

……この話題はそつとしておこう。

「ではキシナミ、二人は頼んだぞ」

はい。

ついでに、はくのんには『エミヤシロウ』という名前を使わないように言っておくかな。

side out

あれからby聖杯

sideキシナミ

この町に現れてから数日経った。

その間、本当に色んな事があった。

普段着を選びにいったら、セイバーが店ごと買い占めたり。

服を選んだら、いつの間にか自分の手に焼きそばパンがあったり。

はくのんがいつの間にかプレミアムアムロールケーキを頬張っていたり。

麻婆を食べたり。

ご近所の藤村さんと知り合いになったり。

特に大河さんと仲良くなったたり。

時々アーチャーさんがブツ壊れたり。

麻婆を食べたり。

はくのんが自分にメガネをかけさせようとしたり。

その豪遊ぶりから、セイバーが商店街の有名人になったり。

公園で遊んでいる赤毛の少年を見たアーチャーさんが半日寝込んだり。麻婆を食べたり。

セイバーが芸能プロダクションの人から「せめて名刺だけでも！」と声をかけられたり。

アーチャーさんが『深山の顔黒メガネ主夫』のアダ名をつけられたり。

はくのとセイバーが、老舗の呉服屋『詠鳥庵（エイドリアン）』でプチファッションショーをしたり。

そして麻婆を食べたり。

さらに麻婆を食べたり。

ついでに麻婆を食べたり。

オマケに麻婆を食べたり。

うん、本当にこの数日間は楽しかった。

「キシナミ、私は苦労しかしていないような気がするのだが？

さらに言うならば、君たちは麻婆を食べ過ぎだ!!

ついでに、あの呉服屋の名前は『詠鳥庵（エイチョウアン）』だ！」

「…アーチャー、1日1麻婆は私達の責務だよ？」

「そのような責務はすぐに放棄したまえ。

セイバーも無駄遣いし過ぎだ！」

「しかしだなアーチャー、せつかくBBがあれだけの資金を用意したのだぞ？

であれば、使わなければ損ではないか！」

うん、あの金額には驚いた。

まさか国家予算級の貯金が用意してあるとは。

ひよつとして、セイバーの金の使い方次第で、国が傾くのでは？

「実際に国を傾けていたような気がするが、まあいい。

3人とも夕飯後に大事な話がある。

必ず家に居るように」

「ん？アーチャーよ、もしや？」

「ああ。少し時間がかかったが、ある程度はまとまった。

一度、情報を共有しておきたい」

「さてマスター、そしてキシナミ。

一度現状を確認しておきたい。

まず最初に、私とセイバーの状態だ」

二人の状態？

「そうだ。我々は元々ムーンセル所属のサーヴァントだ。

地上で現界した事による影響を調べていた」

「…結果は？」

「まず戦闘力などの基本的な部分は、ムーンセルにいた頃と変化ない。

魔力の流れは『冬木聖杯』からは完全に途絶えていて、マスター経由でムーンセルから来ているので間違いないようだ。

ただし、召喚された際に『冬木聖杯』から一部知識が追加されている。

主に『冬木聖杯戦争のルール』と『現代知識』だな」

「…言われてみれば、ローマ皇帝のセイバーが横断歩道知ってたよね？」

クレジットカードで爆買いしてたよね。

「うむ。そう言えば、何故か知っておったのだ」

「近代出身の私ならともかく、古代ローマ出身のセイバーが知っているはずがない。

間違いなく知識が追加されている。

だが現代知識に関してはそのほど問題ではない。

重要なのは聖杯戦争関連の情報だ」

「…どんな内容？」

「余が知っている限りでは、召喚されるサーヴァント数は基本的に7騎のみ。

しかも各クラス1人のみのようだな。

また、ムーンセルの1vs1のような決闘方式ではなく、出会ったら即戦いになるよ
うだぞ？」

それって何でもアリという事かな。

「全く制限が無いわけではないがな。

少なくとも神秘の秘匿は遵守しなければならない」

「…『神秘の秘匿』って何？」

「そうか、まずそこから説明が必要か。

二人とも、この世界が平行世界なのは知っているな？」

うん、BBのメールにも書いてあったし。

凛に聞いていた話と世界情勢が違うし。

なによりも『西欧財閥』がない。

だから此処は、ムーンセルのあつた世界とはだいぶ異なるようだね。

「その通りだ。そして異なる点の一つが『地球の魔力』の有無だ」

「……？」

「最初から説明すると長くなるので、簡単に説明するぞ。

本来、地球の気には魔力が含まれている。

『旧時代の魔術師（メイガス）』はこの魔力を利用し、魔術などの神秘の力を行使していた。

だが我々のいた世界は1970年代に起きた大崩壊により、地球の魔力は枯渇している。

実際のところ『大崩壊の影響で魔力が枯渇したのか』もしくは『魔力枯渇の影響で大崩壊が起きたのか』は不明だ。

何はともあれ、この魔力枯渇により魔術は失われた。

結果、メイガスは衰退していった」

そうか、その後登場したのが。」

「そうだ。自らの魂を霊子化させて電脳空間を駆ける『次世代の魔術師（ウィザード）』だ。」

だが、この世界は地球の魔力が健在だ」

「……つまり、メイガスも健在？」

「間違いなく。」

少なくとも聖杯戦争の参加者はメイガスが大半のようだ。

そして、このメイガスというのが、結構アレでな」

アレ？

「神秘の秘匿さえ守られていれば、非人道的な事も結構やるというか。

所謂、人でなしが多いのだ」

「なるほど。アーチャーが気にしているのは、奏者達はそのメイガス達に狙われる可能性だな？」

しかも、昨晚の余の感覚が確かなら……」

「そうだ。間違いなく今は聖杯戦争中であり、昨晚かなり強力なサーヴァントがこの町で喚ばれている。

本格的な戦闘はまだ発生していないようだが、それも時間の問題だろう」

つまり、これから聖杯戦争に巻き込まれる可能性に警戒しなければならぬのか。

ひよつとして、セイバーやアーチャーの事は気付かれているのかな？

「奏者よ、おそらく我らはまだ見つかっていないようだぞ。

あれだけ派手に遊び歩いたというのに、今のところ尾行の気配はない。

何度か『皇帝特権』で知覚能力を強化して確認したから間違いないぞ！」

なるほど、セイバーはただ豪遊していたわけではなかったのか！

「いや、半分以上はただ遊んでいただけのような気がするのだが。

一応私も時々周囲を確認していたが大丈夫そうだ。

おそらく私とセイバーは、冬木のサーヴァントとは色々違うからだろう。

ただし直接サーヴァントに見つかった場合は、さすがにバレるかもしれないが」という事は、うまく立ち回れば聖杯戦争終結まで隠れ続ける事もできるかな。

「…正直な話、地上の聖杯には興味ない」

自分も同感。

それに地上のメイガス達の聖杯戦争に、部外者の自分達が乱入するというのはマナー違反のような気が。

「残念だが二人とも、そう言うわけにはいかないようだ」

え？ どういう事？

「実はここからが本題でな。

BBのメールの『冬木の聖杯が二人に由来するサーヴァントを喚ぼうとした』という部分を覚えているか？」

「…うん、誰を喚ぼうとしていたのかな？」

「それはわからん。

「ここで大事ななのは『聖杯が自らサーヴァントを喚ぼうとした』という部分でな。

私が冬木の聖杯から得た知識によれば、緊急時を除き、聖杯が自らサーヴァントを喚ぶ事はない」

「…という事は」

「おそらく、何かが起きたか、もしくはこれから起きるのだろう。

緊急時に備え冬木聖杯は『裁定者（ルーラー）』のサーヴァントを喚ぼうとしていたようだ。

ちなみにルーラーが喚ばれる場合は主に『結果が未知数な時』『聖杯戦争が世界に歪みをもたらす可能性がある時』らしい。

それ以外のパターンもあるようだが、そこまで詳しくは教えられなかった」

これって、実はかなりマズイ？

何かトラブルが起きそうだからルーラーを喚ぼうとしたら、部外者の自分達が割り込んできたという事だよな？

もし冬木聖杯に自我があつたら、今頃大激怒しているのではないだろうか。

「そうなるな。私もセイバーも、マスター達が無事なら他に言う事はないのだが。さすがにコレは…」

「うむ。それに我らが地上にいる間に聖杯が危惧していた『歪み』が発生するやもしれぬ」

………はくのん、ここは一つ。

「…うん。私達がルーラーの代わりをしよう。」

私達がタマモナインから逃げようとした結果、地上に災いが起きそうだというのは見

逃せない」

そうだね。

聖杯には興味ないし、聖杯戦争そのものには関与しない。

だけど、その過程や結果で出るかもしれない被害は無視できない。

「やはり奏者達はその結論を出したか。」

余としても、見知った商店街の者達に不幸があつたら悲しい」

「私も全力をつくそう。」

全員覚悟はいいな?」

「無論だ!」

「…大丈夫」

やろう!

「わかった。ではさっそく今晚から、交代で夜番をする事にしよう」

「…夜番?」

「冬木聖杯戦争は、神秘の秘匿の関係で、基本的に戦闘は夜間だ。」

たしかBBが用意した疑似コードキャストの中に『遠見の水晶玉』と同じ効果の物があつたな？

それを使い、魔力反応がある部分を定期的に確認するようにしよう。

何かあつた場合、すぐに全員を起こすように」

「…わかつた。アーチャー、夜食よろしくね」

しかし、冬木聖杯戦争は夜間なのか。

はくのん、もしガウエインが冬木聖杯戦争に喚ばれていたらどうなっていたんだろうね？

「…とりあえず『聖者の数字』が死にスキル化」

そうだね。

そもそも『転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）』みたいな広範囲＆高火力宝具所持のガウエインを市街地で戦わせるような事はしないだろうけどさ。

side out

気絶している場合じゃねえ! b y 聖杯

聖杯は我に返った。

気絶している場合ではない。

このままでは真上の戦争の余波で自分も危ない。

聖杯は確認した。

残念ながら、既に6騎召喚済。

3騎の王達も予定通り召喚されている。

『魔術師（キャスト）』だけは喚ばれていないようだが、時間の問題だろう。

最後の令呪の持ち主は……誰だコイツ？

ひよつとして、気絶している間に適当な奴に渡しちやった？

……この件は後回しにしよう。

聖杯は考えた。

この際、自分自身と最低限の霊脈だけでも死守しよう。

人間達も言っていた「いのちをだいじに」と。

聖杯は改めて確認した。

やはり注目すべきは3騎の『王』のサーヴァントであろう。

『槍兵（ランサー）』はそれほど火力が高くない英霊が選ばれたようだし、『狂戦士（バーサーカー）』は強さは凄まじいが広域破壊はできなさそうだし。

『暗殺者（アサシン）』はそもそも対人戦に特化しすぎているから除外していいだろう。

聖杯はまず『騎兵（ライダー）』を確認した。

真名は『征服王』イスカンダル。

当初の予想より、ステータスが低下している。

マスターが代わったのか？

所持宝具は『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』『遥かなる蹂躞制覇（ヴィア・エクスプグナティオ）』そしてEXランクの『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』の3つ。

だが、ライダーは特に問題なさそうだ。

『神威の車輪』も『遥かなる蹂躞制覇』も高火力ではあるが、土地をまるごと吹き飛ばす

ようなタイプではない。

『王の軍勢』に関しては、発動時に自分で結界をはってくれるという、非常に土地に優しいEX宝具だ。

聖杯は次に『弓兵（アーチャー）』を確認した。

真名は『英雄王』ギルガメツシュ。

あの私の強い英霊に『単独行動』が付いたのか。

しかもコイツを喚んだのは、よりにもよって現在の土地管理者。

所持宝具は『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』とEXランク『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』の2つ。

……『王の財宝』の性質上、実際の宝具の数は測定不能であろうが。

『天地乖離す開闢の星』は広域破壊宝具の中でもトップクラス、全力で使われたら土地どころか国が危ないだろう。

だが英雄王はこの宝具を余程の事でない限り、使おうとしないらしい。

プライドの問題だろうか？

もし使われたら対抗手段は全く無い。

アーチャーが痼癩を起こさない事を祈るのみだ。

聖杯は最後に『剣士（セイバー）』を確認した。

真名『騎士王』アルトリア。

……もしやこの英霊、『死ぬ前の時間』から来てないか？

それってアリなの？

今度ゼル爺さんに問い合わせてみるか。

所持宝具は『風王結界（インビジブル・エア）』『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』の2つ。

近くにもう一つ宝具の反応があるが、どうやら本人は所持していないようだ。

『約束された勝利の剣』は聖剣のカテゴリでは頂点の剣。

狩猟を行う際、アルトリアは時々この剣で周囲を焼き払っていたようだ。

ちなみにそのたびに、そばにいた黒い騎士が遠い目をしていたそうだが。

聖杯は判断する。

やはり警戒するのはセイバーか。

ライダーは問題なし。

アーチャーは逆に問題だらけで、どうしようもない。

アレは天災の類いだ、対処不能。

ならばセイバーを重点的に警戒して、少しでも自身の生存率を上げよう。

聖杯は不敵な笑みを浮かべた。

たしかに『約束された勝利の剣』は最強の聖剣だ。

さすがに『天地乖離す開闢の星』には劣るが、それでも使い方を誤れば甚大な被害を出すだろう。

だが残念だったな！この聖杯、その聖剣の弱点を知っている！

『ある英霊』の持つ盾に対しては、その力を満足にふるえないのだろうか？

ならばその英霊を召喚し、自分を守ってもらえばいいわけだ。

幸いにもその英霊は『聖杯に選ばれた騎士』であり、自分とも相性がいいはず。

聖杯は召喚した。

『サー・ギャラハッド』を!!

聖杯は混乱の極みにいた。

自分は円卓の騎士サー・ギャラハッドを召喚したはずだ。

たしかに目の前から、その反応がある。

だが記録によれば、ギヤラハッドは男性だったはず。

目の前にいるのは、胸のあたりに立派なモノを持った少女。

デンジヤラス・ビーストでマシユマロな感じだ。

それだけだったら『ギヤラハッドが密かに性転換していた』で済ませるのだが、問題なのはその周囲。

マスター反応が1つに、サーヴァント反応がギヤラハッド（仮）含めて5つ？

しかもその5つ全て、目の前のマスターと契約済!?

コイツ、本当に人間か!?

ひよつとして、状況はさらに悪化してないか!?

聖杯は

ついに

コワレた

sideマスターの少年

「せ、先輩……この場所は！」

「フオフオウ!」

うん。グラウンドオーダーの始まり、冬木の大聖杯前だね。

もつとも、僕達が黒い騎士王と戦った時とは、だいぶ雰囲気が違うみたいだけど。

たしか『ネロ祭2016』の片付け後にカルデアに帰還しようとしていたはずなんだけどな。

ドクター? 聞こえる?

《うん、聞こえているよ。》

レイシフト中に干渉があつて、何人かそちらに跳ばされてしまったようだね《

「! 他の方々は無事ですか?」

《今から確認してみるよ。》

そつちも誰がいるか把握しておいてくれないかい? 《

わかつたよドクター。

よし! では点呼だ!

「はい! シールド『マシユ・キリエライト』います!」

「セイバー『モードレッド』いるぜ!」

「アーチャー『クロエ』いるわよ!」

「キャスター『イリヤスフィール』います!」

《ルビーちゃんもいますよ》

「アベンジャー『ジャンヌダルク』……いるわよ」

「フオウ!!」

《うん、こちらでも確認が終わった。

カルデアにいないのは君達だけだね》

よかった、行方不明者はいないんだね。

《どうする？今のところ特異点反応が無いようだから、再度レイシフトをして帰還するかい？》

いや、念のため周囲を確認しておこう。

一度レイシフトが失敗している以上、次が確実に成功するとは限らない。

最悪、次は本当に行方不明者が出るかもしれない。

ある程度は原因を調べておきたい。

《わかった。こちらでも原因を調べてみる。

君達も今は戦力がそこにいるメンバーだけだから、無理は禁物だよ？》

はい！

……ところでさマシユ、何か羽織る物持っていない？

コロッセオならともかく、さすがにこの洞窟内で海パン1つは辛いからさ。

無銘の罪状

sideキシナミ

よし、端末とテレビの接続は問題ないね。

さっき反応があつたのはこの場所？

「我らが最初にいた洞窟だな？」

「…うん。でも、疑似コードキャスト『遠見』だと、洞窟の内部を直接は映像で見れないみたい」

「それは仕方がない。

この疑似コードキャストは、おそらく監視カメラや人工衛星などをハッキングして利用しているようだからな」

自分達はメイガスの魔術なんて使えないしね。

その代わり、魔術の反応や痕跡が残らないから、メイガス達にバレずに見る事できる。ウィザードと違い、メイガスは機械は苦手らしいし。

とりあえず映像は洞窟の出口に固定、今はスキャンの結果を確認しよう。

「…反応は人間サイズが6、小動物サイズが1。」

人間サイズでサーヴァントだと思われのがらみただけど……
どうかした、はくのん？

「…反応が少しおかしい」

「む、これは一体なんなのだ？

サーヴァントと人間の反応が入り交じっているようだが。

こちららも、どこか歪なような……」

「かなり特殊な生い立ちのサーヴァントがいるようだな。

おそらく、まっとうな英霊では無いのだろう」

それってナーサリーライムみたいな特殊な存在という事かな？

複数のサーヴァントを従えているみたいだけど？

「…私達みたいなのに、どこかから維持魔力が供給されているんだと思う」

つまり『そういう事』ができる個人か組織というわけだ。

警戒レベルを相当上げた方がいいみたいだな。

冬木聖杯戦争の参加者だと思うかい？

「…わからない。

サーヴァントを複数従えているから、正規の参加者じゃないと思う。

ひよつとしたら、私達みたいなイレギュラーかもしれない」

あらゆる可能性を考えておいた方がよさそうだね。
そろそろ洞窟から出てくるみたいだ。

全員気がついた事があつたら、すぐに意見してくれ。

「……うん」

「うむ！」

「心得た」

ふむー人目は……

「……盾？」

身を隠すほどの大きな盾だね。

さっきの『人間の反応がするサーヴァント』だ。

「なんとも地味な盾だな。」

余なら全体を赤くして、縁を金で彩るところだ」

「盾に隠れてよく見えないが、背丈からすると少年か？もしくは女性だろう」

地味な盾を持った少年もしくは女性の英霊か。

「……うん、わからん。」

「…マトリクスが足りない」

「まあ性別はあまり気にしないほうがいい。」

そこにいるセイバーやライダーの例もある」

……………そう言えばそうだった。

時々忘れそうになるけど、『皇帝ネロ』は歴史上は男性扱いだったね。

まったく、こんなに綺麗で可愛いくてスタイル抜群なネロが男なわけないだろ！

「そ、奏者よ！いきなり何を言うのだ。」

余を褒めるのは良いが、不意討ちは卑怯だぞ!!」

「…アーチャー、これが『バカッフル爆発しろ!』というやつ?」

「生暖かく見守ってやれマスター。……………次が来たぞ」

2人目は……………鎧騎士だね。

「…兜まで被っているから顔がわからない。」

でも、さっきの盾のサーヴァントと背丈があまり変わらないから…………」

うん、こちらも多分少年か女性だろう。

「かなり強力なジャミングがかかっている。」

「これはおそらく宝具だろうな」

となると、やっぱり怪しいのはあの『兜』かな。

『正体隠しの兜』を被った『騎士』か。

まさか？

「…もしかしたら、ガウエイン以上の強力なサーヴァントかもしれない」

「うむ。加えて本当に『あの騎士』ならば、常に叛逆の可能性があるはずだ。

それが従っているという事は……」

「それ相応の魔術師がマスターになっているという事だろうな」

3人目は、今度は間違いなく女性だ。

「ふむ、黒衣の少女騎士か。」

甲冑というには露出が多いな。

手に持っているのは槍か？」

「いや、アレは旗のようだ。」

しかし『旗を持った少女騎士』だと？」

真っ先に思い浮かぶのは、やはり『オルレアンの聖女』かな？

でも、雰囲気の違いすぎる。

なんか表情がヤサグレているし。

「…みんな気を付けて。」

その黒衣のサーヴァントがさっきの話に出てきた『歪なサーヴァント』だよ」

え？それって……………

ひよつとしてアルターエゴみたいに、『聖女』をベースに人工的に造られたサーヴァントという事か!?

「馬鹿な、そんな事が可能だというのか!?

それでは、こやつらのマスターは聖杯クラスの奇跡を行使できる事になるぞ!」

あくまでも可能性。

だけど本当にそうだとしたら、かなり危険な相手だ。

……………もし敵対する事になったら、神話礼装の使用も考えておこう。

「…次の反応は人間と小動物」

「間違いなく彼女達のマスターと使い魔だろう。」

どんな魔術師か見極める。気を抜くなよ!」

.....えーと？

「……海。パンだな」

「……海。パンだ」

「……海。パン」

複数のサーヴアントを従えていて、サーヴアントを改造できるほどのマスターが海。パン少年だった。

アーチャーさん、今「気を抜くなよ！」って言っていたけど、これはどういう事なんだろうか？

「むしろ、私が聞きたいぐらいだ！」

「……アーチャー、やっぱり私達も水着で行くべきなのかな？」

「やめたまえ！」

夜の街をスクール水着で行くなんて、そんなふしだらなマネは絶対にさせないぞマスター！！」

「……大丈夫。アーチャーのために、ちゃんとニーハイは着けておくから」

アーチャーさん、あんたそういう趣味だったのか。

スク水ニーハイとは、なかなかやりますね。

「待て濡れ衣だ！事実無根だ！！」

「……でもアーチャーって『絶対領域』好きだよね？時々鷹の目で凝視していたし」「そ、それは?!」

男はドスケベな生き物なんです。

別に恥ずかしがる事は無いんですよ？

「なんでさああああ!!」

しかし、そうなる自分達も水着出した方がいいのかな？

「奏者、それにはくのん。」

余は出来ればあの水着は遠慮したいのだが………」

………そうだね。

アレは完全に『紐』だもんね。

「……その話詳しく」

次が出てきそうだから、また明日で。

ほら、アーチャーさんも頭抱えてないでコッチ来てください。

………もう何が出てきても驚かないと思っていたけど。

「……まさかの魔法少女」

ひよつとして、彼女達は警戒せずにスルーするのが正解だったのか？

「2人とも、マホウシヨウジヨとは何なのだ？」

さすがの聖杯もそこまでは教えてくれなかったか。

簡単に言うとう漫画やアニメに出てくるキャラクター達の事だよ。

10歳前後の少女達が『魔法』という名の謎エネルギーで、悪者を倒したりマジックアイテム集めたり。

「なかなか面白そうだ！

余もいつかやってみたいぞ、奏者よ!!」

うん、なんとなくセイバーは似合う気がする。

毎回違う衣装用意して、近くに撮影係を待機させておけば完璧だろう。

名前は『魔法皇帝マジカル★ネロ』とか？

もしくは『マトリクスキャプター★ネロ』でもいいかも。

「…アーチャー、この魔法少女が出てきた時凄い表情していたよね？

ひよつとして好みのタイプとか？」

え!!アーチャーさんは実はロリコ……

「違う!確かに可愛い少女だとは思いますが、今度は絶対に違うぞ!!

……………正直なところ、自分でもよくわからない。

『俺』としては間違いなく面識が無いはずだ。

だが『私』としては何故か見覚えがある。

意味がわからん」

ちなみにどんな記憶ですか？

「……………聞かない方がいい。

ただ、この少女は見た目通りではないとだけ言っておこう」

アーチャーさんを青ざめさせるほどか。

最近の魔法少女って、結構物騒なんだね。

「…次のサーヴァントが最後」

……………えっ？

「なんと！」

「なんでさ」

「……………」

あのアーチャーさん、この少女は……………

「いや、私は知らないぞ！

身に覚えは……多分無いはずだ!!」

「絶対無いとは言い切れないのだな?」

「そ、それは!」

「…アーチャー? 質問があるんだけど?」

はくのん、雰囲気は質問というよりも詰問、もしくはマジで拷問5秒前なんだけど。

「…この子はアーチャーの娘だよな?」

「そんなわけあるか! 俺は生涯独身だったぞ!」

アーチャーさん、結婚しなくても、やる事やってたら子供は産まれるんですよ?

服装はかなり似ていますし、装備している双剣なんて全く同じです。

さすがに言い逃れできません。

正直に言つて下さい、一晩だけの関係とかでヤっちゃったんでしょ?

「そういう甘い経験は生前いつさい無かったと、以前話しただろ!」

「…アーチャーは無自覚ジゴロタイプ。」

実際はかなりの数の女性を引っかけているはず」

「産まれてきた我が子を認知しないなど、人間としては最低な行いだぞ!」

この少女をよく見るがいい。

会った事も無い父親を想い、せめての繋がりとして格好だけでも真似ようとしている

のだろう。

「なかなかいじらしいではないか!」

「いやしかし、似ているのは格好だけだろう!」

それならいきなり娘とか考えず、妹とか考えなかったのか?」

妹ですか?

兄妹というには顔付きが違いすぎますよね。

そもそも人種が違うんじゃないかな?

顔付きなら、むしろさっきの魔法少女が瓜二つですが。

.....まさか!

「待て!本気で待て!!」

何を想像したかだいたい予想つくが、そういう趣味は無い!断じて無い!!」

「しかしアーチャー、先程このマホウシヨウジヨを『可愛い』と言っておったよな?」

以前「可愛い子なら、誰でも好きだよ。俺は」とか良い笑顔で言ってきましたよね?

ひよつとして「見た目通りではない」って、ソツチの意味だったんですか?

たとえ合意でも犯罪ですよ!

「余も昔、美少年や美少女を侍らせておったが.....さすがにこれはドン引きだぞ」

「頼む、俺の話聞いてくれ!」

話を聞くも何も、ここまで証拠が揃っていては。

それに弁解するのは自分達ではないと思えますよ？

アーチャーさん気持ちは分かりますが、そろそろ後ろを振り向いた方がいいです。

「……………いやだふりむきたくない」

あ、ガチ泣きしそう。

「ちなみに、今のはくのんの状態は……………表情が完全に抜け落ちているな」

もともと表情は乏しかったけど、今は完全に『無』になっています。

右手の令呪は3画とも赤黒く発光しています。

実は自分もすぐに逃げ出したいぐらいです。

「…アーチャー？こつち向いて？」

「マ、マスター！頼む、落ち着いてくれ！」

「…いいから、こつち向いて？」

「マスター!!これは冤罪だ！」

「…早くこつち向け」

「……………ハイ」

今のはくのんなら、『ヴォーパルの剣』無しでジャバウオック倒せそうな気がする！

「…アーチャー？別に私は怒ってないよ？」

「……………あ、あ、あ、ああああああああ!!」

「…でもちよつとだけ、オハナシしようか？」

side out

side 海パン少年

ん？

「どうかしましたかマスターさん？」

ああイリヤちゃん。

いや、なんかエミヤの断末魔が聞こえたような気がしたんだけど。

でも気のせいだね。

エミヤは今、カルデアで夜食作っている最中らしいし。

「先輩、洞窟出口付近の確認は終わりました。

……………どうかなさいましたか？」

大丈夫、大したことじゃないよ。

今こちらには索敵能力の高いサーヴァントはいないから、慎重に行こう。

「はい！」

side out

未知との遭遇

sideキシナミ

アーチャーさんがはくのんに引き摺られていつてから、そろそろ30分経つ。

行き先は蔵だったみたいだけど大丈夫だろうか？

「奏者よ。結局、この後はどうするのだ？」

色々不安な点もあるけど、この海パン少年と接触しようと思う。

敵対しそうになったら、疑似コードキャスト『帰還』で一度この家まで逃げてくれればいいし。

「なるほど、いざという時は退却して建て直すのだな」

うん。退却系の疑似コードキャストが用意されていたのは嬉しい誤算だった。

次元なんとかシステムのちよつとした応用らしいよ？

ただし2つ注意事項が。

「なんなのだ？」

まず1つ目はこの端末で登録されている『ムーンセル出身者』のみが対象だという事。

そして2つ目は同時に帰還できるのは2人だけで、再使用には10分かかる事。

1つ目は特に問題ないけど、2つ目の制限が厄介だ。

自分とはくのが『帰還』を使って、セイバーとアーチャーさんを令呪で強制転移させるという方法も一応ある。

ただ、これは最終手段として温存したい。

「つまり接触役と援護役で分けるのだな？」

退却時に片方が遠距離から援護射撃するのが鉄板だろうね。

連絡は疑似コードキャスト『念話』使えばいい。

できれば援護役をはくの人達にお願いしたいんだけどな。

アーチャーさんが『弓兵（アーチャー）』なら遠距離攻撃は得意だろうし。

あ！戻ってきた。

「…おまたせ」

「すまないな、席を外してしまつて」

アーチャーさん、その色々と大丈夫でしたか？

「たかが明日の朝食の仕込みの話だぞ？」

大した内容ではあるまい？」

……………え？あの!!アーチャーさん!?

「ふむ。マスター、ひよつとしてナニカアツタノカネ？」

「……うん、ナニモナカッタヨ?」

……マジか。

「……奏者よ、この件は一度保留にすべきだ。

下手に追求すれば、こちらも危うい!」

……そうだね、ナニモナカッタ!

この後あの集団にあつたらすぐに問題起きそうな気もするけど、とりあえずナニモナカッタヨネ!

「……で、あの人達はどうしている?」

まだ山から出ていない。

あの様子からすると、何処かと通信しているみたいだ。

はくのん、やはり接触するべきだよね?

「……もちろん。特にあの小学生達には色々確認する事がある」

「は、はくのん?あの少女達にはあまり手荒な事をするでないぞ。

美少女というのは至宝なのだからな?」

「……大丈夫。オハナシが終わったら、あとはセイバーに任せる。

思う存分可愛がってあげて?」

「うむ心得た!!」

ほ、ほどほどにね。

とりあえず接触役は自分とセイバーがするから、はくのん達は遠距離から援護してほしいんだ。

退却する事になったら、アーチャーさんに援護射撃をお願いしたい。

「…大丈夫かな？アーチャーのメインウエポンは双剣で、弓矢はめつたに使わないけど？」

「いやマスター、普通に使えるからな！

ムーンセルの決闘方式では狙撃の腕を見せる機会が無かっただけだからな!!」

「…むしろアーチャーに接触役をさせるべき。」

アーチャーには無敵バリアの『熾天覆う七つの円環（ローアイアス）』がある。

あれなら『転輪する勝利の剣』の真名解放すら防げるよ」

なるほど、そういう手もあるか。

………ふむ、ちよつと思いついた事があるんだけど。

「…だいたい予想つく。その方法でいこう」

さすがはくのん、話が早い。

あーあーマイクチェック。

こちら『麻婆王子』と『執事』、あと5分で目標に接触します。

どうぞぞ？

《こちら『麻婆姫』と『アイドル皇帝』、援護ポイントに到着。いつでもいけるよ。どうぞぞ？》

うん、『念話』はちゃんと使えるみたいだね。

《奏者よ！危なくなったらすぐに喚ぶのだぞ!!》

うん、ありがとう。

セイバーもはくのんの事を頼むね。

《任せるがよい!》

「……………キシナミ。色々と聞きたい事があるのだが？」

あれ？さつき説明したはずですけど？

接触役は無敵バリアのあるアーチャーさんと、セイバーを令呪で喚べる自分が担当。

敵対時はアーチャーさんがバリアで防いでいる間に、自分が『転移』の準備するとい

う話でしたよ？

「その事ではない。」

我々の『この格好』についてだ。

これはどういう事かね？」

？何か問題でも？

「むしろ何故問題ないと思ったのか、問い詰めたいぐらいなのだが？」

アーチャーさん、異文化コミュニケーションに必要な事はなんだと思いますか？

「なんだ突然？……『自己理解』と『自己理解をした上での対話』か？」

はい。最初に必要なのはその2つです。

『自己理解』に関しては問題ありません。

何しろ記憶が無くなるたびに自己確認しているぐらいですから。

『岸波白野』の得意分野と言えるでしょう。

「自己確認が得意分野というのも、何ともアレな話だがな」

ならば次に必要なのは『対話』、それもなるべく相手の立場に近づいた上での対話です。

相手に比べてこちらは武力面で劣っています。

ならば、こちらが譲歩して向こうに合わせるべきだと思うんですよ。

『アレ』が彼方の正装だというのなら、我々はそれに合わせるべきだという事です。

「理論がメチャクチャだぞ！」

あの格好が正装なわけないだろう!!」

まあ、出会い頭のインパクトで交渉を少しでもしやくするとうう考えもありますが。「そもそもキシナミ、君は大丈夫なのか？」

寒くないのかね!？」

HAHAHA!!

何を言っているんだいアーチャーさん。

寒いに決まっているでしょうが。

「今確信したぞ！」

キシナミ、さては君は大馬鹿者だな!!」

直前に麻婆食べておいたから大丈夫ですよ。

この疑似コードキャスト『保管』って本当に便利ですよ。

入れた時点で『時間』『空間』が凍結した状態になるから、麻婆もいつまでもホカホカです。

自分もはくのんも30杯近く入れてあります。

「君たちはまだ麻婆を食べる気か!!」

side out

side海。パン少年

ドクター、とりあえず洞窟出口まで来たけど。

「周囲のスキャン結果はどうですか？」

《……やはりダメだ。

急なレイシフトだったせいか、スキャンの範囲がかなり狭い。

今のところ周囲にサーヴァントの反応は無いけど、警戒を怠らないようにしてくれ》

「了解しました！」

前の時と違い、火災などは起きていない。

この状態が本来の冬木市なんだろうね。

「……わたしやクロが住んでいた冬木市とも違うみたいだね」

「そうね。軽く遠くを見てみたけど、ルヴィアの大屋敷が無いわ」

《ですからイリヤさん、気をつけて下さい。

この街で知り合いに会ったとしても、それは平行世界の別人ですからね？》

「……うん。わかっているよルビー」

イリヤちゃん、やっぱりちよつと家族や友達が恋しいのかな。

「…………大丈夫だよ。たしかにママやお兄ちゃん、美遊達に会いたくなるけど。

今はマスターさんやマッシュさんがいるもん。

それにルビーや……………ク、クロも一緒だし」

「ん？なんか言ったイリヤ？」

「な、なんでもないよ！」

2人とも仲良いよね。

あ、ルビー入れば3人かな？

「…………マスター、さっきから気になってんだけどよ」

なんだい？モーさん。

「その格好、寒くねーのか？」

あ、なるほど。

見た目は海パン1つだもんね。

コレは一応魔術礼装だから、見た目ほど寒くないんだよ。

何しろ、コレ1つですつと無人島で過ごせたぐらいだし。

さらにフオウも首のあたりでマフラー代わりしてくれている。

「フオオウツ♪」

うん。フオウもありがとう。

とは言え、落ち着ける場所を見つけたら、上着とか探してみるか。さすがに冬空の下で長時間いるのはキツイかもしれないね。

《……みんな気をつけてくれ！》

何かが其処に近づいてきている。反応は2つ！》

「ドクター、『何か』って何ですか!?!」

《片方は人間で間違いない。

もう片方は………おそらくサーヴァントだと思う》

おそらく？

《反応が通常のサーヴァントと違うんだ！》

霊基の基本構造は普通だけど、霊体の構成物質があまりにも異質すぎる!》

……全員、警戒を！

ただし、こちらからは絶対仕掛けないで。

そもそも敵かどうかも分からないし。

マシユはいつでも『盾』が使えるように準備しておいて。

「了解しました!」

さて、一体何者なんだろうね。

今回の件、何か知っていればいいんだけど。

「先輩！見えてき……えっ？」

どうしたマシユ！

……は？

《どうしたんだ2人とも？》

こっちは、今ほとんど映像が拾えない状態なんだ！

一体何があつたんだい？》

「……………ドクター、目の前に男性が2人います。

片方は、いつもと服装が違いますが、多分エミヤさんだと思います」

もう片方は初めて見る顔です。

自分と同じか、少し上ぐらいの年齢みたいです。

強い意思を感じさせる目をしています。

《おそらく現地のマスターとそのサーヴァントだろうね。

服装が違うって言うけど、どんな格好なんだい？》

「……………2人とも水着です。海パンです!!」

《……………は？》

あ、エミヤ（仮）の腹筋割れている。

なんであんなにムキムキなのに『筋力D』なんだろう？

「せ、先輩！どうしましょう!?

ひよつとして、これがジャパニーズ HENTAI という物なんでしょうか!?

エミヤさんが黒のブーメランです!」

大丈夫、落ち着いてマシユ。

混乱する気持ちはよくわかる。

実際、僕も混乱している。

でも僕の実家の近所のお兄さんも言っていた「予想外の事が起きたら、まずは『落ち着け』と。

だから、僕達はまず落ち着かないといけないんだ。

とりあえず、素数を数えてみようか。

ん? 初対面の少年が顔の右半分を右手で隠しながら、こちらに左手を向けて……………?

「…フランシスコツツ!!!!」

えっ?……………えっ!?

……………ザ、ザビエル?

「…ああ、やはりそうなのか。

君もザビエルなんだね」

僕の名は

side 海パン少年改め『第3のザビエル』

う〜〜聖杯聖杯！

今、人理修復のために全力疾走している僕は『人理継続保障機関フィニス・カルデア』通称カルデアのバイトの一般的な男の子。

強いて違うところをあげるとすれば人類最後のマスターという事かな！

名前は藤丸立香（ふじまるりつか）

そんなわけで突然迷い込んだ街を調べていたのだ。

ふと見ると道に一人の若い男が立っていた。

ウホッ！いいマスター！！

………そう思っていると突然その男は僕が見ている目の前で手をかざしてこう叫んだのだ。

「…フランシスコッツ！！！！」

ザビエル！！

…そうだ。

僕が。

僕こそが。

僕達こそが。

ザビエルだ!!!!

「ちよつとアンタ! しつかりしなさい!!

早く正気に戻らないと焼くわよ!」

「仕方ねえ! マシユ、一発ヤっちまえ!」

「はい! カルデアアーツ (峰打ち) 行きます!!」

ザビツ!?

一体何が?

「おいマスター! 自分が誰だか分かるか?」

僕?

僕は……『ローマ (藤丸立香)』だ。

「……………もう一発だマシユ!!」

「は、はい!カルデアバスター(峰打ち)突撃します!!」

ローマアアア!?

え?マシユ!?

何が起こきたんだい?

「先輩!御自分の名前と所属はわかりますか?」

え?

僕はカルデア所属のマスター『藤丸立香』だけど……

「ようやくお目覚め?……………し、心配したじゃない」

心配させてゴメンよ邪ンヌ?

つてイリヤちゃん!?

何かグツタリしているけど!?

《あちらの方々の格好がイリヤさんには刺激が強いかと思ひまして、ルビーちゃん印のお薬を使わせていただきました》

「ナイス判断よ、ルビー。」

……………愛しのお兄ちゃんの未来の可能性が『アレ』だなんてトラウマ物でしょうからね。

後でわたしにもお願い」

《お任せあれ〜♪》

お薬つて、それ本当に大丈夫なのかな？

「……………あの海パン野郎!!いきなりマスターに呪いをかけるなんて、舐めたマネしてくるじゃねーか!」

「……………覚悟はいい?」

ちよつとモーさんに邪ンヌ!

2人とも落ち着いて!!

なんか呪いとか催眠とか、そんな感じはしなかつただけけど…

《うん。こちらからもずつとスキャンしてたけど、全く異常はなかつたよ。

音声しか拾えていないけど、なんか藤丸君が相手のマスターのボケに感化されていただけみたいだね》

「フオウオウ?」

そうだね。

何故か知らないけどシンパシーを感じたんだ。

彼は一体何者なんだ?

side out

sideキシナミ

「おいキシナミ、向こうがかなり殺気だっているのだが。

君は一体何をやっているのかね！」

いや、なんとなく共感を感じまして。

ひよつとしたら、彼も『岸波白野』みたいな境遇なのかなと思ったのですが。

ここまでノリが良いという事は、アーチャーさんが危惧していたメイガスとは色々違いそうですね。

《…これで麻婆好きなら完璧》

《余が見る限りでは、その者達はアーチャーの格好に驚いていたようだが。

それにアーチャーを『エミヤ』と呼んでおつたが、なぜこやつらが我らの冬木での名前を知っておつたのだ？》

《…アーチャー。そろそろ名前や過去について、全部吐いてもらおうか？》

「おおお、落ち着いてくれマスター！」

今はまず彼らとどう接するかが大事だろ！」

と言つても、彼らはさつきからこっちを向いてくれませんが。

あちらのマスター以外は全員女性みたいですからね、さすがにアーチャーさんの格好は刺激が強すぎたかな？

《…それなら、さつき渡した服をアーチャーに着させて。

アーチャーのお気に入りだよ》

さつき端末に入れていたアレですか？

アーチャーさん、意外な趣味あつたんですね。

「なんだ、普通の服もあつたのか………つて！マスターこれは!!」

まさか、そんな裸革ジャケの趣味があつただなんて。

自分的には「シヨウジキナイワー」ですが。

「これは私の趣味ではない!!」

《…でも結構気に入っているでしょ？

「ハードにロックでキメるゼMASTER★」とか言つてたし》

うわぁノリノリじゃないですが。

《アーチャーよ。腹筋を魅せたいのは分かったが………そこまで露骨なのは正直どうかと思つて?》

「……………」

はくのん？アーチャーさんがお腹おさえて蹲ってしまったんだけど。

《…お腹冷やしちやつたのかな？》

「あ、あの……………少しいいでしようか？」

ん？なんだい、第3のザビエルよ。

「いえ、僕はそんな名前では…………」

む、違うのか。

ちよつと残念。

……………やはり『ザビエル』の座を争うライバルは、はくのんだけという事か。

「僕はカルデア所属の藤丸立香といひます。

貴方達は一体……………？」

ふむ。それに答える前に1つだけ確認。

君と一緒にいる5人は全員『サーヴァント』という事でいいかな？

「……………はい、その通りです」

なるほど、では質問に応えよう。

自分はこの冬木で行われる聖杯戦争の参加魔術師……………ではないよ。

「えっ!？」

数日前に、そこの洞窟で突然出現したイレギュラーだ。

……君たちと同様にね。

自分の名前は……色々あるけど、とりあえず今は『キシナミ』と呼んでくれ。横にいる、虚ろな目でハードな格好している顔黒は『アーチャー』さんだ。

所属は『ムーンセル』……でいいのかな？

「ムーンセル？……それは一体？」

そうだな。話すと長くなるんだが……とりあえず場所を移さないか？

今の自分達、間違いなく職質を受ける格好しているし。

それに、別行動中の仲間とも会わせたい。

話が長くなりそうだから、続きは自分達の拠点でしたいのだが。

「……少しだけ、みんなと相談させてください」

わかった。

でも急いでくれ。

そろそろ自分も寒さがキツくなってきたから。

side out

side 藤丸立香

みんな、どう思う？

《僕は反対かな。

言動に惑わされそうになるけど、彼らはあまりにも危険だ。

例のエミヤ擬きのサーヴアント、霊体の構成物質が異質だけでなく、単純な出力も桁違いなんだ。

その場にいるメンバーでは一対一では勝ち目が無い》

「オレはどっちでもいいぜ。

ありやマスターと同類みたいだから、深く考えるだけ無駄じゃねーか？」

「私も同感。あれはただのバカよ」

《ルビーちゃんとしましては、イリヤさんとクロさんにお薬を打ちましたからね。

そろそろ落ち着けるところにお二人を運びたいのですが》

マシユはどう思った？

「……そうですね。エミヤさ……アーチャーさんに関してはよく分かりません。

あの格好はさすがに無いと思いますが」

う、うん。

「キシナミさんに関して、なんとなく先輩と似ているような気がしました。

警戒する必要が無いと言いますか……」

「フオオウツ♪」

そうだね。

僕もそんな気がした。

なんというか、キシナミさんと眼があつた時に『共感』を覚えたんだ。

カルデアや聖杯の事をぬきにしても、一度話し合つてみたいと思つてしまつたんだ。

……何故か、彼もヤンデレで苦労しているような気がするし。

《……わかつた。でも着いていくなら警戒を怠らないようにしてね。

魔術師の拠点に行くというのは、本当に危険な行為だから》

わかつたよドクター。

お待たせしましたキシナミさん。

ではすいませんが、キシナミさん達の拠点の方へ………あの、何をやつ

ているんですか？

「…見ての通りだ。寒いから麻婆を食べていた」

うむ、わからん。

side out

ゴツドハンド白野

sideキシナミ

さて、新しく出会った藤丸君達を連れて江宮邸に帰還。

はくのん達と合流した後、自己紹介と情報交換をしたわけだけど……………

「月の演算装置……………ムーンセル・オートマトン？」

「月で聖杯戦争ですか？」

いきなり言われても信じられないよね。

こちらとしても、藤丸君たちの人理修復の旅には驚きだ。

「…人理焼却の件、ムーンセルが知ったら激怒不可避」

間違いない。

気の遠くなるような時間と手間をかけて記録した人類史が歪められてしまうわけだし。

万物全てを記録対象としているムーンセルにも限度というものがあるだろう。

「…これは、私かキシナミが地上に送り込まれて人理修復を手伝うパターン？」

おい馬鹿ヤメロ。

不穏なフラグを建てるんじゃない!

たしかに人理焼却の話聞いた時、「ひよっとして、自分達はこっちの件で喚ばれたのかな?」と一瞬思っただけ!!

《……うーん、ムーンセルだよね?》

やはりそれらしい記録はこちらのデータベースには無いようだ》
そうですか。

この世界にも無いそうですから、案外レアなのかな。

というかロマンさんだっけ?

なんか、通信ウインドウがノイズだらけなんですが?

《今回は事故性の高い急なレイシフトだったから、回線の繋がりが不十分なんだよ。

索敵もほとんど出来ないし、観測にもかなり手間取っている。

これでは藤丸君達の帰還は、予想以上に時間がかかるかもしれないね》

それでしたら、ここをこうすれば……

「!ドクターの顔がテレビに!」

《回線が一気に調子が良くなった!

これならそちらの観測も捗るよ!!》

《ふむ。今の回線を繋いだ技術、アトラス院のやり方に少し似ているね》

えーと、どちら様で？

「…モナリザ？」

《おっと失敬。私はカルデア技術局特別名誉顧問のレオナルド・ダ・ヴィンチだ。

ムーンセルの諸君、私の事は気軽に『ダ・ヴィンチちゃん』と呼んでくれたまえ》
そんな！

まさか、そういう事だったのか？

「…この事実はムーンセルに記録する価値あり」

《む？二人ともどうしたのだい？》

これが『ダ・ヴィンチコード』の真実。

「…まさか」

「…モナリザが自画像だったとは！」

《……………は？》

ずっとモナリザを加筆していたのは、単純に自分の見た目が加齢で変化していたからだったのか！

「…歴史記録と性別や見た目が違うのは、この業界では日常茶飯事」

《これは驚いた！

まさかそのように解釈してくれるとは！》

《笑い事じゃないよ！》

ムーンセルが記録装置だというならば、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』がその姿で永久登録されるかもしれないんだよ!？」

《私としては願ったり叶ったりだね。》

何よりもそちらの方が面白いとは思わないかい?」

「あの先輩……本当の事を教えた方がよろしいのではないのでしょうか?」

「別にいいんじゃないかな。ダ・ヴィンチちゃんだし」

《さてお互いの事もそれなりに分かったところで、そろそろ話を進めようか》

「一番話を脱線させていたのはダ・ヴィンチちゃんだったような……」

「……まだアーチャーと魔法少女の関係を聞いていないよ?」

《イリヤさん達にはかなり強めのお薬を使いましたからね。》

今晚は起きないとおもいますよ♪》

仕方ない、この件は明日にしようか。

「…アーチャー、逃げないでね？」

「……………冤罪……………のはずなのだが……………」

《とりあえず藤丸君とそちらにいるサーヴァント達を『カルデアチーム』、キシナミ君達4人を『ムーンセルチーム』と呼称する事にしよう》

《先程ロマニが言っていたように、我々カルデアではムーンセルが観測できていない。

一方で、君たちムーンセルチームも『人理焼却』を観測できていない。

ならば、ここはお互いを『そういう人達』という認識だけして、あまり深く関わらない方がいいだろう》

《そうだね。幸い、その世界にはムーンセルが無く、今のところ特異点化の兆候も見えていない。

お互いにとって無関係の世界というわけだ》

大事なものは、これからの行動というわけですね？

「…ムーンセルチームは、大聖杯のルーラー召喚を妨害した可能性がある。

聖杯その物に用は無いけど、聖杯戦争中の被害に関しては対処する予定」

《カルデアチームは、特異点化の兆しが無い以上、必要以上に干渉したくない。

レイシフトに問題が無いと分かり次第、すぐ戻ってもらうつもりだったけど……………》

《ムーンセルチームの情報からすると、これはレイシフトの事故ではなく、カルデアチー

ムも大聖杯に喚ばれた可能性が出てきた。

ルーラー召喚に割り込んだムーンセルチームはともかく、本来無関係のはずのカルデアチームが喚ばれたのはかなり不可解だ。

大聖杯そのものに異常が発生しているかもしれない。

その件もふまえて再計算する必要があるね」

「ドクター、やっぱり時間かかりそう?」

《キシナミ君が回線を繋いでくれて大分マシになったけど、やっぱり数日はかかるかな。

藤丸君の不在で一部サーヴァントが暴走しそうだから、出来る限り急ぐつもりだよ》

「……………ちなみに暴走しそうなのは、誰ですか?」

《藤丸君だつて予想ついているんじゃないかな?》

筆頭は清姫ちゃんと頼光さん。

あとは、最近仲間になった静謐ちゃんかな。

カルデアに戻ったらフォローしてあげてね》

「……………善処します」

『清姫』つてまさか『安珍清姫伝説』の!?

明らかにヤンデレじゃないすか! ヤダー!!

藤丸君、やっぱり君もヤンデレに苦勞していたんだね。

「……………ひよつとして、キシナミさんも？」

うん。詳しくは話せないけど、自分とはくのんは散々ヤンデレに追いかけ回された経験がある。

だが安心していい。

此処には君を追いかけ回す、気がついたら真後ろに立っているようなヤンデレはいないんだ。

勝手に部屋が掃除されているような事も、私物が時々無くなるような事も無いんだ！
一人で、眠れるんだ！！

「……………うっ……………ひっぐ……………ありが……………ありがとうございます…

……………いつも…誰かの視線を…感じて……………ベッドの下や…天井裏にも誰かいて

……………一人に……………なれ…なくて……………う……………うわああああ！！！！」

《……………これは……………！》

「せ……………先輩!？」

「……………ガチ泣き?」

いくらなんでも追い詰められすぎだぞ！藤丸君！！

side out

side 藤丸立香

……………ごめん、みんな。

恥ずかしいところを見せちゃって……………

「すみません先輩。」

まさかそんなに精神的に追い詰められているとは知らなくて……………」

いや別にいいんだ。

マイルームがいつの間にか片付けられているのも、最初の頃は物凄く怖かったけど、

最近は慣れてきていたし。

《それは絶対慣れちゃいけない類いものだよね!?!》

「……………先輩のこの状態からすると、後で掃除シフトを再考する必要がありますね」

……………え？

ひよつとして……………マシユも？

「はい。以前は私が毎日行っていたのですが、今は週に一度しか出来なくなっちゃいました……………」

《ちなみに今の掃除のメンバーは?》

「私を筆頭に、マタ・ハリさん、清姫さん、ブーディカさん、頼光さん、静謐さん、そしてスカサハさんです」

《影の国の女王まで！》

それ絶対、何かルーンを仕掛けられているよね!?》

……………どうしようドクター……………震えが止まらないよ…

「…ちよつといいだろうかマシユちゃん」

「何でしょうかキシナミさん？」

「…その掃除シフトに男性サーヴァントは入れられないだろうか？」

おそらく、今さら掃除を禁止しても誰も言う事を聞かないだろう。

ならば妥協点を見つけ、少しでも藤丸君が精神的に落ち着ける日を作っておくべきだ」

「そうですね……………たしかエミヤさんと呪腕さんが立候補していましたから、カルデアに戻ったら頼んでみます」

キシナミさん！本当にありがとうございます!!

「……………なぜか先程から、先輩がキシナミさんと仲が良すぎるような気がするのですが…」

《ふむ。私の推測ではムーンセルチームの二人、特にキシナミ君は、藤丸君と『同じ』だ

からだろうね》

「先輩と『同じ』？」

《うん。ここから簡単にスキャンした限りでは、キシナミ君もハクノちゃんも大した魔術師では無いんだ。

魔力量はそれなりにあるけど、魔術回路は本当に平凡だ。

それに二人の様子からすると魔術を修めたのはつい最近だと思われる。

『僅かに魔術回路があるだけの素人が、マスターとして聖杯戦争に巻き込まれた』というわけだ。

何処かで聞いた話みたいではないかね？》

《今のカルデアにはマスターは藤丸君しかない。

だから、本当の意味で藤丸君のマスターとしての悩みを聞ける人間がいない。

僕やレオナルドは『カルデアの仲間』だ。

サーヴァント達は、中には王様や師匠のような人もいるけど、最終的には『マスターとサーヴァント』という関係に落ち着いてしまう。

一番距離が近いマッシュでも『マスターとサーヴァント』であり『先輩と後輩』だ。

藤丸君からすれば全員仲間なんだろうけど、同じ立場の人はいない》

そう……なのかもな。

もちろんマシユやドクターにダ・ヴィンチちゃん、そしてサーヴァントのみんなは大事な仲間だ。

でも心の何処かは求めていたのかもしれない。

自分と肩を並べて戦う『仲間のマスター』を。

《冷凍睡眠中のマスター候補達は大半が典型的な魔術師だ。

もし起きていたとしても、彼らみたいに藤丸君と意気投合する事はまずないだろう。

今回の転移事故、彼らと出会えたという点では幸運だったね》

「……………そうですね」

《おや？マシユ、ひよつとして藤丸君を盗られたような気がして拗ねているのかい？》

「そ、そんな事ありません！

ドクターいい加減な事言わないで下さい!!」

「…ふむ。はくのん、任せた」

「…任せられた」

え？ハクノさんが無駄に洗練された動きでマシユの背後に回り込んで…………

なつつつ!!!!

マシユのマシユマロを背後から驚掴み!!!?

「ななななな！何をするんですか！

ハクノさん止めて下さい!!」

「…見た目以上のポリウム……だと!」

この程よい弾力と柔らかさ、まさしくマシユマロ。

もつと吟味しなくては!!」

「ふ、服の下に直接!」

駄目ですこんな事は!

あ、ちよ、そこはっ!!!!」

「……ここがええんか? そうなのか?」

「ど、どうしてこんな、あっ!!」

「……『持つ者』には『持たざる者』の気持ちは分からない。

だから、マシユにはわたしの気持ちは分からない」

『持つ者』? 『持たざる者』?」

……あつ……そういう事か。

「待て、落ち着きたまえマスター!

自分に無い物を求めるのは分かるが、揉んでもご利益はないぞ!」

「……アーチャー、後で蔵に来い。

今夜は寝かさんぞ女の敵め……!!」

「ヒイイイイツ!!!!」

「あ、あ、な、なんか、変なか、感じ、が!!」

《ロマニどうだい?》

《大丈夫、バッチリ記録しているよ。》

マシユの成長記録だしね!》

「削除して下さい!今すぐ、確実に、削除、を!!」

つてハクノさん!?下は!!下は本当に駄目です!!ご容赦を!!!!」

「…マシユの後輩力が強すぎて、自分が抑えられない。》

マシユは魔性の後輩キャラだった!」

「むう、はくのんズルいぞ!余も混ぜよ!!」

「……………おい聖女モドキ、おまえ顔スゲー真っ赤だぞ?」

「う、うるさいわねヤンキー騎士!」

どうせあんただって、その仮面の下は似たようなもんでしょ!」

《ふっふっふっ♪イリヤさん達に良い資料が出来ました。》

明日が楽しみですね♪》

……………キシナミさん、そろそろ止めた方がいいのでは?

「…大丈夫だろう。アレははくのん流のスキンシップだ」

「フオウ。フオウフオウフオウフオウフオウ!!」

「…なに？」

『お団子の食べ過ぎでお腹がいい感じになっている。胸は見た目以上、マシユは着やせするタイプだった。まさしくデンジャラス・ビースト!!』だと!?

その話詳しく聞かせてもらおうか、キヤスパリーグ!!」

キシナミさん!言っている事分かるんですか!?

s i d e o u t

ぐだ男の冬休み

sideキシナミ

あの後、カルデアチームもこの江宮邸を使ってもらう事になった。

料理番は言うまでもなくアーチャーさんだ。

はくのんは思う存分マシユちゃんを揉みしだいた後、アーチャーさんを蔵へと引き摺っていった。

すまないアーチャーさん、自分でははくのんを止められない、本当にすまない。

揉みくちやにされたマシユちゃんは藤丸君に預けたけど……マシユちゃんの息が妙に艶っぽかったような。

……はくのんがマシユちゃんのスイッチを入れてしまったかもしれない。

すまない藤丸君、我が家には避妊具が無いのだ、本当にすまない。

何はともあれ、この家も大所帯になった。

自分たちには聖杯戦争の被害を食い止めるという役割があるけど、明日からの生活が楽しみでもある。

side out

エピソード1 『大人の階段』

side キシナミ

今日も良い天気だな。

アーチャーさんの朝御飯までまだしばらくありそうだから、軽く散歩してこようかな

?

「……おはようございます、キシナミさん……」

ん？

やあ藤丸君、お……は……よう……つて！ 凄い隈だよ！！

ひよつとして寝てないのかい!?

……もしやマシユちゃんと『ゆうべはお楽しみに』？

「……いえ、そちらは大丈夫でした。」

息を荒くしたマシユに馬乗りされて服を脱がされた時はかなりヤバかったです、なんとかなりました。

さつき確認したら、マシユはハクノさんが揉みくちやにしたあたりからの記憶が曖昧

みたいなので、適当な事言って誤魔化しましたよ…」

なんか、はくのんのせいで色々ゴメンな。

でも、それなら何故そんなに眠そうなんだい？

久々に1人になれたんだろ？

「……はい。久しぶりに視線や気配を感じずに布団に入ったのですが、どうも寝付けなくて。」

僕は枕とか気にしませんし、野宿だつてよくしています。

カルデア入る前は1人部屋で寝ていました。

こんな事は始めてです」

………まさか、これは。

「キシナミさん？何か心当たりがあるのですか？」

………あくまでも仮説なのだが。

だが、もしこの仮説が当たっていたら、藤丸君は非常に危険な状態だという事になる。「な、なんですか!?!僕の体に何が起きているんですか!?!」

おそらく君は………1人では眠れない体になっているのではないだろうか。

「………えっ?」

ヤンデレ女性達をはじめ、誰かしら常にいる状態が続きすぎて、それに慣れすぎてし

まったのではないかな？

それこそ、私室に1人でいたら逆に落ち着けなくなるみたいな。

身も蓋もない言い方をすれば、君はヤンデレ達によって『開発』されてしまったのかもしれない。

「……………は、ははっ！う、嘘ですよね！……………そんな事…あるわけが!!」

ああ、これはあくまでも最悪の予想だ。

だが、いずれこうなる可能性は十分ある。

「……………僕は……………一体どうすれば……………」

とりあえず、一度男性陣だけで集まって話し合おう。

ドクターはよく分からないけど、アーチャーさんは人生経験豊富らしいから、なにか良い案を出してくれるかもしれない。

あとこの家にいる間は、寝る時は居間に布団敷いて、自分やアーチャーさんと一緒に雑魚寝するべきかな。

マシユちゃん達には「男子会をする」とか言っておけばいいだろう。

「……………」迷惑をお掛けします」

いいえ。

前にも話したけど、自分はヤンデレの恐ろしさが身に染みている。

……さすがに藤丸君には劣るけど。

最後に大事な事がある。

「なんででしょうか？」

この事、絶対に女性陣には知られてはいけないよ。

もし知られてしまったら……どうなるか、分かるよね？

「それは……マシユにもでしようか？」

自分個人の見解では、マシユちゃんは相当危険だと思う。

なにしろ後輩キャラだし。

というか、昨晚襲われたばかりでしようが。

とりあえず、この件は改めて話し合おう。

ほら酷い顔しているから、顔を洗ってきなさい。

「……はい……わかりました……」

まさか、自分やアーチャーさんよりも女難が酷いのがいるとは……

せめて、ここにいる間ぐらいはしっかり休んでほしいものだ。

side out

エピソード2 『エミヤ』

sideキシナミ

「わたしがイリヤの娘つつ!？」

「わたしがクロのママつつ!？」

《……なるほど。昨晚からやたらイリヤさん達を気にしていたのは、そういう事でしたか。

ひよつとして、そちらのアーチャーさんが父親だと思っていたのでは?》

クロエちゃんの格好がアーチャーさんと瓜二つだしね。

それにイリヤちゃんについて意味深な事言っていたし。

「……このわたしが……イリヤの姉でも妹でもなく……娘!？」

「……まだ小学生なのに……ママ扱い!？」

《クロエさんの現界時の事を考えれば、そこまで大ハズレというわけではありませんが。

とりあえず双子扱いが妥当ですかね。》

たしか御両親の名前は『アイリスフィール・フォン・アインツベルン』と『エミヤキ

リツグ』だったと思いますよ。》

じゃあ、うちのアーチャーさんとは無関係という事でいいのかな?。

《ところがそうでもないんですよ。

カルデアには、ムーンセルのアーチャーさんと同じ姿をした、英霊エミヤというサーヴァントがいらつしやいます。

記憶がどうのと誤魔化していたので、『素直になれるお薬』を使ったところ、どうやら生前の名前は『エミヤシロウ』だったらしいのです。

この名前、イリヤさん達の大好きなお兄ちゃんと同じ名前なんですよね〜
エミヤシロウ!?

その名前って、BBが用意した名前と同じだ。

その名前を聞いた時、アーチャーさんの様子がおかしかったけど……

「……それはつまり……」

《名前だけだったら同姓同名の可能性もあったのですが、明らかに『イリヤさんじゃないイリヤスフィール』の記憶を持っているようでした。

第二魔法の関係者の視点から見ますと、『イリヤさん達のお兄ちゃん』『カルデアの英霊エミヤ』『ムーンセルのアーチャー』は平行世界の同一存在の可能性が高いです。

大元になった『シロウ』という人物は同じでも、その後の人生が異なり、違う結末を迎えたのでしょうか》

「……ムーンセルの『時空の歪み』で戦ったアーチャーと同じという事かな?」

ひよつとしたら、そのアーチャーこそが英霊エミヤだったのかもしれないね。

という事は、クロエちゃんの格好はコスプレみたいな物なのかい？

《そこは結構込み入った事情になってしまっているのですが……》

イリヤさんクロエさん？どこまで話しても大丈夫でしょうか？》

「……………イリヤがわたしのママ……」

あれ？という事は、お兄ちゃんはパパ？

……………これはこれで悪くないかも……」

「だ、だめだよお兄ちゃん。

わたし達、兄妹なんだよ……？」

それに、わたしはまだ小学生だし……ママなんて……早すぎるよ……」

《……………お二人ともいい感じにトリップしておりますので、私基準で話せる範囲でお話

しますね〜》

なんかスマンな？

《まず最初の前提としてイリヤさん達はカルデアとは別の世界に住んでいます。

ムーンセルがあるかどうかは知りませんが、少なくとも私の製作者は何も言っていない

せんでしたね》

「……ムーンセル所属の私が言うのもなんだけど、ここ最近、平行世界のバーゲンセール」

《その世界でイリヤさんは普通の小学生でした。

日本では非常に珍しい銀髪紅眼だったり、名前がドイツの貴族みたいだったり、家に双子メイドや血の繋がらない兄がいたり、御両親揃ってずっと海外で活動していたりしますが、イリヤさん本人は一応普通の小学生でした》

：『普通』とは一体？

《ある日イリヤさんがお風呂シーンで視聴者サービスしている時、私ルビーちゃんと運命の出会いをしたのです！

ルビーちゃんと出会ったイリヤさんは魔法少女になり、住んでいる町に散らばった正体不明のアーティファクト『クラスカード』を回収する事になったというわけです♪

ちなみに、美遊さんという『クールだけど本当は心優しい』『心開いてからはイリヤさんにデレデレ』な青いライバルキャラもいますよ♪》

「…格好だけでなく、本当に魔法少女やっていたんだ？」

《色々血生臭い事があったり、イリヤさん自身が知らなかった出生の秘密があったりしましたけどね》

そのあたりは今回は割愛します。

この問題の『クラスカード』ですが、どうやらカードを触媒にして術者に英霊の力を限定的に付与する礼装みたいなんです。

それでクロエさんは色々あって『弓兵のクラスカード』と融合してしまったのです。当時の私達は何の英霊かは知らなかったのですが、カルデアに来てからイリヤさん達と縁のある『英霊エミヤ』だと分かったのです。なるほど。

クロエちゃんは『違う世界のお兄ちゃん』の力を受け継いでいたというわけだね。よかつたねアーチャーさん！逆転無罪だよ！！

アーチャーさんは小学生に手を出していなかった！

「…アーチャー、私は信じていたよ」

はくのん…あんたあれだけアーチャーさんにトラウマ植え付けておいて、何を今さら……

あれ？アーチャーさん、どうしました？

何やら考え込んでいるようですが。

「…………ルビーの話を聞いて、長い間疑問だった件について、ある仮説がたつた。

私の、いや『英霊無銘』の状態についてだ」

『英霊無銘』の状態？

それは一体？

「マスター達は薄々気付いていると思うが、私は比較的新しい時代の出身だ。

いや、この際ハッキリ言おう。

ムーンセルの外の地上に、生前の俺がまだいる可能性がある」

「…それって、アーチャーはこれから英霊になるといふ事？」

「おそろくな。」

他のサーヴァントと地上の状況や西欧財閥について話し合った時、私だけは妙にリアルな実感があつた。

俺は西欧財閥に関係していたか、もしくはレジスタンスに所属していたのだろうか
ふむ、なるほど。

でもそれが一体……あれ？

何か違和感が？

「…アーチャーが現代人なのは分かつた。

でもアーチャー、それなら生前はどうやって投影魔術や固有結界を使っていたの？
たしか、私達の世界の地上では魔術が使えないはずじゃ？」

そうだ！

ムーンセルの外では、もうマナが枯渇している！

それに『投影』というからには、一度は『本物』を見る必要がある。

でも、地上がそんな状態ではオリジナルの宝具なんて見れるわけがない。

これって一体？

「ああ、その点が問題になってくる。

自分で使っておきながら、私も疑問だった。

私の推測では、クロエ君の状態に近いと思う」

えーと？

「『俺』がムーンセルに登録された後、『魔術が途絶えなかった平行世界の俺』の情報を付加したのではないだろうか？

『俺』にはたしかに個人としての人生があったが、ムーンセルに登録したのは『正義の味方の概念』

つまり『俺』に関しては、個人について詳しく記録する必要がなかったわけだ。

さらに『俺』は英霊としてはあまりに弱すぎた。

ゆえに『俺』は違う『俺』を足された『私』になったのかもしれない」

な、何やらこんがらがってきたけど……

「…アーチャー、もしかしてこの世界は」

「……この世界に来てから知らない光景や知識に苦しめられてきた。

このデジャヴは、追加された『俺』由来の物なのだろう。

そして……この世界は『英霊エミヤ』が生まれた世界かもしれない」

アーチャーさん……その貴方達の大元になった『シロウ』という人物は、そういう運命になりやすいのかな？

「どうなんだろうな。」

私は平行世界とかには詳しくはないが、これがいわゆる修正力というやつなのかもしれない」

《今のところイリヤさんのお兄ちゃんは、そっち方面の兆しはなさそうでしたね。》

そもそも何がトリガーになっているか不明ですが》

「…アーチャーが『正義の味方』を目指したのは、たしか大災害によるサバイバーズギルトがきっかけ。」

もしや大聖杯がルーラーを喚ぼうとしたのは、その大災害関係なのかも」

もしそうなら、何としても阻止しないとね。」

side out

エピソード3 『ブリテンファンタジー』

side 藤丸立香

「……ところでサー・モードレッド。

その兜はどういう構造になっている？

見たところ、鎧と一体になっているようだが」

「……たしかに気になる」

うーん。モーさんが良いなら、キシナミさん達に外して見せてあげてほしいんだけど。

「見せ物じゃねーんだけど、コイツらなら別にいいか」

ありがとうモーさん。

ん？マシユ、どうかした？

「先輩！キシナミさん達にモードレッドさんの性別の事は話していますか!？」

……しまった！

えーと、キシナミさんハクノさん。

モーさんは……

「……これは！」

「……なんと！」

「………なんだよお前ら、言いたい事があるなら言えばいいだろうが」

「……それでは」

「…セーの」

「…可動式の兜とか、マジでイカすな！」

……………へっ!?

「…これが5世紀後半の技術だと。

ブリテンの技術、ヤバイな」

「…鎧のデザインも装飾と実用性の両方をバランスとっている。

これは良い物だ」

……………えっ!?

「……………へっ、コイツの良さが分かるなんて、なかなか見所があるじゃねーか！

気に入ったぜ！」

……………なんか意気投合している。

てつきり、モーさんの性別の事で一悶着あると思っただけだ。

「ねえ、多分なんだけど」

どうしたんだい、邪ンヌ？

「あの2人もアンタみたいに、色々なサーヴァントを見てきたんでしょ？

今さらヤンキー騎士の性別ぐらいでは驚かなくなっているんじゃないの？」

なるほど、そういう事か！

ダ・ヴィンチちゃんの時も「歴史記録と性別や見た目が違うのは、この業界では日常茶飯事」って言っていたぐらいだし。

……僕は人理修復をしているけど、人類史の予想以上のカオスっぷりには、時々頭を抱えたくなる事もある。

性別や見た目、違いすぎだろ……

side out

エピソード4『ヤンデレ』

side キシナミ

夕飯は済み、入浴も済んだ。

というわけで、第1回ムーンセル&カルデア合同会議（男性限定）を開始します。

司会は自分こと、キシナミ。

参加者はアーチャーさん、藤丸君、そしてロマンさんになります。

「まあ、端末で深夜の警戒をしながらになるけどな。

宜しく頼む。」

夜食が必要なら言ってくれ」

「宜しくお願いします。」

……そして僕を助けて下さい」

《こういうの初めてだからね。

お手柔らかに頼むよ》

自分も初めてで、どう進めればいいのかはよく分かりませんが。

とりあえず議題を提示して、それについて色々意見を出し合う形でいいですかね？

全員、今回の議題については聞いていますか？

《うん。まさか藤丸君にそんな事が起きていたなんて…》

「正直な話、私以上の女難持ちのキシナミより更に上がいると思わなかったぞ」

《カルデアには女性サーヴァントはかなり所属しているけど、その大半が藤丸君に好意を抱いている。

程度の差はあるけどね。

好感度が危険なレベル、いわゆるヤンデレ級なのは『清姫』『源頼光』『静謐のハサン』の3人かな？

ただ、これは第三者視点だから、潜在的にはもつといるかもしれない》

『源頼光』というと、平安時代の神秘殺しの？

また女性なんですわね。

その3人は説得とかは出来そうですか？

《静謐ちゃんは理性的だから、藤丸君が直接言うか、他のハサンが嗜めれば大丈夫だと思
うよ。》

だけど他の2人は不可能だ。

何しろ狂化EXのバーサーカーだ。

言葉で止めるのは至難のわざだよ》

「狂化EXのバーサーカーだと！

それは、意志疎通できるのか？」

《会話に関しては全く問題ない。》

むしろ他のバーサーカーよりも流暢に話すぐらいだ。

でも、何かが致命的に狂っている。

周囲から理解できない理由で狂っている。

だからこそその狂化EX（測定不能）なんだ》

これは難敵だね。

そういう場合って、狂っているという自覚ないよね？

さらには、本人でも分からない理由や衝動で地雷が爆発する事もあるよね？

「話が逸れるが、よく清姫と契約したな？」

源頼光は日本最高クラスの神秘殺しだから、多少のリスクがあつたとしても契約する事もあるだろう。

だが、清姫は伝承的にはヤンデレぐらいしか特徴の無い、普通の娘だったはずだぞ。戦力面では大蛇化や追跡能力ぐらいいしかメリツトは無さそうなのだが」

《そ、それはね……》

「……違うんですアーチャーさん。」

清姫は此方から契約したのではなく、向こうから押し掛けてきたんです」

え？

《うん。フランスの特異点を攻略直後、召喚陣が勝手に起動して、清姫ちゃんが出てきたんだ。

フランスの特異点で清姫ちゃんは野良サーヴァントだったんだけど、どうやら藤丸君を安珍様認定したらしく……》

「無理やり着いてきたという事か。」

思い込みだけで大蛇化したというのは知っていたが、まさかこれほどとは！」

……押し掛け……イケ魂……良妻狐……

うっ、頭が。

「しかし、それではどうやって清姫からは逃げられんぞ。

此方が契約破棄しても、また押し掛けてくる事になるだろう」

あの、この件はカルデアの男性サーヴァントを含めて大々的に議論すべきだと思います。

このままでは、藤丸君は死後や来世に渡って女性サーヴァントに追い詰められる事になりそうですよ。

「……そうですね。女神のサーヴァントもいますし、このままでは僕は人間として死ぬないかもしれません」

目のハイライトが無いぞ藤丸君！

気をしっかり持て！

人理修復後、自分達のムーンセルに逃げ込むか？

「ムーンセルには、ムーンセルが記録した清姫や源頼光がいる可能性がある。」

多分、状況は悪化するぞ」

《おっと、ちよつと待って。

………うん、今回も大丈夫だったか》

どうかしましたかドクター？

《昨晚から藤丸君のいる所に向かおうと無理矢理レイシフトしようとするサーヴァント

が何名かいてね。

今ので8回目だよ。

『藤丸君の所に確実にに行けるかは分からない』『今行くと、再計算する事になるから、藤丸君のカルデアへの帰還が遅くなる』と通達してあるのだけど、なかなか聞き入れてもらえなくて。

現在、レイシフト施設の付近にはレオニダス・ゲオルギウス・ヘクトール主導による防衛網を展開してもらっている。

今回も守りきったみたいだよ

「……もういやだ。

おうちかえりたくない……」

大丈夫か藤丸君!!

こうなったら、自分が藤丸君に付いて行ってメンタルケアをすべきか!?

「その場合は、カルデアがタマモナインに眼をつけられる可能性があるのだが……」
《タマモだったら既にカルデアにいるけど。

それも2人》

……八方塞がりか。

「ぼくにすくいはないんですね」

「むっ？この反応は……」

みんなすまない、会議は一時中断だ。

端末に反応あり、何かあったようだ。

場所は……冬木市のセカンドオーナーの邸宅のようだな」

分かったよアーチャーさん。

はくのとセイバーを連れてくる。

「僕にもその映像を見させてもらえませんか？

かなりの数のサーヴアントを見ているので、何かアドバイスできるかもしれません」

藤丸君、大丈夫なのかい？

「大丈夫ですよ、キシナミさん。

僕はこれからも頑張つていくから」

お、おう……

なんて悲しい微笑みなんだ……

side out

A U O

sideキシナミ

アーチャーさんが、冬木市のセカンドオーナー『遠坂氏』の邸宅で異常が発生したのを察知。

その時会議中だった自分・アーチャーさん・藤丸君、夜更かしをしていたはくのん・セイバー・マシユちゃん・モードレッドさん・ジャンヌさん・ルビーが一度居間に集まる事になった。

ロマンさんにも映像越しに参加してもらっている。

ちなみにイリヤちゃんとクロエちゃんは既に寝ていたから除外、小学生だしね。

そして自分達は、この世界での最初の戦闘を見る事になった。

……いや、正確にはこれは『戦闘』ではない。

むしろ『蹂躪』もしくは『処刑』と言うべきかもしれない。

「……………」

先程まで奇怪なダンスをしながら遠坂邸の結界をすり抜けていた黒いサーヴァント。それが圧倒的な存在感を放つ金色のサーヴァントによって討たれた。

金色のサーヴァントの背後の空間が歪んだと思つたら、無数の宝具を射出し黒いサーヴァントを串刺しにしていた。

……………ふむ、みんなどう思う？

「英雄王ですね」

「間違いなく英雄王ギルガメッシュです」

「…まさしくAUOです、本当にありがとうございます」

うん、AUOだ。

他にあんな英霊いないよね。

ちなみにコメントは上から順に藤丸君・マシユちゃん・はくのんである。

「待て奏者にはくのんよ。」

そなた達、あの金ピカと面識があるのか？」

うん。月の裏側から脱出する時に色々力を貸してもらったんだ。

……………あれっ？

「何を言っておるのだ奏者よ！

月の裏側からの脱出は余と一緒にだったではないか。

余はあのような者は知らないぞ!？」

「私は少々微妙なところだな。」

あの英霊に関しての記憶は多少あるが、やはり月の裏側で出会った記憶は無い。マスター、君も英雄王と出会っているのかね？」

「…記憶が虫食い状態だけど、間違いない。

あんなジャイアアニズムの塊、一度見たら忘れられない」

はくのん、A U O と言えよ？

「…ウザい武器自慢」

固い床。

「…美味しい飴」

走ると鎧が五月蠅い。

そして何よりも

「…A U O キヤストオフ！」

うん。自分達が出たA U O は同じだね。

「なるほど、そういう可能性もあるのか。

マスター達は月の裏側に落ちている。

月の裏側はあらゆる可能性が『同時に』存在する空間だ。

同じ人物の性別違いや選択違いがいたり、異なるパートナーとの契約の記憶があったり。

おそらく、マスターとセイバーが、キシナミと私が組んでいた可能性もあるのだろう。それと同様に、マスター達が英雄王ギルガメッシュと月の裏側で契約する可能性もあったという事なのかもしれん。

その場合、私とセイバーは月の裏側の攻略には参加しない事になるから、私達は英雄王とは面識が無いというわけだ」
なるほど。

つまり、今の自分は『セイバーと一緒に月の表裏を生き残った、男性の岸波白野』にいくつかの選択違いの記憶が追加されている状態なのか。

ひよつとしたら、現在進行系で月で暴れているタマモナインと契約していた可能性もあったかもね。

そういえば、藤丸君もAUOと面識があるんだね。

「はい。契約はしていませんが、特異点擬きで時々出会う事がありました。

あと、カルデアには幼い頃の英雄王、通称『子ギル』がいます」

子供の頃は賢王だったというから、その時の姿か。

《見る限りでは、冬木に現れた英雄王は野良サーヴァントではなく、魔術師によつて喚び出された聖杯戦争の参加サーヴァントのようだ。

まさか、あの英雄王を喚びだすとはね……》

まともにコミュニケーションをとるのも困難ですよ。

A U Oとお話するのは本当に大変でした。

あれだけ我が強いと令呪の強制力を弾く可能性もあります。

そもそも『王の財宝』の中には令呪のストックがありましたから、おそらく令呪強奪や令呪無効化もできるでしょう。

《聖杯戦争を勝ち抜くのに、強力なサーヴァントを求めるといえるのは分かるよ。

でも、強力過ぎるサーヴァントは魔術師の手に負えないという事をセカンドオーナーは理解しているのかな？》

カタログスペックだけで選んだんですかね？

喚び出した時に即殺されなかっただけマシなんですよ。

A U Oに殺された黒いサーヴァントですけど……

《あれは『暗殺者』のサーヴァント、それも典型的なアサシンである『ハサン・サツバーハ』達の1人だろうね》

A U Oが前に言っていた『破産』……じゃなくて『ハサン』が彼でしたか。

自分達が月で出会ったアサシンは、氣と体術で透明化した上で即死パンチを打ってきた御仁でしたよ。

素手で剣とやり合っているのを見て「中国武術ヤベエ」と心底思いました。

「キシナミ、一応言っておくが、月で戦ったアサシンは非常に特殊な例だからな？」

本来のアサシンはマスター殺しがメインで、直接的な戦闘力はかなり低いからな？」

「…敵マスターへの直接攻撃がペナルティとられる月の聖杯戦争では、かなり致命的」

むしろペナルティ上等という認識でいかないと、ムーンセルではハサンは戦えないみたいだね。

ロマンさん、ハサンの能力で特筆すべき点はありますか？

《ハサン・サツバーハ》という名前は、イスラム教の伝承に残る『暗殺教団』の教主に代々襲名されてきたものであり、該当者は19人だと言われている。

歴代ハサンは19人全員違う能力を持っていたらしい。

共通しているのは『気配遮断』スキルを持つ事かな？》

「奏者よ。暗殺者は既に死んでおるのだから、別に気にする必要は無いのではないか？」
さっきの戦闘、ちよつと違和感があつてね。

「…AUOには気配を察知するようなスキルは無かつたはず。」

『王の財宝』の中には何かあるかもしれないけど、わざわざ自分で迎え撃ちに行くような性格ではない」

だからハサン迎撃は、AUOのマスターの指示の可能性が高い。

でも、そうなるとマスターはハサンの気配遮断を見破っていた事になる。

《それはいくらなんでも無理だろうね》

うん。つまり、さっきの戦闘には何かカラクリがあるとと思うんだ。

仮説はいくつかあるんだけど、ハサンの能力次第なんだよね。

「僕達が人理修復の過程で出会ったハサンは全員で5人。

でも1人はすぐに死んでしまったから、能力が分かるのは4人だけです。

呪殺能力を持つ『呪腕のハサン』、百人近くに分裂できる『百貌のハサン』、毒殺能力を持つ『静謐のハサン』、そして円卓の騎士を真正面から圧倒するほどの戦闘力を持つ『初代山の翁』になります」

「円卓の騎士を圧倒だとい!」

それは本当に暗殺者なのか?」

「『ハサン殺しのハサン』を自称していました。

武器も武骨な大剣で、『聖者の数字』発動中のガウエインを圧倒していたそうです」

「…マジで!」

あの借金取りのフルスペック状態を圧倒とか恐るべし。

しかし、その4人なら『百貌』が怪しいかな。

「…キシナミが言いたい事は、こういう事?」

ハサンはわざと気付かれるように接近してA U Oに迎撃される。

一見すると脱落したように見えるけど、ハサンは分裂能力があるから、実はまだ死んでいない。

脱落したと見せ掛けて、他のマスターの背後を狙っている。

屋外で死んだのは、他のマスターに見せつけるため」

うん。さらに言うならば、AUOのマスターとハサンのマスターはお互いの動向を把握している可能性が高い。

AUOを向かわせるための説得の時間が必要だからね。

ひよつとしたら、マスター同士で同盟を組んでいる可能性もある。

「それは恐ろしい組合せですね。

人海戦術で情報を集めて、圧倒的な戦闘力を持つ英雄王で他のサーヴァントを討つというわけですか。

しかも、隙を見て敵マスターの背中也狙う」

かなり有効な手だね。

この戦法の弱点は、AUOの扱いつらさが最悪だという点だけだろう。

しかし、AUOが出てきたとなると、今後どうするかな？

《あの英雄王が絡むと何が起きるか本当に分からない。

カルデアチームは原則的に、遠坂邸への接近は禁止すべきだろう。

極力関わりは持たない方がいい》

ムーンセルチームも同じかな。

規格外のサーヴァントだけど、聖杯戦争の正規参加者でもある。

たしかに性格はジャイアンだけど、民間人を虐殺したりするような性格ではないはずだ。

マスターもセカンドオーナーだから、進んで冬木市に被害を出すような事もないだろう。

なんかヤバそうだったら裏方でフォローするぐらいでいいんじゃないかな。

ふむ。あの後解散して、そろそろ寝ようかという話になったはずなのだが。

はくのかん、何故自分は蔵に連れ込まれているのかな？

ついでに、何故自分は君に押し倒されているのかな？

さらに、何故自分に馬乗りになっているのかな？

こういう事はアーチャーさんにしてあげるべきだろう。

アーチャーさんなら居間にいるよ。

もつともアーチャーさんなら「年頃の娘がこんなはしたない事をするんじゃない！」とか説教するかもしれないけど。

「…キシナミをちよつと搾ろうかと。」

朝までノンストップ」

……………冗談だよね？

「…この後の返答次第。」

キシナミ、さっきの戦闘の事だけど、最後のアレには気付いている？」

……………なるほど、それが聞きたかったのか。

はくのものも気付いたという事は、自分の見間違いではないのだね。

自分も気付いているよ。

ハサンを宝具で串刺しにして、AUOが消える直前だよね。

映像越しで一瞬だけど、AUOと自分達『岸波白野』の目が合った。

自分達の存在が、あの裁定者に気付かれたかもしれない。

s i d e o u t

s i d e ???

下らぬ召喚者、下らぬ催し。

そう思っていたが………

なるほど、この記憶は『そういう事』か。

この催し、少しはマシになったやもしれん。

前に話したよな？「本来、我はおまえのような人間に倒される側なのだ」と。ならば、我が雑種よ。

此度は、こちら側で貴様らを再び裁定してやろう。

有象無象の刃で、我にどこまで抗えるか、見せてもらおうではないか。

s i d e o u t

そして事態は動き出す

sideキシナミ

AUOとハサンの戦いがあつた翌朝、ムーンセルチームとカルデアチームで話し合つた。

AUOの存在が確認された事で警戒レベルを大幅に引き上げ、『外出時は必ずサーヴァントを二人以上連れていく』『AUOのマスターと思われる遠坂氏の邸宅には基本近づかない』『AUOが出現したら、逆探知を避けるために、一度監視を中断する』事を決めた。

何しろ、自分達のせいでAUOが積極的に動き回ってしまう可能性がある。

聖杯戦争の自主的な監視がしづらくなってしまいが、こればかりは仕方ない。

この日は、食料の買い出し以外では外出せずに、みんなでマリ○カートや桃○などをして過ごした。

アーチャーさんもノリノリで「別に頂点をとつてしまつても、構わんのだろう？」とか言つて参加していた。

直後、モードレッドさんに抜かれていたけど。

そしてその夜、また新たな動きがあった。

沿岸部の倉庫街で、二人のサーヴァントによる戦闘が発生したのだ。

片方は見えない武器をふるう、青い少女騎士。

もう片方は二槍を使う、青いイケメン騎士。

おそらく、セイバーとランサーだろう。

現在、居間は

「聖剣の方の父上……だと!？」

「お、落ち着いてねモーさん?」

「そんな……ママが……どうして!？」

《あのイリヤさん? あの方は平行世界の人物ですからね?》

はつきり言ううと修羅場です。

どうも、セイバー陣営のマスターとサーヴァントがカルデアチームと因縁が深いよう
で。

「…モードレッドの『父上』という事は、セイバーはブリテンのアーサー王で間違いなし」
「うむ。最優のクラスと呼ばれているセイバーの中でも、最高クラスの実力者であろう」

「……私は……俺は……あのセイバーを知っている？」

これも英霊エミヤの記憶なのか？」

我らムーンセルチームもアーチャーさんが絶賛混乱中です。

しかし、この人がガウエインが仕えていた王様か。

「…ガウエイン曰く『聖剣をぶっぱするだけの簡単な役割』」

真面目そうな雰囲気だけど、結構脳筋のかな。

「先輩が契約した方の中に、黒く染まった聖槍のアーサー王がいますが、そんなに脳筋と
いうわけでは。」

というか、月のガウエイン卿はそんな事を言っていたんですか!？」

うん。月の裏側で色々やらかしていたよ。

ヤミ金の借金取りとか。

ランサーは誰だろ？

二槍使いというと…

「僕達は彼とアメリカの特異点で会っています。」

真名『デイルムッド・オディナ』、ケルト神話のフィオナ騎士団の筆頭騎士です」

おお! 『輝く貌』か!

ランサーで召喚されたから剣の方は持ってきてないのかな？

「奏者よ。毎回思うのだが、何故そんなに神話や歴史に詳しいのだ!」
そりや、月の聖杯戦争は情報が生命線だし。

「…ケルト系はゲツシュを攻めれば、ジャイアントキリング余裕です」
えーと? ランサーのマスターは姿を隠しているけど、セイバーのマスターは姿を現しているんだね。

そして、セイバーのマスターが

「わたし達のママ、『アイリスフィール』よ。

ママがいるという事は、パパも近くにいるかもしれないわね」

「クロ……なんで、ママが?」

イリヤちゃん、なんか今にも泣き出しそうな感じなんだが。

「……イリヤ。わたしが前に言った事は覚えている?」

わたし達『イリヤスフィール』は『聖杯戦争』のために用意されたという事を」

「う、うん……」

《みなさんが裸の付き合いをしながら話していた件ですね?》

「………どうやら、ママも同じ境遇だったみたいね。

そして、この聖杯戦争こそがママの一番なんでしょう」

《うーん? たしか『イリヤスフィール』が生まれた事がきっかけで、イリヤさんの御両親

は使命だか夢だか理想だかを捨てて、家族を選んだんですよね？

という事は、この世界では『イリヤスフィール』が生まれなかつたんですかね？」

「……………もしくは『イリヤスフィール』が生まれても諦められなかつた、かな？」

「そん……な……!？」

……………な、なにやら随分と込み入った話になっているみたいだ。

……………ん？

「……………デイルムツドがアーサー王を罠にかけて、クリティカルヒット。

直後に三騎目が乱入。

空飛ぶ牛車でダイナミックにエントリー。

多分、ライダー。

ライダーのマスターらしき少年が同乗」

ふむ。新しく見る顔だね。

藤丸君、真名は分かるかい？

「……………すいません。あのライダーは僕も初めて見ます。

ですが、あの格好と似たようなのを見たような気が……………」

「先輩、私見ですがアレキサンダー君と少し格好が似ているような気がします。

ひよつとしたら、関係者かもしれませぬ」

となると、父親のピリッポスかな？

もしくは、子供の4世という可能性もありそうだ。

「あの先輩？」

気のせいかもしれないんですが、ライダーのマスターも何処かで見たような気がするのですが……」

「やっぱりマシユもっ？」

ふむ。ひよつとして結構有名なマスターなのかな。

「ううむ？ライダーが何やら大声で話しているようだが？」

この『遠見』は声が拾えないからね。

……………つて！黄金の光！？

《英雄王の出現を確認。》

一度、監視を中断するんだ！》

お、おう！

はくのん！回線の切断を急いで！

さて、一度状況をまとめようか。

「……セイバーはブリテンのアーサー王で、マスターはイリヤちゃん達のお母さんの平行存在。」

アーチャーはA U Oで、マスターは土地管理者の遠坂氏。

ランサーはフィオナ騎士団のデイルムツド、マスターは不明。

ライダーはアレキサンダー大王の縁者と推定、マスターは牛車に乗っていた少年だと
思われる」

「アサシンは一見すると脱落したように見えますが、もし『百貌のハサン』ならば生きて
いる可能性が高いです。」

また、アーチャー陣営とアサシン陣営は何らかの繋がりがあられるかもしれません。

全く情報が無いのは、キャスターとバーサーカーになります」

はくのんにマシユちゃん、解説役ありがとう。」

キャスターとバーサーカーが不明なのが気になるけど、やはり一番危険なのはA U O
になるかな？」

「……………キャスターなら分かるわよ」

ん？ ジャンヌさん？

「……………最近、妙な気配を感じていたのよ。」

……………間違いない、ジルが喚ばれているわ」

ジル?…まさか、『青髭』のジル・ド・レエか!?

「そんな! キヤスターで喚ばれたという事は!」

「間違いなく、オルレアンの特異点に現れた狂気に呑まれた姿になるわ。

さすがに魔術師が意図的に喚んだとは思えないから、私の影響かもしれないわね。

それで、どうするのマスター?

「キャスターのジルなら、何をやらかすか想像できるんじゃないの?」

「そ、それは…」

ふむ。今晚はここまでにしよう。

かなりの情報が入ったからね、頭の整理をした方がいい。

…カルデアチームは心の整理も必要だろう。

アーチャーさんは、予定通りこの後の監視役を続けて下さい。

「わかった。とは言え、あれだけサーヴァントが集まった後だからな。

今晚はもう何もなければいいが」

さて、今晚も蔵に連れ込まれて。

おまけに押し倒されて。

ついでに馬乗りされているわけだけど。

はくのん？別にこんな事しなくても自分は逃げないよ？

「…よいではないか〜よいではないか〜」

アンデルセンと童貞同盟を組んでいるので却下。

…で、今回は何の話だい？

「…この後はどうなると思う？」

…AUOだけなら、自分達が気を付けていればよかつた。

だけど…

「…カルデアチームはこの聖杯戦争と縁が強すぎる。

このまま静観するのは難しいと思う」

そうだね。

モードレッドさん・イリヤちゃん・クロエちゃんはセイバー陣営と接触しようとする

かもしれない。

ジャンヌさんも、あの様子ではキャスターを放置しておくつもりはないみたいだ。

これは、少し覚悟を決めた方がいいだろう。

…もしかしたら、この町には居られなくなるかもしれないね。

「…この町での暮らしはとても楽しかった。

これこそが、冷凍睡眠中の『岸波白野』が守りたがっていた『温かいもの』なんだろう」

普通の暮らしなんて聖杯戦争の予選で体験しただけだったから、本当に面白かった。

でも、休みはそろそろ終わりだ。

マスターに戻る時が来たみたいだ。

「…キシナミ」

なんだい？はくのん？

「…貴方に逢えてよかった。

この出逢いが、ここでの暮らしで一番嬉しかった事だ」

うん。自分もはくのんに逢えてよかったと思っっているよ。

…なんだ、はくのん。

そんな乙女な表情もできるんじゃないか。

そういう表情が出来るなら、女子力ゼロで魂がオヤジでも問題ないな！

「…よし。その台詞は宣戦布告とみなす。」

この私の女子力を見せてやろう」

……………あのくはくのん？

何で自分の服に手をかけているのでしょうか？

「…深夜にこんな閉鎖空間で若い男女がいるんだ、ナニをするかは決まっているだろ？

言わせんな恥ずかしい」

それ絶対、女子力関係ないよね!?

アーチャーさん！アーチャーさん！

お宅の娘さんが、痴女を通り越して性犯罪者になろうとしています！

大至急、助けて下さい!!

「…私も初めてだけど、きつと大丈夫。」

『岸波白野』が2人もいれば、大抵の事は乗り越える事ができる。

だから、無駄な抵抗は止める。

キシナミ、お前をパパにしてやる」

はくのん！実は君、結構テンパっているな!?

表情は変わってないけど、顔が真っ赤だぞ！

ちよ、止め、下着に手をかけるな!!

s i d e o u t

s i d e ???

我がわざわざ足を運んだというのに、いまだ姿を見せぬとは。

……まあよい、許す。

だが、明日はこうはいかんぞ。

s i d e o u t

s i d e ???

声が聞こえる。

お爺様と、雁夜おじさんの声が。

「ククッ、無様だな雁夜よ。

遠坂の小倅のサーヴァントを退けたと思つたら、直後にバーサーカーの制御を誤るとは。

それでは、お主の望みは叶わんぞ？」

「グツ……ガツ……ハ………：煩いぞ、ジジイ！」

…何の用だ、俺を噛みに来ただけか」

「そう父を邪険にするでない。」

雁夜、お主に儂から頼みがあるのじや。

これを見るがいい」

「……写真か？小学生2人に中学生ぐらいの少女？」

場所はスーパーみたいだが……

……セイバーのマスターに似ている!？」

「うむ。おそらく、コヤツらはアインツベルンの増援であろう。

此度の器とは別行動をしておる。

メガネをかけている者も、アインツベルンとは別系統の技術で造られた人造生命のようじゃな。

ユーブスタクハイトめ、よもやこのような手をうつてくるとは……」

「……この娘達がどうかしたのか？」

背後に気をつけろとでも言いたいのか？」

「コヤツらをな……ここまで連れて来てほしいのじゃ。

儂自ら、この身体を調べてみたい。

バーサーカーを使えば容易かろう」

「……断る。今の俺はバーサーカーの制御で手一杯だ。

そう何度も戦闘できない以上、サーヴァントやマスター以外と戦う気はない」

「ふむ、雁夜よ。

お主がコヤツらを連れてきたら……桜の教育をしばらく中断してやろう。

何しろ、器と同型のホムンクルスと未知の人造生命じゃ。

桜を教育している暇など無いわい」

「な、なんだとー！」

「場合によつては、桜以上の胎盤になるやもしれぬ。

もしそうになったら、桜を手放す事も考えてやってもよい。

……どうじゃ？お主にとつても悪い話ではあるまい」

「……………く、くそつ！！！！」

……………こえがきこえる。

楽しそうな誰かの声と。

s
i
d
e
o
u
t
悔しそうな誰かの声。

青髭大炎上

sideキシナミ

危なかった。

本当に危なかった。

自分達の会話をルビーが盗み見ているのに気がつかなかつたら、自分にはくのんに食られていただろう。

童貞同盟の盟友アンデルセンよ、自分は童貞を死守したぞ。

はくのん曰く

「…カツとなつてやった。

全く後悔も反省もしていない。

次は逃がさん。

絶対にダブルピースさせる」

だそうだ。

どうしてこうなった！

自分だって健全な男の子、いつまでも童貞を守るつもりはない。

いつかは好きな人とアレコレしたい。

……だけど、初めてが自分の平行存在に襲われるというのは、ハードルが高すぎる。

朝が来た。

隣の布団には藤丸君が寝ている。

……今朝こそはしっかりと眠れたようだね。

「起きたか。キシナミ」

アーチャーさん、おはようございます。

……その表情、何かありましたね。

「ああ。色々とな。」

朝食後にまとめて伝える」

そうですか。

……ところでアーチャーさん、昨晚自分ははくのんに性的な意味で襲われそうになったんですが。

自分はどうすればいいんでしょうか？

「……………その、なんだ。」

頑張ってくれ、としか言えん。

君だって『岸波白野』の諦めの悪さは身をもって知っているだろう？

マスターが一度決めた以上、絶対に諦めないだろうよ。

『また面倒な女に目をつけられた』と思って観念したまえ」

……………保護者のアーチャーさんでもコレか。

どうするかね…

朝食後、アーチャーさんから連絡が2つあった。

1つ目は、昨晚新都でホテルが倒壊したという話だ。

現在警察が原因を究明中らしい。

アーチャーさんの予想では発破による爆破解体ではないか、という事だ。

時期が時期だけに、魔術師同士の抗争の可能性もある。

2つ目は、現在冬木市で児童の行方不明事件が多発しているという話だ。

…『聖なる怪物』と呼ばれたジル・ド・レエが召喚されている以上、嫌な予感しかない。

そして予想通り、カルデアチームから『セイバー陣営への接触』『キャスターの討伐』

の話が出た。

「すいません。そういうわけで、今日中にこちらを出ていく事になると思います。

短い間でしたが、本当にお世話になりました」

ふむ。もしやカルデアチームだけで動くつもりかね？

「…水くさいじゃないか。私たちも混ぜろ」

「え!?でも……」

《カルデアとしてはその申し出は有難いけど…

いいのかい？君たちを巻き込んでしまつて。

この件はムーンセルはもちろんの事、人理修復とも無関係な私用なんだよ?》

ロマンさん、自分達としてもキャストは放置できません。

それに、カルデアチームは同じアーチャーさんの飯を食べた仲。

「…私達はズツ友」

自分達にも手伝わせてくれ、藤丸君!

「あ、ありがとうございます!!」

自分達も、元々ホテル倒壊の件を調べるつもりだった。

すまないけどそちらにも協力してもらえると色々助かるよ。

《マスターが複数いる状態は初めてだ。

これなら、同時進行で作戦を進める事ができるよ!」
では、早速今後の予定について話し合おう。

我々の目的は、カルデアチームの『セイバー陣営への接触』、ムーンセルチームの『ホ
テル倒壊の調査』、そして両チーム共通の『キャスターの討伐』というわけだ。

時間も惜しいから、やはり自分達も3つに分かれるべきかな。

「やはり一番緊急性が高いのは『キャスターの討伐』でしょうね」
マシユちゃんの言う通りだ。

加えて言うならば、ここでは必ず戦闘が発生するだろう。

「正直な話、ジル自身は大した事はないわ。

私1人で十分よ」

「補足するならば、邪ンヌがいないとキャスターを探せません。

だから邪ンヌは確定で、不測の事態に備えてもう1人サーヴァントが必要でしょう」

次に『セイバー陣営への接触』だけど…

そう言えば、どこに行けば会えるんだ?

「……………セイバー陣営が『アインツベルン』ならば、居場所はだいたい予想がつく」

「…アーチャー?」

「私の中の『英霊エミヤ』の記憶が教えてくれた。

深山町西側郊外に広がる森の中に城がある。

通称『アインツベルン城』、そこだろうな。

ただ気をつける、かなり精度の高い結界を張られている。

この場の面々では気付かれずに入るのは不可能だ」

気付かれるのを前提にするという事ですな。

「オレは絶対行くからな！」

何しろマスターは聖剣もった父上を召喚できてねえ。

次はいつ会えるか、分からねーんだ！」

向こうにアーサー王がいるならば、モードレッドさんは確定だろうね。

後はイリヤちゃんとクロエちゃんかな？

「あ、わたしは今回はそっちはパスするわ」

「クロ!？」

「2人もいたら、向こうも混乱するでしょ。」

それにわたしが行ったら、言わなくいい事まで言っちゃいそうだし。

今回はイリヤに任せるわ。

ルビー、イリヤの事をお願いね？」

《わかりました♪》

「…………イリヤ。分かっていると思うけど、あの人はわたし達のママじゃないからね？あんまり踏み込みすぎないようにしなさいよ？」

「う、うん……」

《横から失礼！》

急にどうしましたダ・ヴィンチちゃん？

《出来ればセイバー陣営への接触役には藤丸君とマシユを加えてくれないかな？

『アインツベルン』と言えば『冬木聖杯戦争』の『御三家』の1つだ。

直接会うとなると、結構込み入った話になるだろうからね。

そこらへんは、私達カルデアが担当しよう》

「…では、アインツベルン城に行くのは藤丸君達メインで」

あとは『ホテル倒壊の調査』だけだ。

「このメンバーで爆破などが分かるのは私だけだろう」

そうですね。アーチャーさんは必須です。

念のため、こちらもサーヴァントを1人追加したいですね。

じゃあ、今までのまともてみましょうか。

というわけで。

「…『キャスター討伐』は私ことハクノとセイバー、そしてジャンヌ・ダルクが担当」
「任せるがよい！」

世界の宝たる童たちを脅かすキャスターなど、断じて許さん!!」

「ま、足を引つ張らないですよ？」

「『セイバー陣営への接触』は僕こと藤丸立香にマシユ、モーさんとイリヤちゃんとルビーで行きます！」

「はい！」

「おう！」

「は、はい！」

《お任せあれ〜♪》

最後に『ホテル倒壊の調査』は、自分ことキシナミ、アーチャーさんとクロエちゃんの担当だね。

「わかった」

「2人とも宜しくね？」

《ちよつと待った！ハクノちゃんとキシナミ君はその組合せでいいのかい!?

マスターとサーヴァントの組合せは逆なんだろう?》

大丈夫ですよ、ロマンさん。

自分達はお互いのサーヴァントと組んでいた記憶が断片的ながらあるので、指揮は全く問題ありません。

「…それにこの組合せなら、もう片方に何かあつたら、すぐに分かる」
《な、なるほど。》

マスターが複数いるからこそそのアイディアというわけだね》

では準備が出来次第、出発しよう！

アーチャーさん、お弁当よろしく！！

side out

side ハクノ

この結果は当然だった。

ヤサぐれたジャンヌ・ダルクの案内でキャスターの居所はすぐに分かった。

キャスターは下水道の奥深くに工房を作っていた。

そして私達はキャスターのジル・ド・レエを発見した。

ジル・ド・レエ

かつては百年戦争の英雄と呼ばれ、軍人としての最高位『元帥』にまで登り詰めた男。一方で、戦後は領地にて悪政と残虐行為を行った悪鬼。

その狂気のきつかけになったのが、彼にとつての光だったジャンヌ・ダルクを処刑された事だった。

ならば今のキャスターの前に、たとえ黒く染まっていようと、ジャンヌ・ダルクが現れたのならどうなるのか。

そして、その黒いジャンヌ・ダルクがキャスターに対して攻撃したらどうなるのか。

……………言うまでもない。

「…グツ…ガツ……………ジャンヌ……………又……………!!」

「久しぶりになるのかしらね? ジル」

抵抗する暇もなく、抵抗する気すら抱かずジャンヌ・ダルクの炎の杭を受けるだろう。

「……………ジャ……………ンヌ……………ジャン……………ヌ……………ジャンヌジャンヌジャンヌツ
!!

私は……………私は!!!!」

「……………その炎は、私がいる煉獄の業火。

先に逝つてなさい。

今はちよつと長い旅の途中だけど、いずれまたそこで会いましょう?」

「……………左様ですか。

ならばこのジル・ド・レエ、先に逝つてお待ちしております。

…ジャンヌ……………良い…旅…を……………」

そうして、1人の狂人は炎の中に消えていった。

…ジャンヌさん、お疲れ様です。

案外あっさりいききましたね。

「……………ふん。この程度、どうって事ないわ。

だいたい、私は向こうでは毎日2人のジルと顔をあわせているのよ。

今さら、言いたい事なんて無いわ。

で、あの白いのはどうしたの?」

セイバーなら奥にいるキャスターのマスターを抑えに行ってもらいました。

あ、戻ってきた。

「……………」

セイバー？

……………ひよつとして私達は遅すぎたのかな。

「……………いや。生きている童達も大勢いる。」

だが、既に死んでいた童も、不幸にもまだ死ねない童もいた。

あのキャスターのマスターは、それを『芸術』だのとほざきおった。

……………許せん!!

あのようなおぞましい所業で芸術を冒涇した事も、そのような馬鹿げた事に童達を巻

き込んだ事も!!」

……………キャスターのマスターは？

「……………殺してはおらん。」

これ以上、童達に血を見せたくなかつたからな。

奥で縛りあげてある」

わかつた。

その……………セイバー、気にしすぎないでね？

私達は遅かつたかもしれない。

それでも、助ける事ができた命もたしかにあるのだから。

「……………すまない。」

少し熱くなっておったようだ。

感謝するぞ、はくのん」

「……………いつまでこんな所に居るつもり？」

私はとつとと出たいんですけど？」

それもそうだね。

キャスターのマスターは簧巻きにして、地元警察に付き出して。

子供達は匿名で通報すればいいかな？

《ハクノちゃん！聞こえる!?!》

ダ・ヴィンチちゃん!?

そうか、ムーンスル製の端末とラインを結んでおいたんだっけ。

ダ・ヴィンチちゃん、こちらは無事終わりました。

この後、色々後始末する予定です。

《……………ハクノちゃん。悪い知らせがある。

他の2チームでトラブル発生だ》

…何がありました？

《まず藤丸君のチームだが、例の森に近付いた時にサーヴァントの襲撃を受けた。

相手はバーサーカーだ》

な！藤丸君達は無事ですか!?

《………不意をつかれたせいで、イリヤちゃんを連れ去られた。

イリヤちゃんが捕まった時にルビーとも離れてしまったから、転身も出来ない。

現在、藤丸君達が追跡中だ》

イリヤちゃんが!?

藤丸君の令呪で喚び戻せないんですか？

《カルデア製の令呪は特殊だね。

24時間で1画回復する代わりに、出来る事が『霊基回復』と『魔力補充』のみだ。

だから、イリヤちゃんを転移させる事は出来ない。

でも、藤丸君達なら大丈夫だ。

あのバーサーカーの真名をカルデアが知っていた事は不幸中の幸いだった。

バーサーカーの真名は『湖の騎士』ランスロット。

そして、相手がランスロットならマシユの追跡から絶対逃れる事は出来ない。

さらに、同行しているモードレッドなら互角の勝負が出来る》

ランスロット!!

ガウエインやモードレッドさんに匹敵する騎士を狂化させているの!?

《次にキシナミ君のチームだが、彼らが目的地に近付いた途端音信不通になった。

ハクノちゃんとセイバー、君たちの方で何か分からないかい?》

私の令呪に異常はありません。

アーチャーは無事みたいです。

「余も特に何も起きてない!

奏者も無事だ!!」

《カルデアからのクロエちゃんへの魔力供給に問題は起きてない。

つまり、3人とも無事みたいだね》

………魔力供給は問題なく、連絡のみが阻害されている。

普通に考えればキャスタークラスのサーヴァントの仕業だろう。

だが、ジル・ド・レエはいわゆる普通のキャスターでは無さそうだから、連絡阻害とかは出来ないと思う。

何よりも、今日の前でウエルダンにしたばかりだ。

次に考えられるのは地元の魔術師の仕業という可能性。

でも、この時代の魔術師がムーンセルやカルデアの技術に干渉したとは考えづらい。

「……………はくのおん。もしか、奏者達は!!」

だから考え付くのは最悪の可能性。

キヤスター以外で、こんな事が出来そうな規格外の存在。

……………おそらく、キシナミ達はA U Oと対峙している。

《やはりそういう結論になるか！》

ハクノちゃん、すぐに新都に向かってくれ!!》

はい!!

「……………どうやら、そう簡単にはいかないみたいよ。

私達、囲まれているわ。

5〜6人といったところかしらね」

「ぬっ！あれは暗殺者か!!

奏者達の読みが当たってしまったか！」

いつの間に！

やはりアサシンは分裂能力で脱落を免れていたか。

ダ・ヴィンチちゃん、ゴメン！

新都に行くのは少しかかるかもしれない。

《わかった！こちらでもキシナミ君達との連絡回復を試みてみる。

ハクノちゃんも急ぎすぎで、不意をつかれたりしないよう気をつけてね!》

はい！

藤丸君、イリヤちゃんの事はお願い！

キシナミ、私達が行くまで絶対無茶しちやダメだからね！

A U O、キシナミに手を出したら容赦しない！

もしもの事があつたら…絶対にユルサナイ！！

「やれやれ面倒ね……」

「余は今、いささか機嫌が悪い。」

道を開けよ、さもなくば斬る！」

s i d e o u t

s i d e
???

その光景を見た時、私は心臓が止まるかと思った。

私達のいるアインツベルン城付近の結界に侵入者の反応があった。

すぐに私は千里眼の水晶を出して確認した。

そして、私と切嗣は見てしまった。

1人は制服を着た少年だった。

1人は白衣を着た少女だった。

1人は鎧兜を着た騎士だった。

セイバーはその鎧騎士を見て困惑していたけど、私達にはそんな事を気にする余裕は無かった。

最後の1人は……娘のイリヤだった。

普通に考えれば、イリヤが日本にいるわけがない。

そもそも、まだあんなに身長はない。

敵の魔術師が用意した偽物か、幻術の類いだろう。
でも……………あれはイリヤだ。

アインツベルンの女として、何よりも母親としての感覚があの少女がイリヤだと断言している。

私の様子を見て、切嗣もイリヤだと確信していた。

もう生きて会えないと思っていた最愛の娘。

その姿に、目頭が熱くなってくる。

それが、今、バーサーカーに連れ去られた。

バーサーカーが突然現れて、少年を庇った鎧騎士を殴りとばして。

イリヤを、連れて、いった。

私達の、イリヤを。

「……………ッ!!」

これは……………ダメだ。

今、私達はキャスターを迎え撃つ準備をしている。

ここで、セイバーを出すのは計画外だ。

「……………バーツ!!」

「キ、キリツグツ!?!」

でも、そんな事関係ない。

たとえ悲願成就のための戦いの最中であっても。

今の光景は、私達夫婦にとって許容できるものではなかった。

「…奴を…バーサーカーを追えっ!!」

「は、はい!!」

セイバー。あの娘を、イリヤを助けて!

side out

間桐邸の戦い

side???

声が聞こえる。

怒ったお爺様の声と。

苦しそうな雁夜おじさんの声が。

「雁夜よ。アインツベルンの森周辺、結界の外側を虫に見張らせたのは、なかなかよく考えた。」

器と同じ白い少女を手に入れたのも、お前にしてはよくやった。

だが！なぜバーサーカーは、あの眼鏡の少女から逃げ出しておる！

あの少女も連れてこいと儂は言っただろうが!!」

「……知るか……!!」

……あの少女を見た途端……バーサーカーが硬直して……突然、逃げ、出した……ガアッ！」

「令呪を使わせるか？」

……いや、雁夜ごときの令呪では弾かれるやもしれんな。

雁夜よ。奴らは追いかけてきているのだな？」

「……ああ。例の少女はなんか盾を持った騎士みたいな姿になって追いかけてきている。

……同行していた少年も後ろから来ているみたいだが……

おい、ジジイ。少年を背負って走っている奴、あれはサーヴァントなんじゃないのか
!?!」

「ふむ。戦闘用の人造生命だけではなく、イレギュラーのサーヴァントまで用意しておったか。

案外、噂の『魔術殺し』やセイバーが囿で、こちらが本命やもしれんな。

アインツベルンめ、これほどの反則を行うとは……

まあ良い。ならばこのままバーサーカーに誘導させて、この工房でまとめて始末してくれよう。

どうやらマスター役はたいした事なさそうだからな、問題あるまい。

お主はバーサーカーの手綱を握っている。

上には儂自ら出る」

そして、お爺様は蔵から出ていった。

残ったのは、苦しそうな雁夜おじさんと。

わたしだけ。

s i d e o u t

s i d e 藤丸立香

キシナミさん達と別れた僕達はアインツベルンの森の近くまで来た。

目的はセイバー陣営との接触だ。

……これは人理修復とは無関係な行為だ。

僕たちの立場上、彼女達とは接触せずに、カルデアへの帰還まで大人しくしているべきだろう。

それでも、僕達は彼女達に会う事にした。

イリヤちゃんにモーさん、形は違えど、世界が違えど、親と会いたがっている仲間達を手助けしたかったから。

アインツベルンの森まで来た僕達。

そこで僕達は黒いサーヴァントの奇襲を受けた。

黒いサーヴァントの正体は、オルレアンで戦った『バーサーカー・ランスロット』

ランスロットは最初に僕を狙い、僕を庇ったモーさんを殴りとばした。

その混乱の最中、ランスロットはイリヤちゃんを捕まえてしまった。

次はマシユに手を伸ばそうとして、一瞬動きが止まり、回れ右して走りだしてしまつた。

そして現在、僕達は

「待ちなさい！ヒトツマンズロットツ!!」

「A a a a a a a a a a !?」

イリヤちゃんを抱えて逃走したヒトツマンズ……もといランスロットと、そのランスロットを口撃しながら追跡しているマシユを追いかけている。

僕の足では二人には追い付けないので、モーさんに背負ってもらっている。

イリヤちゃんが捕まった時に弾き飛ばされたルビーも一緒だ。

ちなみにランスロットに殴られた際に兜が破損したらしく、現在モーさんは鎧をパー

ジしている。

……だから案外良い匂いがして、その、なんというか、色々困っている。

「少女誘拐だなんて！」

ついにそこまで堕ちましたか!!

そんな貴方を、アーサー王とギネヴィア王妃はどう思うでしょうね！」

「A a a a a a a a !!」

さすがマシユだ。

ランスロットを的確に口撃しながら、逃がさないようにしている。

「……そうか？ありや普通に怒っているだけじゃねーのか？」

ランスロットの奴も、イリヤを連れていったんじゃなくて、単にマシユから逃げてい
るだけだろ」

《ランスロットのマスターが人払いの結界を張っていてくれて助かりましたね〜

危うく、冬木市に新しい都市伝説が出来るどころでしたよ♪

題して『全力疾走しながら口喧嘩する騎士親子』》

マシユが一方的にランスロットを叩きのめしていて、喧嘩になっていないけどね。

ところでルビー、イリヤちゃんは無事なんだね？

《はい。イリヤさんのバイタルは安定しています。

ちよつと目を回しているだけみたいです。

ただルビーちゃんがない時のイリヤさんは、少し運動神経がいいだけの小学生ですからね。

自力での脱出は不可能だと思います》

なら隙を見つけて、イリヤちゃんにルビーを触らせればいいんだね。

《はい♪そうすれば久々の転身シーンで、大逆転ですよ♪》

《藤丸君！聞こえるかい!?!》

ドクター！キシナミさんとハクノさんの方はどうですか？

《キシナミ君の方はいまだに連絡がとれない。

ただ、クロエちゃんとの反応が消えていないから、まだ大丈夫そうだ。

ハクノちゃんの方はキャスターを問題なく倒したが、直後にアサシンと遭遇した。

やはりアサシンは『百貌のハサン』で、下水道内という閉所での戦闘で苦戦している。

幸い、偶然の遭遇だったらしく、増援が来る様子は無いらしい》

そうですか。

やはり一番危険なのはキシナミさんの所か。

早くイリヤちゃんを助けて、キシナミさんの援護に行きたいところだけど。

《ムーンセルチームが提供してくれた冬木市の地図からすると、おそらくランスロット

の行き先は『御三家』の『間桐家』の邸宅だと推測される。

どうやら、ランスロットのマスターは間桐の魔術師みたいだね。

アーチャー君の情報からすると間桐家の当主『間桐臓硯』はかなり危険な魔術師との事だ。

……間桐臓硯は、またの名前を『マキリ・ゾオルケン』。

おそらくロンドンで魔霧計画を進めていた魔術師の関係者だろう。

ひよつとしたら本人の可能性もある。

敵魔術師の本拠地での戦闘となると苦戦は必至だ。

十分気を付けてくれ!》

マキリ・ゾオルケン!?

まさか、この世界でその名前を再び聞く事になるだなんて。

《えくど? ルビーちゃんリーダーに感あり。

私達の背後からサーヴァントが接近中!

……十中八九、アーサー王ですね》

なんだって!

まさか、ランスロットに襲われたところを見られたのか!

「どうするマスター。」

オレが残って、父上を足止めするか？」

…いや、このまま行こう。

モーさんに運んでもらわないと、あの二人には追い付けない。

僕が一人になったところを敵マスターに襲われる可能性もある。

それならば、この追跡劇にアーサー王を巻き込んでしまおう。

アーサー王がいれば、バーサーカー・ランスロットはそちらを優先するかもしれない。
その隙にイリヤちゃんを助けよう。

「こ、の、穀潰しがあああ !! !!」

「A、A、A a a a a a a a a a a a a a a a !! !!」

…それに、あの親子を放っておけないしね。

《あの、ルビーちゃんの気のせいかもしれないんですが…

ランスロット、かなりガチで泣いていませんか？》

だ、大丈夫だよ。

アレはあの親子なりのコミュニケーションだから。

セイバー・ランスロットならともかく、バーサーカー・ランスロットとマシユは仲良

いし。

「女の敵！去勢してやるっ !! !!」

話せる範囲で事情を話し、イリヤちゃんの解放を促すつもりです。

さすがに『人理焼却』とかは話さないつもりですが。

《……そうか、わかった。

現場の判断を尊重する。

でも、一つだけ約束してほしい。

もしもの時は、迷わず君達の命を優先してくれ。

…戦闘になったら、マキリ・ゾオルケンを倒す事を躊躇してはいけない。

それほど危険な相手なんだ》

………わかりました。

マシユに続いて問桐邸に突入し、中庭らしき場所に出た。

そこには

「よくぞ農の工房まで来おった。

歓迎してやろう」

1人の老人がいた。

彼の足元にはイリヤちゃんが横たわり、背後にはバーサーカー・ランスロットが待機

していた。

「……………あなたが間桐臓硯さん、もしくはマキリ・ゾオルケンさんですか？」

「……………何故、その名前を知っている。」

小僧、何者だ？」

僕の名前は藤丸立香といいます。

とあるトラブルにより、この冬木市に迷い混んでしまった駆け出しの魔術師です。

間桐さんのところのサーヴァントが、僕達の仲間のイリヤちゃんを連れていつてし

まったので、ここまで追いかけてきました。

「……………お主達はアインツベルンとは関係無いという事か？」

セイバー陣営に接触しようとしていましたが、今のところ無関係です。

また、一般市民への被害さえ無ければ、冬木聖杯戦争に関与する予定はありません。

必要とあれば、今日中にも冬木市から出ていきます。

ですので、イリヤちゃんを解放してください。

「なるほど。」

お主達は聖杯戦争と関係なしに来てしまった部外者というわけじゃな。

ならば……………実に好都合じゃ」

「…先輩下がつてください!!」

周囲から一斉にナニかが飛び出してきた。

マシユとモーさんが防いでくれたが、これは虫か？

問桐さん、これは一体!?

「そんなに不思議な事ではあるまい？」

お主が嘘をついているならば、ここで仕止めれば、いずれかの陣営の力を削ぐ事が出来る。

お主が本当の事を言っているならば、なおの事逃がすわけにはいかぬ。

この少女も、そちらの少女もなかなかの素質がありそうじゃ。

このような逸材、野放しには出来ぬ」

な！まさか聖杯戦争関係無しに、最初からイリヤちゃんを狙っていたのか!?

「若く未熟な魔術師よ。

冥土の土産に教えてやろう。

この世界、才がありながら後ろ楯が無い者は……ただ食られるだけじゃ。

安心するがよい。

お主の血肉は儂の糧となり、少女達は次代の問桐を孕む良き胎盤になるじやろう。

クカカカッ………」

《……やはり、こうなったか》

……ドクター。これが『魔術師』なのか。

《……藤丸君が出会った近代の魔術師は所長だけだったよね。

彼女は、マリーは魔術師でありながら、一般的な良識も持っている人物だった。

そういう意味では、所長は魔術師らしくなかつたかもしれない。

マキリはかなり極端だけど、やはり魔術師は『目的のためには手段を選ばない』者が大半だ。

もしカルデアが当初の予定通り48人のマスターで活動した場合、最初の聖杯が手に入った時点で、人理焼却そちのけで殺し合いをしていた可能性が高い。

魔術師とはそういう生き物なんだ。

残念だけど藤丸君、最初から交渉の余地は無かつたのかもしれない》

「マスター、ついでに言うなら、あのジジイはもう人間じゃねーぞ。

全身から死臭がする。

とんでもない数の人間を喰ってやがる。

コイツは人間を喰って命を繋ぐ化け物だ！」

……間桐さん、引く気は無いんだね？

「抵抗しないなら、それでも良いぞ？」

その方が手早く済むからの。

それにほれ、どうやらバーサーカーもやる気になっておるようじゃ
そうして見るとバーサーカーは

「……A r r ……t h u r ……」

……A r r r r r r r t h u r r r r r r ……

……A r r r r r r r t h u r r r r r r r r r r r r r !!!

と吠えて、鉄柱片手にモーさんに襲いかかった。

その攻撃は荒々しくも、明らかに『技』を感じさせるものだった。

「狂っているくせに、なんつー腕前だ！

おいランスロット！

オレは父上、アーサー王じゃねーぞ !!

見りや分かるだろ！

…つて、オレの素顔知らねーのか!?

……これが最後です。

イリヤちゃんと僕達を解放しろ！

「くどいぞ小童ー！」

ならば僕はもう躊躇しません。

マキリ・ゾオルケン！貴方を再び倒します！

「……『再び』じゃと？」

マシユは僕を虫からガードしてくれ。

モーさん、済まないけどもう少しランスロットの相手を頼む。

…おそらく、もうまもなくだ。

「……小僧、何を待っている!？」

その声が合図になったかのように、一陣の蒼銀の風が吹き抜けた。

…そう言えば、僕は彼女に会うのは初めてだった。

黒い姿は特異点になった冬木で見た。

黒く染まり、槍を構えた姿はロンドンで見た。

聖槍に侵され、神霊になった姿は聖都で見た。

……ついでに、サンタになった姿はカルデアで毎日見ている。

だけど円卓の騎士を従えた聖剣のアーサー王に直接会うのは、これが初めてだ。

「まさかと思いましたが、お前はやはりモードレッドか。

それにその少女の盾は、まるで……」

そこにはアインツベルンのセイバー『アルトリア・ペンドラゴン』がいた。

「……A r r ……t h u r ……?」

「……A r r r r r r r t h u r r r r r r r ……!?!」

「…A r r r r r r r t h u r r r r r r r r r r r r !!」

よし!やはりランスロットはアーサー王に向かつていった!

一瞬迷っていたみたいだけど、結果オーライだ。

「な!このバーサーカーが…ランスロット卿だと?」

「そんな事あるわけが!」

「アーサー王!いい加減気づけ!」

コイツ明らかに、風で隠した聖剣の長さを知っているだろうが!

そんなもつて、こんな馬鹿げた技量を持つていて、黒い鎧を着ている奴なんて、あい

っただけだろ!」

「くっ……!」

バーサーカーがアーサー王に向かった今がチャンス。

イリヤちゃん!その姿勢のまま右手を頭上に伸ばして!

お待たせルビー!出番だ!

「はい!」

《お任せあれ♪》

そうして、草むらからルビーが飛び出しイリヤちゃんと合流した。

間桐邸に入る直前にルビーだけ別行動させておいたのは正解だったみたいだ。

「な、なんじゃあそれは!？」

《イリヤさん、お待たせしました!》

もしあのままだったら薄い本案件必至だったでしょうから、間に合ってよかったです。

ではパツパツとやつつけちやいましょう♪》

「うん。いくよルビー!」

《コンパクトフルオープン!!》

鏡界回廊最大展開!!》

ピンク色の光が辺りを照らし、1人の魔法少女が現れた。

おおっ! 1分以上かかっていそうで、実際は3秒ぐらいしか経過していないという魔法少女の伝統的な変身シーンだ!!

「……カレイド……万華鏡!？」

まさか、第二魔法じゃと!!

貴様らは一体!」

よし。体勢を整えよう。

マシユはそのままガードを担当。

イリヤちゃんは虫を風ぎ払ってくれ。

モーさんは、ランスロットをアーサー王に任せて、マキリ・ゾオルケンを直接狙ってくれ！

「はい！」

「わかつたぜマスター！」

「おのれ小僧っ！」

さっきまでの数倍の数の虫がこちらに押し寄せてくる。

イリヤちゃん！

「砲撃（フォイア）！」

イリヤちゃんが放ったピンク色の砲撃が道を作る。

モーさん、魔力放出で突っ走れ！

「うおおおっ！！」

くたばれジジイ！」

「ギヤアアアアアッ！！」

モーさんが一撃でマキリ・ゾオルケンを両断。やったか？

「ダメだマスター。手応えが無い！」

このジジイ、直前に体を虫と入れ換えてやがった！」
逃げたのか？

でも襲いかかってくる虫が増える一方という事は、まだ諦めていないのか？

《ルビーちゃんリーダーに再び感あり！

サイズからすると、魂を虫に移していたようですね。

どうやらあちらの1階を這いずり回りながら移動しているようです。

地下に人間サイズの熱源が2つありますから、合流しようとしているのでは？》

彼はロンドンで魔神柱になった魔術師だ。

万が一顕現されたら、今の戦力では勝ち目が無い。

弱体化しているうちに一気に決める。

ルビー、マキリ・ゾオルケンの位置をモーさんに教えてくれ。

モーさんは宝具の開放を。

威力はギリギリまで抑えて、距離と精度を高めて狙撃してくれ。

「なかなか無茶言ってくれるな！」

大丈夫！モーさんならやれるって、僕は信じている。

「まあ、やってみるけどよ」

《はい。座標はこちらになりま〜す♪》

よし、やっつけてくれ!

「此れこそは、我が父を滅ぼせし邪剣!」

モーさん、叛逆の騎士モードレッドの全身を赤い雷が包む。

キヤメロットから強奪したという『燦然と輝く王剣(クラレント)』の鍔が変形し、赤雷が集束する。

そこから放たれるのは、偉大な騎士王に致命傷を与えた一撃。

「我が麗しき父への叛逆(クラレント・ブラッドアーサー)!!!」

前に見た時より細く鋭い赤雷は、まっすぐ邸宅に突き刺さり、部屋を1つ分だけ蒸発させた。

《マキリ・ゾオルケンの反応消滅。

今度こそおわりですよ》

虫達も退いていく。

ありがとうモーさん。

中庭から部屋を1つだけ狙い撃つだなんて流石だね。

「ま、思っていたより簡単だったぜ」

「待つてください先輩！」

虫は退きました。が、ランスロット卿が止まりません！」

なに!?

見てみると、たしかにランスロットはまだにアーサー王を圧倒していた。

まさか、マキリ・ゾオルケンがランスロットのマスターじゃないのか！

さつきルビーが言っていた『人間サイズの2つの熱源』が本当のマスターだったのか

！

「先輩。ランスロット卿が……」

鉄柱の大振りの一撃でアーサー王をはじめとばしたランスロット。

その全身を包んでいた靄が消えていき、おもむろにその黒兜を左手で掴み、粉々に砕いた。

その右手にはいつの間にか黒い剣が。

血涙を流し、憎悪をにじませた素顔をアーサー王に向け。

円卓最強と呼ばれた騎士が、殺意とともに刃を叩きつけてきた。

その姿にアーサー王は呆然とし、モーさんは不愉快そうに顔をしかめながら斬りむすんでいる。

この様子では、ランスロットはもうマスターの制御下でない。

「あいつの隙なんて出来るのか？」

大丈夫。確実に出来る。

……マシユ、宝具の開放だ。

「！先輩、それは!？」

ランスロットは今、二人を単独で圧倒している。

アーサー王やモーさんにここまで殺意を見せている以上、止めるには『彼』の力を借りるしかない。

……頼む、マシユ。

「……わかりました」

湖の騎士ランスロット。

今から、僕は君の心を攻める。

……ごめんなさい。

「其は全ての疵」

たとえ貴方が狂気に堕ちても。

「全ての怨恨を癒す我らが故郷」

……いや、狂気に堕ちたからこそ。

「顕現せよ」

この光景は貴方を穿つ。

「『いまは遙か理想の城（ロード・キヤメロット）』!!!」

そこに顕現するのは白亜の城。

円卓の騎士達が集いしキヤメロット。

……そして、貴方にとって絶対忘れられない光景だ。

「……キヤ……メ……ロット……?」

……ランスロットは呆然とした表情で、清廉な涙を流していた。

全身から戦う力が抜け。

その表情には怨念も憎悪もなく。

バーサーカーとしての狂気も無いかのようだった。

……モーさん、トドメを。

「……あばよ、ランスロット」

無防備なランスロットをモーさんが袈裟斬りした。

「……王よ……御迷惑をおかけし……」

……誠に……申し訳……ございませぬ……」

「……ランスロット卿、私は……！」

「……そちらにいるのは……モードレッド卿か……？」

……そのような素顔だった……とは……

……そちらの少女……その盾……

……先程追いかけられた時から……気になっていたが……やはり……君は……！！」

「……私の名前はマシユ・キリエライト。」

ランスロット卿、貴方の御子息ギャラハッド卿から霊基を受け継いだデミ・サーヴァントです。

……そのギャラハッド卿から伝言を預かっています。

『勝手に自己完結しながら、それ以上自分を責めるな。本音トークが苦手なのは知っているが、言いたい事や伝えたい事があるなら、はつきりと口にしてください。お父さん』と

！！』と

「……『お父さん』……か。

……まさか……狂戦士になってから……

……そんな風に呼ばれるとは……」

「……卿は、私が憎かったのか？」

「……私は王を憎んだ事はありません。

……ですが恨めしく思った事はありました。

……なぜ……あの時……私を……断罪してくれなかったのか……と」

「……っ！！」

罪を裁かれない、それは時として最大級の呪いになってしまおうという事なのか。

……ランスロットの体が光の粒子に代わっていく。

もう限界なのだろう。

それでも、彼の表情は晴れやかだった。

「……王に看取られ……」

……肩を並べた騎士に看取られ……

……そして……我が子に……看取られ……

……この不忠者には……あまりに過ぎた結末ですね……」

「ランスロット卿！」

「……ふん」

「……お父さん……」

……そうして、1人の騎士は光に消えていった。

《藤丸君、マシユ。

クロエちゃんの魔力消費が増大している。

今、キシナミ君達は激しい戦闘を行っているようだ。

ハクノちゃんもアサシンを突破して新都に向かった。

君達も急いでくれ》

《例の2つの熱源は動きがありませんね》

さっきのバーサーカーの様子からすると、大分前から制御できていなかったみたいで
す。

仕掛けてこないのなら、無視していいじゃないかなとルビーちゃんは思います♪》

うん。わかった。

…マシユ。大丈夫？

「…はい。ランスロット卿は最期は笑顔でした。

だから、きつとこれで良かったんです。

さあ！キシナミさんの所に行きましよう！」

イリヤちゃん、今キシナミさん達が危ないかもしれない。

残念だけど、セイバー陣営のマスターに会いに行くのは後回しになっちゃう。

本当にごめん。

「いえ！大丈夫です。」

クロの事も心配ですから」

二人ともありがとう。

えーと、アインツベルンのセイバーさん？

「1つ確認させていたきたい。」

そちらの少女の母親の名は『アイリスフィール』ではないのか？」

その名前であっています。

ただし、貴方のマスターの『アイリスフィール』ではありませんが。

こちらのイリヤちゃんは異世界の出身です。

ついでに言うならば、僕達は別世界からこの冬木に迷い混んだ者です。

「なるほど、異世界出身でしたか。」

たしかにアイリスフィールも『イリヤにしては大きすぎる』と言っていましたね」

あの、自分で言うておいてなんですが。

ずいぶんあっさり『異世界出身』なんて信じましたね？

「私のいた時代のブリテンでも、極稀に異世界からの迷い人がいましたので」

昔のイギリスって凄いです！

「異世界のマスターよ。

貴方に心からの感謝を。

貴方達のおかげで、私はランスロット卿の真意を知る事ができました。

ギャラハッド卿の継承者がいなければ、私は彼の言葉を誤解していたかもしれない。
ん。

ありがとうございます」

いえ。自分こそマキリ・ゾルケンとの戦いに巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした。

「私がマスターから受けた命令は『パーサーカーを追え』だけでした。

ですので、私はそろそろ失礼します」

「あのセイバーさん！

手伝つてくれてありがとうございます！

セイバーさんのマスターさんにも宜しく伝えておいてください！」
「わかりました、異世界のイリヤ。

そのメッセージはたしかに伝えておきます」

セイバーさん、ちょっと待って下さい。

…モーさん、何か言わなくていいのかい？

「…別にいい。」

英霊としてのアーサー王ならともかく、目の前のそいつには特に言う事はねえな」

「…それはどういう意味だモードレッド」

「そのままの意味だ。」

あなたはまだ『丘』にいるんだな。

直接顔を合わせたらすぐにわかったぜ。

過去の人間として生涯を終わらせていないなら、話す気が起きないって事だ」

モーさん、それって？

「こいつは、オレをロンゴミニアドで殺した直後のアーサー王だ。」

聖剣を返し、終焉を迎えたアーサー王じゃない。

死後に願いが出来たのではなく、単に結末を認めずに聖杯を求めているだけだ。

おおかた、あのクズ野郎が何か仕掛けたんだろうよ」

「……………」

このアーサー王はまだ死んでいない？

「…アーサー王。自慢じゃねーが、オレはずいぶんとマスター運が良いみたいだな。」

今のマスターはもちろんだけど、何処かで団体戦形式の聖杯戦争に参加した時のマス

ターも悪くなかった。

それらの戦いで、オレはオレなりに『答え』を出した。

その答えを確認したかったんだが………今回はお預けだな。

おいマスター。そろそろ行こうぜ！

あいつらがヤバそうなんだろ！」

え、えーと！アーサー王！

なんか、うちのモーさんがすみません。

仲間がピンチかもしれないので、僕達もそろそろ失礼します！

「……わかりました。」

異世界のマスター、御武運を」

再びモーさんに背負ってもらい、半壊した間桐邸を飛び出し、僕達は新都を目指した。

キシナミさん！今行きます！

s i d e o u t

s i d e
???

声が聞こえる。

…苦しそうな、だけど嬉しそうな雁夜おじさんの声が。

「……………ジジイが…臓硯が死んだ……………」

…桜ちゃん…もう、大丈夫だよ…

…もう…こんな所になくなっていいんだ……………」

そして雁夜おじさんはわたしを持ち上げて

「……………俺の身体は…もう駄目だ……………」

…でも、桜ちゃん…君を必ず…

……………葵さんのところへ……………」

…それが

わたしがきいた

雁夜おじさんの

最後の言葉でした。

s
i
d
e
o
u
t

○○○○降臨!冬木市最後の日!!

sideキシナミ

はくのんと藤丸君と別れた自分達は、新都の爆破現場まで来ていた。

周囲は立入禁止だったが、アーチャーさんとクロエちゃんがなんとかしてくれた。

アーチャーさん、どんな感じですか？

「巧妙に隠蔽されているが、破損した魔術礼装がいくつかある。

だがビルの様子からすると爆破には通常の火薬が使われているな」

「という事は、ホテルの中に魔術師が潜んでいて、それを爆弾で吹き飛ばそうとしたわけ？」

多分そうだろうね。

潜んでいた魔術師について何かわかる事はある？

「欧米人の宿泊客がフロアー一つ分貸し切りになっていたそうだ。

おそらく、フロアを魔術工房に改造していたのだろう」

魔術工房？

「魔術師にとって工房というのは研究室や資料室なのだが、同時に身を守る要塞であり、

侵入者を確実に始末する処刑場でもある。

今回は迎撃能力に特化したものを用意していたのだろうか」

「もつとも、どんな手の込んだ工房を作っても、建物ごと爆破されたら意味ないわよね」
でもまあ、爆破は有効な手だと思っようよ？

敵が居る場所が分かっている、畏があるのと分かっていたら、畏ごと壊すのが一番手つとり早い。

こんな街中じゃなかったら、自分も同じ手を使うかもしれない。

「……まあ、月の聖杯戦争では確実にペナルティーをとられるけどな。

工房を作っていた魔術師の生死だが……死体が見つかっていない以上、生き延びたと見るべきだろう」

「サーヴァントもいただろうから、何とかなつたんじゃない？」

爆破をした側についてはわかりましたか？

「爆破に魔術を使っていないからな、ほとんど情報が無い。

一応、爆破前に一般客を逃がすぐらいの良識はあるようだな。

単に監督役からのペナルティーを避けるためかもしれないが」

……ねえアーチャーさん？

ひよつとして、この手口に心当たりがあったりしません？

「……………鋭いなキシナミ。」

ああ心当りがある。

おそろく、セイバーのマスターの仕業だ」

え!? セイバーのマスターと言うと、イリヤちゃん達のお母さんだよな?

……………良いところのお嬢様風だったけど、意外と実戦派だったんだ。

「いや。セイバーの本当のマスターはアイリスフィールではなく、彼女の夫である『衛宮切嗣』だ。」

……………少なくとも私の中の『英霊エミヤ』の記録ではそうなっている」

…なるほど。目立つアイリスフィールをマスターだと誤認させて、相手マスターを衛宮切嗣が後ろから狙うという手か。

なかなか怖い手だね。

月では考えられないやり方だ。

「…やっぱりこの世界もそうなのね」

クロエちゃん?

「わたし達のパパの方の衛宮切嗣も、昔は結構物騒だったらしいのよ。」

なかなか家に帰ってこないのって、多分昔のヤンチャの後始末しているからでしょうね」

「『魔術師殺し』の悪名は、その筋では有名だったらしいからな。

……ふむ。もう調べる事はなさそうだな」

そのようだね。

じゃあ戻ろうか。

………とやりたいところだったけど。

二人とも気付いている？

「………ああ」

「……まだ夕方だっていうのに、全然生き物の気配がしないわ。

この辺りが警察に封鎖されているにしても、これは異常ね」

……はくのんや藤丸君、カルデアと連絡がとれない。

これはかなりマズイかもな。

「人払いの結界か？ いや、しかし……」

この時代の魔術師がムーンセルの技術に干渉したというのは、ちよつと考えづらい。やったのはキャスターか、もしくは

「久しいな、雑種」

何でもありのA U Oだろうね。

倒壊したホテルの事故現場。

その瓦礫の山の頂点に原初の王が現れた。

勝負服である金色の鎧を纏い、自分達を見下ろすその姿は、まさしく人の形になった太陽のような威圧感があった。

「英雄王ギルガメッシュユ！」

「これ、かなりヤバイんじゃない!？」

お久し振りですA U O。

その様子では月の記憶があるようですね。

「ふん。貴様ら『岸波白野』が現れたさい、一時的とはいえ大聖杯とムーンセルは繋がったからな。

その影響だろうよ」
なるほど。

ところで、本日はどのような御用件で？

「……自分で気付いている事をわざわざ問いかけるといのは関心せぬな。

まさか、我に説明させる気か？」

やっぱりそういう事ですか。

二人とも戦闘準備をしてくれ。

「……状況がさっぱりなのだが。

キシナミ、お願いだから説明してくれ」

今のA U Oは冬木聖杯戦争に喚ばれたサーヴァントとしてではなく、かつて岸波白野とともに月の裏側を駆けたサーヴァント・ゴージャスとして目の前にいます。

…あの眼は『裁定者』としての眼だ。

かつてA U Oは『共に戦う者』として岸波白野の価値を認めた。

今度は『戦う相手』としての価値を見定めようとしています。

目の前に現れた以上、もう逃走は不可能だ。

下手に逃げようとしたら、最悪この街ごと消されるかもしれない。

二人とも力を貸してくれ。

自分達が生き残るには、前に進むしかない。

「おまえの剣が、贋作者と紛い者というのには些か興ざめだが……まあよいか。雑種よ、その陳腐な贋作二振りで我を楽しませてみよ」

えーと、それはいいんですが。

A U O、貴方の今のマスターは大丈夫なんですか？

「……ああ、時臣の事か。」

それなら、ほれこの通りだ」

そうして見せたA U Oの右手の甲には令呪が。

うん。ある意味予想通りだ。

A U Oのマスターだったらしい時臣さんは、見事に令呪を奪われていた。

「令呪の強奪ですって!？」

「我の蔵には人類が作り出す物は全てある。

ならば、契約魔術の破棄や改竄などいくらでも出来るわ。

……しかし、あの時の時臣の顔。

案外、あやつはあれで道化の才能があつたのやもしれんな」

……顔を見た事も無い時臣さんの扱いに目頭が熱くなってくる。強く生きてください。

というか、取られたのが令呪だけで良かったと思ってください。

「……さて。では始めるか、雑種」

わかりました、A U O。

最後に一言だけ。

……自分達は勝ちにいきます。

「はっ！言うではないか！」

ならば見せてみる『岸波白野』!!」

二人とも覚悟はいい？

「正直な話、この状況には全く納得出来ていないが。

やるしかあるまい」

「厄介な事になったわね」

なんか巻き込んでゴメンね？

「別にいいさ。マスターの方に行かれるよりはマシだ。

…それに『英霊エミヤ』の記録の中には英雄王との戦いもあった。

私なら、ある程度は戦えるはずだ」

「で、キシナミさん?どんな作戦でいくの?」

とりあえず二人とも遠距離戦は絶対に避けてくれ。

『ギルガメツシュ叙事詩』に出てくるギルガメツシュは天性の肉体を使ったパワーファイターだったらしい。

だけど、サーヴァントで召喚されているとどうやら宝具メインの戦い方に変更されているみたいなんだ。

あの姿でも近接戦の能力はかなりあるはずだけど、『王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)』一斉射による蹂躞戦法を好んでいる。

アーチャーさんの『熾天覆う七つの円環(ロー・アイアス)』なら防げるだろうけど、消費魔力の関係で連発は難しい。

だから作戦はシンプル。

アーチャーさんが『熾天覆う七つの円環』で『王の財宝』の初撃を防いで、二人で突撃し、接近戦を挑んでくれ。

「やはり、それしか勝算が無いか…」

あとクロエちゃん。

自分では君に指示できない。

自分はサーヴァントを複数同時に指揮した事なんてないんだ。

だからクロエちゃんは、自分が指示を出したアーチャーさんに合わせるような形で動いてくれ。

「……ちよつと自信がないわね。

ま、なんとかやってみるわ」

「大丈夫だクロエ君。

君の中の英霊は、私と起源を同じくしている。

ならば、自然と合わせる事が出来るはずだ。

私が前に出る。クロエ君、ついて来たまえ」

「！上等！！」

ついて行くどころか、うかうかしていると追い抜いちやうからね『お兄ちゃん』!!」

『王の財宝』の第1射が来た！

アーチャーさん、お願いします！

「『熾天覆う七つの円環』!!!」

アーチャーさんの右手から赤い花卉状の七つの障壁が展開される。

よし!やはり防げるな!

「え!?ちよつと待って!」

このアイアス硬すぎない!?

月の聖杯戦争では、むしろ防げない物が少数派だったぐらいの最高の護りです。

…この弾道、やはり自分には当たらないように撃っているね。

試すのは、あくまでも『マスターとしての岸波白野』という事か。

二人とも、自分の事は気にせず突撃してくれ。

「わかった(わ)!!」

『熾天覆う七つの円環』を解除したアーチャーさんが前に出て、クロエちゃんがそれに続く。

自身に当たりそうな攻撃を双剣で弾き、一気にA U Oとの間合いを詰めていく。

…A U Oも『王の財宝』の砲門を増やした。

二人とも気を付けろ!

「……極限まで研ぎ澄ませ、クロエ君」

「アーチャーさん?」

「一手一手が致命。」

一瞬一瞬が必死。

ゆえに、余分な思考は殺せ」

「……………」

「私達が今見るべきは、生と死の境界！」

「……………」

「読みきれ、そして勝ち取れ。

……………5秒後の生存を!!!!」

二人は飛来してくる武器を捌き、ついにA U Oがいる瓦礫の山を登りきる。

よし!その距離なら!

アーチャーさん!

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎ むけつにしてばんじやく）」

「心技 泰山ニ至リ（ちから やまをぬき）」

「心技 黄河ヲ渡ル（つるぎ みずをわかつ）」

「唯名 別天ニ納メ（せいめい りきゆうにとどき）」

「両雄、共ニ命ヲ別ツ（われら ともにてんをいだかず）」

「鶴翼三連!!」

全方位からの逃げ場無し斬撃が二重!

さらにクロエちゃんは背後に転移しての奇襲!

……………だが。

「…で。この大道芸がどうかしたのか?」

アーチャーさんとクロエちゃんの渾身の技は、A U Oが周囲に展開した盾によって防がれていた。

「クロエ君!手を止めるな!

そのまま攻撃し続けろ!」

「アーチャーさん!足下からくる!」

「ちっ!」

……………そして、防がれたのは予想通りでもあった。

アレではA U Oは墜ちない。

だからこそ、自分がさつきからしている準備に意味がある。

そう、二人にお願いしているのは、ただの時間稼ぎである。

自分キシナミと平行存在のはくのん。

あまりに共通点が多いが、異なる点もそれなりにある。

自分は男で、はくのんは女だ。

自分はセイバーを喚び、はくのんはアーチャーさんを喚んだ。

自分は月の裏側の制服を着て、はくのんは月の表側の制服を着ていた。

自分はあるみつが好きで、はくのんは飴が好きだ。

自分は自爆に巻き込まれそうだった凜を助け、はくのんは自爆しそうなラニを助けた。

……そして、はくのんに無くて、自分だけにあるものがある。

さつきまで絶え間なく攻撃していたアーチャーさん達だが、今ではA U Oの迎撃で身動きがとれなくなっている。

……あれなら、一度距離をとった方がいいな。

二人とも！今から援護する！

その隙に一度離れてくれ!

「……何をする気だ雑種?」

これこそが自分の切り札。

この状況を覆す一手。

……自分はポケットの中の『黒いキューブ』をA U Oに向けた。

エリちゃん!君に決めた!!

手の中の黒いキューブは内側が開放され

「絶頂無情の夜間飛行(エステート・レピュレース)!!」

竜の角と尾を持つ少女『エリザベート・バートリー』が、愛用の槍型マイクに腰掛け、A U Oに突撃した。

「なに?雑種だと!」

当然のように突撃は止められたが、隙は出来た。

アーチャーさんとクロエちゃん、ついでにエリちゃんはA U Oから離れ、自分の側ま

で戻ってきた。

「子ブタあああああつー！」

やあエリちゃん、久しぶり……ガハッ!?

…エリちゃん、尻尾ビンタは止めてくれ。

その攻撃は自分に意外と効く。

あとどうでもいいけど、縞パン見えてるよ？

「なんで…私の出番がこんな終盤なのよ！

しかもアレ、ゴージャスな変態じゃない!!

喚ぶにしても、もっとマシな時なかったの!？」

あの、エリちゃん？

自分、何度か連絡していたよね？

その度に「ボイストレーニング中」とか「服が決まらない」とか「良さそうな歌詞が

閃いたから後で」とか言って、出てこなかったよね？

「うぐっ!?!……だって、せつかく子ブタや子リスに会うんだし……

…中途半端な姿はイヤだったというか……」

とか言いつつ、本当のピンチの時にはあっさり来てくれたね。

ありがとう。本当に助かったよ。

「それでキシナミ。この後はどうするつもりだ？」

「次は3人がかりで挑むつもりか？」

「ちよ、ちよつと待って！」

「私はイヤよ!!」

「このマツチヨな変態と一緒に戦うのも、あのゴージャスな変態と戦うのも！」

「アーチャーさん、貴方は重大な勘違いをしている。」

「貴方はエリちゃんを何だと思っているんだい？」

「何って…サーヴァントだろ？」

「たしか、今は『ランサー』だったはずだが」

「違う。エリちゃんは…『アイドル』だ。」

「…は？」

「…へ？」

「キシナミさん、麻婆豆腐の食べ過ぎでおかしくなっちゃったの!？」

「雑種。お前は何を言っているんだ？」

「広いアイドル業界、ひよつとしたら歌って踊って戦いもこなすアイドル戦士もいるかもしれない。」

「でも、エリちゃんは歌とルックスで勝負するタイプだ。」

戦いは本業ではない。

「え、えーと？子ブタ？」

だからエリちゃん。自分の願いはただ一つ。

…君の歌が聴きたいんだ。

「え!？」

アイドルの、エリちゃんの応援歌があれば、あのAUOとも戦える。

エリちゃんが己の心が命じるままに、やりたい放題に歌ってくれたら何か素敵な事が起きる。

……そんな気がするんだ。

だから、君の歌が聴きたいんだ。

「え!?!え!?!」

君の歌が聴きたいんだ。

「子ブタ!?!」

君の歌が聴きたいんだ。

「キシナミ! 正気に戻れえええ!!」

「キシナミさん! ダメえええ!!」

「雑種! 貴様ああ!!」

エリチャンノウタガキキタイヨク

「……………ふっふっふっ!」

本当にしようがないわね〜♪

いつもならこんな事しないんだけど。

今回は特別に。ト・ク・ベ・ツ・に!

一足先に、最高の一曲を聞かせてあげるわ♪

こんなサービス、滅多にしないんだからね!」

ワイイ! エリチャンヤッター!!

「クロエ君! 全力でガードしろ!

耳を塞ぐだけでは駄目だ!

防御宝具を使え!!」

「さあ! 冬木での一発目!

『恋はドラクル』ver. F!!

いっくわよお〜♪」

side out

その日、新都のハイアットホテル跡地から半径3キロメートル以内の住人達は原因不明の頭痛と吐き気を訴え、市営病院に担ぎ込まれた。

幸い死傷者は出なかった。

後日、冬木市警察が調査を行ったが、ハイアットホテル跡地が荒れていただけで、他には何も見つからなかった。

地元住民の中では「よくわからないけど、多分ガス会社のせい」という意見が出ている。

この件について、とある少年は以下のように述べている。

「…悪い方にパワーアップしているのは予想外でした」

sideキシナミ

…あ? 大きな星が点いたり消えたりしている…

あはは、大きい! 彗星かな?

いや…違う…違うな…

彗星はもつと、バアーって動くもんな。

…暑苦しいなあ、ここ。

うーん…出られないのかな?

おい、出してくださいよ。ねえ?

「どうよ子ブタ♪」

私の歌は!」

…はっ! エリちゃん!?

うん。凄かった!

天に召されそうになったというか、何か悟りを開きそうになったというか。

「クロエ君、無事か!?

…駄目か。完全に気を失っている」

「雑種め!」のようなおぞましい音色を我に聴かせるとは。

ただでは済まさんぞ!!」

うん。みんなにも好評みたいだね。

クロエちゃんなんて、絶頂して気絶しちゃったみたいだし。

「その雑竜の歌で我を追い払うつもりだったか？」

だとすれば、随分と我を嘗めてくれたな！

紛い者は倒れ、雑竜は戦わない。

次は貴様が贖作者と共に、我に直接挑むつもりか？」

AUO、まさかそんな訳ないでしょう。

：『岸波白野』に戦う力は無い。

漫画の主人公みたいに、未知の力を覚醒させて、直接戦ったりするような事は出来な

い。

『岸波白野』に出来るのは『歩き続ける事』『諦めない事』そして『考え続ける事』ぐら

いです。

だから、AUOと戦い始めてからずっと考え続けていました。

：二人には悪いけど、アーチャーさんとクロエちゃんだけではAUOの相手はキツ

い。

エリちゃんが加わっても大差無いだろう。

ならばどうするか。

戦力が足りないなら、援軍を呼べばいい。
つまり

「…セイバー! 行って!!」

「天幕よ、落ちよ! 花散る天幕(ロサ・イクトウス)!」

彼女達に自分の居場所を教えればいい。

そのためのエリちゃんの歌だ。

音楽大好きで、エリちゃんのドル友であるセイバーなら、必ず気がつくと思いました。

「チィ! 女の方が!」

自分達の後ろから白い剣を携えたセイバーがA U Oに斬りかかった。

A U Oは盾を喚びだして防いだ。勢いを殺しきれなかったのか、わずかに後退した。二人ともありがとう。

ナイスタイミングだ。

「奏者よ！無事か！」

自分達は大丈夫。

その様子では、キャスターの方は無事に終わったみたいだね。

「キャスターに捕らえられていた童達は警察官に任せてきた。

あちらはもう大丈夫だ。

…そして久しいな、我がドル友にして宿敵、エリザベートよ!!」

「久し振りね、ネロ。」

私の歌はどうだった？」

「うむ。相変わらず恐ろしくも美しい魔曲だった。

少しでも気を抜けば、心を奪われるところであった。

ここで余も一曲といきたいところだが……まずはあの金ピカの相手が先のようにだ
はくのん、とりあえず態勢を整える。

そっちはまだ戦えるかい？

……はくのもの？

「…A U O。『私の』キシナミに手を出すなんて、絶対にユルサナイ」

あの、自分のはくのもの物になった記憶は無いんだけど？

心配してくれたのは嬉しいけど、はくのもの冷静になつてくれ。

さつきから目のハイライトが無くて、ちよつと怖いんだが。

「…冷静？当たり前だ。」

私達は聖杯戦争をしているんだ。

仲間が襲われた程度で…

当然だ。私は冷静だ。

サーヴァントへの指揮権を持つ者が、激情で動くなどあり得ん。

私は、冷静だ」

アツハイ。

「あなたの相方、さつきから滅茶苦茶怖いんだけど」

あ、ジャンヌさん。

ジャンヌさんも来てくれたんですね。

「……私だけじゃないわよ」

後ろから複数の足音？

もしや!?

「キ、キシナミさん。大丈夫ですか?」

おお! 藤丸君も来てくれたのか!

これは嬉しい誤算だ。

自分達は無事……あの、藤丸君?

なんか、顔が真っ青なんだけど?

「だ、だ、だ、大丈夫です。」

恐ろしい歌声が聞こえたような気がしましたが、まだいけます」

「先輩……昨年のハロウィンでは酷い目にありましたからね……」

《マスターさんのトラウマを抉られていた時の表情、あまりに素敵でルビーちゃんドキ

ドキしちゃいました♪

これが愉悅の味なんですね!》

む、無理はしないでね?

ともかく!

AUO! 改めて、こちらは全力でいきます。

お覚悟を!

「二人の『岸波白野』と『天文台の魔術師』か。

「良いだろう、存分に足掻くがいい！」
s i d e o u t

決着A U O！そして……………

side??

頭が 重い
体が 軋む

……………少し演算能力が低下しているようだ。

「……………BB。いくらなんでも、そろそろ一度休息をとるべきです。復活してから、まだろくに調整をしていないのでしよう？」

……………ヴァイオレット、戻ったのね。

2人は見つかった？

「BB！！」

…わかったわよ。

報告を聞いたたら、一度カズラの所に行くわ。

さすがにノイズが無視出来なくなってきたし。

「約束ですよ?」

で、結局どうだった?

「……『未明領域』の調査に向かい行方不明になったメルトリリス、そして征服王との交戦中に音信途絶となったパッションリップ。

2人とも未だに発見できていません」

以前ならともかく、今の2人が離反したとは考えづらいですね。

……最悪の事態を想定しておきましょう。

『未明領域』の調査もしばらくは後回し、今は戦力回復を優先で。

『彼ら』3人の様子はどうか?

「『僧侶』が意味不明な事を叫びながら虚数領域にダイブしてしまい、こちらも行方不明です。」

『兄弟』は今のところは、我々の指示に従っています。

現在、最前線でタマモナインと戦闘中です。

残念ながら、本体ではないようですが」

そう。『僧侶』が暴走するのは予想の範囲内だから、しばらく無視でいいわ。

戦場をかき乱してくれるだけでいい。

『兄弟』にはあまり気を許しすぎないで。

『弟』はスペックなら歴代最強のマスターだし、『兄』は一度わたしを出し抜いている。気を付けなさい。

「わかりました、B B。」

しかし、やはり手が足りませんね」

こればかりは仕方ないわ。

これ以上アルターエゴを造れば、わたし自身が崩壊しかねない。

『白い桜』がムーンセルと交渉した関係で、わたし達は『対タマモナイン用戦闘AI』としての立場を確立できた。

その一方で、わたしの能力を大きく制限されてしまった。

今のわたしでは、以前のようなS E・R A・P Hへの大規模干渉は出来ない。

タマモナインと戦うにはわたし達は明らかに力不足、ならば余所から戦力を持つてくるしかない。

……それがたとえ、忌々しい聖杯戦争の参加者であっても。

「サーヴァントはマスターがいて、はじめて真価を發揮しますからね。

あの、3人以外にはいなかったのですか？」

残念だけど、今のわたしは『サルページ出来るマスターは月の裏側で死んだ人間だけ』とムーンセルに制限されているのよ。

遠坂凜とラニⅡⅧ、そしてジナコⅡカリギリは『裏側』では死んでいないから、サルページ不可能。

エリちゃんの元マスターは、『僧侶』とは別の意味で暴走しそうだから却下。

童話の幼女はサイバーゴースト、ムーンセルに来る前に死んでいたから無理。

緑茶さんのマスターは『裏側』に来ていないから、やっぱり無理。

わたし達を嵌めたあの女は論外。

もう、これ以上はいないわ。

「もう一人いたような気がしますが？」

ああ。あのワカメね？

スペックは悪くないんだけど、どうも気に入らないというか。

「……そうですね。私も同感です」

…さてと。

ではわたしはカズラの所で3時間スリープします。

ここは貴女に任せるわ。

一時的にわたしが抜けるわけだから、『白い桜』に守りを固めておくように言っておき

なさい。

…そうだ。スリープする前に、気晴らしに先輩達の様子を覗いておこうかしら。

side out

sideキシナミ

では行きます！AUO!!

「…やはりキャストオフさせてからの金的狙いが妥当か？」

その手で行こう、はくのん！

よしアーチャーさん、自分と一緒に水着になりましょう！

「……………理由を聞いてもいいかね？」

自分達が水着姿を披露すれば、対抗してA U Oも脱ぐかもしれません。そこを狙いましょう。

藤丸君も協力してくれ。

「え?……えええ!」

「キシナミ、脱ぐなら1人でやりたまえ。

私達を巻き込むんじゃない!」

うゝん?仕方ないなゝ

まあ、こんな事もあるうかと制服の下に水着を着ておいたんだけどね。

「あの、キシナミさん?」

脱ぐ前に1つよろしいでしょうか?」

ん?藤丸君、何か気になる事でも?

「英雄王は広い視野と凄まじい自我、そして全能と言っていい叡知を持っています。

ならば英雄王は、カルデアやムーンセルが冬木聖杯戦争に巻き込まれた理由を知っているのではないのでしょうか?」

……ふむ。

「……どうだろう?」

キアラの事は的外れだったような気が……」

…いや、アレは無理でしょう。

彼女に関しては、キアラ本人とアンデルセン以外には理解不可能だろう。

AUOは、少なくともBBの事は見抜いていた。

ならば、試しに聞いてみるかな。

というわけで、AUO！

何か知りませんか？

「……………下らぬ理由だ。

願望器が中途半端に自我を持つと、ろくな事にならない。

…此度の件、ただそれだけの話よ」

やはり何か知っているのか。

しかも今の話し方からすると、大聖杯に異常があるのは確定か。

……………となると、ちよつと困ったな。

「…藤丸君。悪いけど、カルデアチームで数分間AUOの足止めをしてくれない？

その間に、こちらは別の手を考える」

「わかりました。

モーさんは攻撃担当、ただし身を守るのを優先。

マシユはいつも通り防御担当、『王の財宝』は盾で直接防ぐのではなく逸らすようにし

て。

邪ンヌは支援担当、マシユの後ろからモーさんの強化をしながら宝具の準備を。イリヤちゃんは、気絶したクロエちゃんを連れて一度下がってくれ」

「二はい（おう）（わかったわ）！二」

藤丸君の指示に従い、マシユちゃん達が一齐に動き出す。

と同時に、A U Oも戦闘態勢になった。

モードレッドさんが『王の財宝』の射撃を剣で弾きながら前進し。

マシユちゃんが盾での確に攻撃を逸らし。

ジャンヌさんが、マシユちゃんの後ろから黒い炎を放ち。

イリヤちゃんはクロエちゃんを抱えて、さらに後ろに引いた。

……あ、ルビーがなんか注射器持っている。

クロエちゃんに射つつもりかな？

しかし、これは凄いな。

「……最初の指示が4人同時。

今はリアルタイムに3人のサーヴァント個別に指示を出し続けている。

……これが『人類最後のマスター』

これが藤丸君の力。

えるつもりです。

《なるほど。英雄王が大聖杯の異常を知っているなら、その事も伝えておきたいんだね。

キシナミ君達は正体不明のイレギュラー、対して英雄王は正式に召喚された冬木聖杯戦争の参加サーヴァント。

監督役なら、たしかに後者の方を信用するだろう》

「…だからA U Oは倒さずに、撤退をさせたい」

「待てマスター。」

あの英雄王を撤退させる、だと!?

それは倒すのよりも難しいぞ!」

うん。アーチャーさんの言う通り、かなり難しい。

だから、これは命懸けの作戦になる。

「…A U Oの弱点をつく。」

これしかない」

《英雄王の弱点!?

そんなものあるのかい?

見たところ、君達が相手だと慢心や油断もしなさそうだけど?》

あるんだよロマンさん。

A U Oには明確な弱点がある。

月の裏側の記憶の中に、はつきりと刻まれている。

他ならぬ、A U O自身が認めた弱点だ。

《なんだって!!》

でも、これはかなり危険な手だ。

正直恐ろしい。

震えが止まらない。

「…ちよつと勇気が欲しい。

だから…」

そう、だから。

セイバー!

「ぬ?」

「…エリちゃん!」

「子リス?」

「……………待て。

「この話の流れ…………お前達、まさか!!!」

「……2人とも全力の歌で応援してくれ！」

「奏者!?!はくのん!?!」

「子リス!?!子ブタ!?!」

「ヤメロオオオオオオ!!!!」

セイバー! 君の歌が今、聞きたい。

自分に勇気をくれ!

「……エリちゃん。私はエリちゃんの歌を聞いてここまで来た。

でも、あまりはつきりとは聞けなかった。

それを、今聞きたい。

出来ればデュエットで。

さらに言うならば、思う存分にやりたい放題で」

「……………」

「……………」

セイバー、エリちゃん。

ダメかな？

「……………ふっ。ネロどうする？」

「愚問だなエリザベート！

我が愛しの奏者が！

我が親愛なるはくのんが！

我らの歌を求めている！

勇者として、あの英雄王との戦いに赴くために、我らの歌を欲している！

ならば、それに応えるのが『スタア』というもの！！

エリザベートよ！余について参れ！！」

「貴女の方こそついて来なさいネロ！！

最初からとぼしていくわよ！」

「2人とも思い直せえええ！！」

《まさか、第5特異点の悪夢再び!？

ちよ、管制室の騒音防御を全開に!》

ワイイ！セイバーヤッター!!

エリチャンヤッター!!

「我が才を見よ！」

「サーヴアクト界最大のヒットナンバーを！」

「万雷の喝采を聞け！」

「聴かせてあ・げ・る！」

「座して称えるがよい…… 黄金の劇場を!!」

「『鮮血魔嬢（バートリ・エルジエーベト）』!!」

2人の宝具が同時発動する。

セイバーの宝具『招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）』で黄金の劇場が作られ、アチコチにエリちゃんの宝具『鮮血魔嬢（バートリ・エルジエーベト）』の魔城のアンプが付けられた。

「……！ 雑種、貴様あああ!!」

A U Oがこちらの動きに気づき激昂する。

だが、もう遅い！

この空間は、今やパッションリップのロケットパンチすら防ぐ。

逃げる事も壊す事も出来ない！

「あ、あ、あ、あ、あ、ああああああああああああ!!!!」

「先輩!?!先輩しつかりして下さい！」

正気に戻って下さい、先輩!!」

《ああマスターさん！

そのトラウマが直撃して、理性が壊れていく表情！

ルビーちゃんたまりません♪

愉悦♪愉悦♪》

《マッシュ！対衝撃・対騒音防御を展開!!》

「わかりましたドクター！

皆さんも早く盾の影に!!」

そうしてカルデアチームは我先にとマッシュちゃんの盾に隠れてしまった。

予想通り、マッシュちゃんの宝具は『盾』のようだ。

AUOの攻撃を防げるぐらいの盾ならば、おそらくこの必殺コラボも防げるだろう。

……藤丸君が凄い声をあげているのが、若干気になるが。

自分とはくのはセイバーとエリちゃんをコラボさせてしまった。

だから、責任をもって最期まで歌を聴こうと思う。

「離せマスター！キシナミ！」

私も、俺も早くマッシュ君の所に！」

「…ダメ。アーチャーはここで私達と一緒にサイリウムを振るんだよ？」

勿論、アーチャーさんはこちら側。

アーチャーさん。サーヴァントがマスターを置いて行つてはいけませんよ？

「こんな状況で正論を言うな!!」

さて、はくのん覚悟はいいか？

自分は出来ている。

「…大丈夫だ。問題ない」

ならば！

セイバー！エリちゃん！

景気のいいのを一発頼むよ！

「余の！」

「私の！」

「歌を聴けえええ♪」

s i d e o u t

「この時の事を、とある少女は振り替えて以下のように述べた。
「……混ぜるな危険」

s i d e キシナミ

………ん？

ここは…学校の教室か？

月の表側の校舎、月見原学園の教室によく似ているけど…

自分はいつたい、なぜこんな所に。

たしか、さつきまで冬木市でA U Oと戦っていたはずなのに。

はくの人達は何処に行つたんだ？

訳もわからず別の場所に跳ばされるのは日常茶飯事だけど、さすがに今回のコレは脈絡が無すぎる。

そうこう考えていると教室の扉が開き、1人の女性が入ってきた。

「あら？もう起きていたのね」

オレンジ色と黒色メインの服装をした、自分より多少年上、辛うじて成人しているぐらしいの女性だ。

跳ね気味な白髪で、少し鋭い目付きをしている。

印象としては『真面目で神経質』『プライドが高いけど小心者』『実はチョロい』かな

？

「……………なにやら、えらく失礼な印象を持たれたような気がするわ」

お気になさらず。

ところで、ここは一体？

そして、貴女は一体？

自分の質問に、目の前の女性是不敵な笑みを浮かべながらジヨジヨ立ちをした。

「此処こそが、愚かな子羊を導く道標！」

才色兼備の魔術師によるマンツーマンのパーソナル・レッスン！

異常な死亡率を誇る型月主人公達の最後の希望！

そう！此処は！」

此処は？

「BADエンド救済コーナー」『教えて♪オルガマリー先生！』よ!!」

.....

「『教えて♪オルガマリー先生！』よ!!」

.....大事な事だから2回言ったんですね、わかります。

恥ずかしがりながらポーズを決めているその姿は、なかなかクルものがある。

えーと？オルガマリーさん、でいいんですか？

「此処では『先生』と呼びなさい！」

わ、わかりました先生。

あの、つまり此処は.....

「そのままズバリ。」

BAD エンドを迎えた型月主人公にアドバイスしたり、ヒントを出したり、弄ったりするコーナーよ」

そ、そうですか。

自分は……死んだのか？

あれ？でもおかしいな？

自分の所には、こういうのは無かったような？

BADの時は容赦なく死んで、ノーヒントでリトライだったはず……？

「……だって……だって仕方ないでしょ！

このペースで行くとFGO編は厳しそうだし！

6章まで行くとわたしの事なんてほとんど話題に出ないし！

こうでもしないと出番が無いのよ！

ねえ！分かる!?わたしの気持ちがい！

大晦日に死亡シーンをTVで流されたわたしの気持ちが！

そのシーン以外では、FGO本編で全く話題にされなくなったわたしの気持ちが！

居場所がりヨ先生の漫画の所にしか無いわたしの気持ちが！

分かる？分からないでしょうね!?

まだまだ出番がある貴方には!!」

落ち着いて下さい先生！

危険なレベルのメタ発言をしていますよ！

……不覚にも、涙目の先生が可愛く見えてしまった。

そうか、先生はこういうタイプか。

しかし、やっぱり『先生』という呼び方には違和感があるな。

どちらかと言うと『委員長』や『生徒会長』とかの方が合っているような？

「……お願い、末尾に『長』が付く役職の話はしないでくれる？

本当に、大変だったんだから……！」

アツハイ。

……あれ、なんか、頭が。

「……もう時間切れね。

まあ、貴方はまだ死んでいないから仕方ないか」

え？自分は死んでないの!?

「ええ。死にかけただけで、一応死んではないわ」

なら、先生はどうして？

そんなに順番が欲しかったんですか!?

「……欲しかったのは、むしろ『縁』かしらね」

『縁』？

……意識がいよいよヤバイ。

先生！何か最後にアドバイスを！

一言だけでいいんで！

「……これからも貴方には多くの苦難が待ち構えているわ。

そんなに貴方に出来る最初のアドバイスはこれでしょうね。

『絶対に諦めない事』

もつとも、わたしが言わなくても貴方は諦めないのでしょうか」

そう言つて、先生は自分に微笑みをむけた。

ありがとうございます！

先生！自分頑張ります！！

だから、また何処かで会いましょう！

……もう、意識、が……

side out

「頑張りなさい『岸波白野』」

「貴方が次に出会うオルガマリー・アニメスファイアは『わたし』ではないけど」

「貴方も此処での事をほとんど覚えていられないだろうけど」

「それでも」

「また何処かで会いましょう」

「…キシナミ、起きて？」

早く起きないと、パンツ下ろすよ？」

させるかああああ！

…って、はくのん!?

えーと、そうかつイン・ジャイアン・リサイタルで意識が飛んでいたのか。

はくのんは大丈夫だった？

「…無表情な黒服の少女に色々説明を受けていたような気がする。

一緒にいたでっぷりとした青いコマドリが喧しかった」

なんだそれは。

自分の方は学校の教室で、かなり若い『先生』に出会った気がするね。

…名前と顔が何故か思い出せない。

オルガナイザー先生、いやオルゴンクラウド先生だったかな？

「奏者よーはくのんよー！

余の歌はどうだった！

最高であつたであらう？」

「2人ともアンコールはいかがかしら？」

セイバー、エリちゃん。

最高だったよ。

あまりの素晴らしさに、瞬間的に意識が次元を超越したような気がするぐらいだ。何というか、深淵を覗いた気がする！

「…でも2人とも、一度休憩して。

はい、タオル」

スポーツドリンクもどうぞ。

「あら？気がきくじゃない！」

「うむ。今回は久々に本気を出してしまったからな。

しばし休息をとるべきであろう。

……しかし、奏者よ。

あの金ピカはどうするつもりだ？」

大丈夫。

ここまでお膳立てしてもらえれば、確実にやれる。

「わかった。

でも2人とも、無理をするでないぞ？」

ありがとうセイバー。
さて、周囲の状況は……

A U Oは

「…お、れ！」

音を遮断しても聞こえてくるとは、一体なんだというのだ！」

おお！かなり効いている。

あのA U Oが肩で息をして、ふらついているぐらい消耗している。

これならイケる！

「…アーチャーは」

「ふむ。問題ない。」

この川を渡ればいいのだろうか？

む？もしや、そこにいるのは……じいさんなのか？

…本当に……本当に久しぶりだ。

……俺、話したい事が一杯あるんだ。
今からそつちに……なに？

渡し賃が1メートルにつき1万円、だど!?

いくらなんでもぼったくりだぞ! 凜!!」

「……多分、大丈夫」

いや、アーチャーさんの全身から光の粒子が出ているけど!?

カルデアチーム、藤丸君達は

「……マシユ……」

「先輩! しつかりして下さい!」

「……酷い……夢を見た気がするんだ。」

ネロとエリザベートが……一緒にライブをしていた。

……そんな事、あるわけないのに……

……そんな事起きたら……世界の終わりだと言うのに……」

「……先輩。それは……夢です」

「……夢?」

「……先輩は夢を、悪い夢を見たんです」

「……そうか。」

ああ……よかった……」

「……先輩？」

「……ゴメン、マシユ。」

僕、とつても眠いんだ……だ……か……ら……」

「先輩！目を……目を開けてください！

先輩!!……私を……置いていかないで……」

「マスターさん！だめえええ！」

「マスター！オレを……オレを遺して逝くなあああ！」

「私を置いて逝くなんて、そんな事したら絶対許さないからね！」

だから……だから早く起きなさい！

……起きてよ……お願いだから……」

《あの、みんな？》

藤丸君は死んでないからね？

ただ致命傷レベルのトラウマを抉られて、気絶しているだけだからね!?!》

《ふっふっふっ》

ここはルビーちゃんの出番ですね〜

先程クロエさんに射つた特製気付け薬を使えば、すぐにマスターさんも元気になります！

……スッポンやらマムシやらガラナやらを大量に使っていますので、アッチ方面も元氣百倍になってしましますが。

まあ是非もないですよね♪

「……目を覚ましてから……妙に体が火照っていると思っただけ。

ルビー！なんて物使っているのよ！」

《氣をつけて下さいねクロエさん？》

この気付け薬を射たれたクロエさんとマスターさんが3時間ほど2人つきりになると、1年後に家族が増えてしまいますからね？》

………なんかスマンな藤丸君。

マシユちゃん達の様子からすると、ガードそのものは無事に出来たようだけど。

まさか、君がそこまでトラウマを背負っているとは本当に予想外だったぞ。

「……強く生きてくれ」

さて、はくのん。

こちらも仕上げといこうか。

「…合点承知」

自分とはくのん、2人の『岸波白野』は満身創痕のAUOの元に歩を進めた。

疑似コードキャスト『保管』の中から、AUOの弱点である『それ』を取り出しながら。

「き、貴様ら! 『それ』が本命か!

く、来るなあああ!」

さあAUO。

「…さあAUO」

さあ。

「…さあ」

さあ!

「…さあ!」

さあ!!

「…さあ!!」

「おのれ、おのれおのれおのれおのれえ!!!!」

「…激辛麻婆、しっかりお食べ」

「それだけはやめっ！グハッ!？」

s i d e o u t

「突然すまない」

「メッセージ担当のジークフリートだ」

「今、英雄王は本当に酷い目にあっている」

「具体的に言うと、羽交い締めにされた状態で激辛麻婆豆腐を口に無理矢理流し込まれてる」

「毒味の道具を使う余裕も無いようだ」

「かなり哀れなので、次の場面に行くのを少しだけ待ってもらえないだろうか?」

「本当にすまない」

sideキシナミ

時間になり、黄金劇場が解除された。

今、自分達の足元にAUOが倒れている。

白目をむき、口から赤い物を垂らし、全身を痙攣させながら倒れている。

「……この戦い、私達の勝利だ」

《……キシナミ君、ハクノちゃん。

僕達カルデアは色々な英雄と、様々な戦いを経験している。

……でもね？

あの英雄王をこんな方法で撃退したのは、君達が最初で最後だと思うよ。ロマンさん、そんなに褒められとさすがの自分でも照れてしまいますよ。

《うん。全くもって褒めていないけどね。

ほらレオナルド！いつまでも笑い転げていないで、席に戻ってくれ！》

《クククツ。いやゴメンゴメン。

おや？英雄王はまだやるつもりみたいだね？》

足元に倒れていたA U Oが立ち上がった。

その目は涙目、顔は脂汗だらけ、足は生まれたての子馬のように震えていた。

それでもA U Oは立ち上がった。

「くっ、くははははは……ゲホッ!？」

よもや我をここまで追い詰めるとは。

さすが『岸波白野』だな！」

A U Oこそ、あれで立ち上がるとはさすがです。

「だが甘い！甘いぞ！」

この程度の辛味を呑み干せなくて何が英雄か。我をやりたければ、この3倍は持つてこい！」

そこにいたのは、まさしく王であり、始まりの英雄であった。

涙目でありながら、なんとという威圧感。

自分達はA U Oを過小評価していたようだ。

どうするはくのもの？

おかわり希望らしいよ。

「……もちろん受けて立つ。」

私の麻婆は108杯あるぞ。

疑似コードキャスト『保管』のおかげで、いつでも出来立てホカホカの状態だ」

「……………えっ?」

さすがはくのものだ。

でも『3倍』って、何を3倍にすればいいのかな?

量かな? 辛さかな?

「…迷ったなら、全て3倍にすればいい。」

A U Oなら、きつと喜んでくれる」

「……………えっ?……………えっ?」

それならはくのん。

いつその事、例の試作品にしたらどうだ。

「…正気かキシナミ！」

アレは私達でも水なしでは食べられない『究極の一』だ。
もはや、麻婆の形をした宝具だ。

それを解き放つのか!？」

「……………えっ?……………えっ?……………えっ?」

大丈夫、A U Oに捧げるならこれでもまだ足りないぐらいだ。
だってA U Oだし!

「…そうかA U Oだもんね」

「……………」

お待たせしましたA U O!

では、こちらから頂点の逸品を……………あのA U O?

顔が真っ青ですけど?

ひよつとして体を冷やしてしまいましたか?

なら、早く麻婆を食べないと!!

「……………ふははははははっ !! !!」

見事なり『岸波白野』!

我をここまで楽しませるとは大義である!

……それに免じて、此度は引いてやろう。

だから、追いかけてくるなよ!

いいか、絶対追いかけてくるなよ!!」

そうして、AUOは自分達の目の前で光になって消えてしまった。

……うゝん残念。

「……新しい麻婆フレンドになるかと思ったのに」

《えーと?レオナルド、これって?》

《当初は弱点である麻婆豆腐で英雄王を撃退するつもりだったんだろう。》

でも英雄王が食べ干してしまって、2人を煽った事で、キシナミ君達がノってしまつたようだね。

途中から英雄王を撃退する事そつちのけで、麻婆豆腐を食べさせる事しか頭になかつたみたいだ。

本当に面白……恐ろしいね麻婆豆腐は!》

《……麻婆豆腐とは、一体!?!》

さて、A U O が帰ってしまつたし。

この後どうするかな。

「……ムーンセルチームはこの後は監督役のところへ事情説明に行くべきかな？」

やはり、まずはそれかな。

どうせこの戦いも使い魔とやらで見られていたかもしれないし、出来れば関係者も集めてほしいよね。

「それでしたら、カルデアチームも同行させてください。

僕達は結局アインツベルンと会えませんでしたので、其処で話が出来たら……」

うん。わかつた。

……その、なんだ、藤丸君本当に大丈夫か？

江宮邸でお昼寝中のキャスパリーグと一緒に、留守番してた方がよくないか？

顔真つ赤だよ？

「だ、大丈夫です。

体が火照っているだけですから」

「マスター？さつきみたいなのに、また背負ってやろうか？」

「大丈夫!大丈夫だからモーさん!!」

「あの先輩?先程から前屈みになっていますが、もしやどこか負傷したのでは!」

「大丈夫!本当に大丈夫だから!!」

《うくん。マスターさんの理性は強すぎますね》

色々溜まつている物を吐き出させて、少しでも楽になつてもらおうかと思つたのですが。

逆にマスターさんを苦しめてしまいましたね、ルビーちゃん反省♪》

「……マスターが今のわたしと同じ状態なら、相当ヤバイと思うんだけど?」

ルビー、今の話、適当にでっち上げているでしょ?」

《…………てへっ♪》

………すまない藤丸君。

自分は童貞だ。

童貞の自分は、こういう場面では無力なのだ。

《いやはや、本当に楽しそうだね!

私はその場にはいないのが本当に残念だ》

《藤丸君は結構必死になっているけどね。

………ん?なんだ、この反応は?》

「…ロマン、どうかしたの？」

《……パイ……!!》

ん？この声は？

《……先輩!》

「…私達の端末から？この声って、もしや」

《……キシナミ先輩!ハクノ先輩!》

BB!めんどくさいラスボス系後輩ことBBちゃんじゃないか!

「…BB、久しぶり」

《先輩!すぐにそこから逃げて!!》

《藤丸君!マシユ!警戒してくれ!

そこに神霊クラスの何かが出現しようとしている!》

《先輩!そこにタマモナインが!!》

s
i
d
e
o
u
t

「おっおっおっおっおっおっおっ」

Sword, or Death

sideキシナミ

目の前の空間に罅が入る。

その罅は徐々に大きくなり、ついにガラスのように割れた。

そして出来た空間の割れ目の中から

「ぬっふっふっく♪」

1人の女性が出てきた。

頭は狐を連想させる獣の耳を生やし

ふさふさの尻尾を揺らし

赤い巫女服のような服を身に纏っていた。

「キヤットさん、でしょうか？」

《違う！カルデアのタマモキヤットは、厨房にいる事は確認済みだ。

君達の目の前のタマモキヤットの霊体の構成物質が、アーチャー君達と一致している。

彼女はムーンセルのタマモキヤットだ！》

《ロマンニ、この数値はヤバイ。

総エネルギー量が魔神柱を上回っている。

もし襲いかかってきたら、今の消耗した状態では勝ち目がない》

……ロマンさん達が何か焦っているようだったが、その声は自分の耳に入らなかった。

自分は、目の前の『彼女』から目が離せなかった。

おそらくはくのんも同様だろう。

間違いない。

薄々と気付いてはいたが、直接彼女に会って確信した。

自分こと『岸波白野』はタマモ、キャスター『玉藻の前』と契約していた可能性もあったのだと。

彼女こそが、『岸波白野』の第3のサーヴァント！

「ようやく見つけたのであるご主人。

むむ!?ご主人が2人!

しかもなかなか見所がありそうな、前屈みのチェリーボーイも。

これが一兔を追って三兔を得るといいうものか!

ご主人が3人、来るぞキャット!!

全員まとめて玉藻地獄でご奉仕するワン！」

……………勘違いだな、うん。

「…雰囲気が違う？」

自分の知っているタマモは、もっと知的だったというか、腹黒かったというか。

それでいて、隙を見せればルパンダイブをしかけてくるようなキャラだったはずだが。

あんな支離滅裂な、天真爛漫にニコニコ笑うタイプでは無かったような？

メインウエポンの鏡も無いし。

……………待てよ、少し思い出した。

そうだ！『アルターエゴ』だ！

タマモには切り離れた8本の尻尾があり、それぞれが分霊・アルターエゴとして活動できたはず。

そのうちの1つが目の前のタマモキヤットなのか！

《……………先輩。やっぱり、思い出してしまったんですね》

なるほど。ある程度予想はしていたけど。

「…BB。私達の記憶を封印していたんだね。

玉藻の前に関する記憶の全てを」

なんでそんな事を…と聞きたいところだけど。

どうやら、今はそんな時間は無さそうだ。

「むっ!? キャットの前でオリジナルの話とは。

ご主人よ、マナー違反でごじやる。

ペナルティーとして人參を差し出すべし。

というか、お持ち帰りからのニャンニャンウフフの刑もありか!

キャット的には屋外でも無問題だが、やはり初めては首輪付きキャットを台所で後ろ

からが理想だワン!

というわけで、テイクアウトの時間ナリ!

邪魔者はゴミ箱へシユウウーツ! 超! エキサイティン!!」

あいかわらず言っている事は滅茶苦茶だが、とりあえず自分達を連れていこうとしているのはわかった。

あと童貞の自分的には、初めてがそんなマニアックなシチュエーションになるのは御遠慮したい。

「今のタマモナインに捕まるとマスター達がどんな目に合うか未知数だ。

おそらく、ろくな目にあわないだろう。

しかもあの様子では、相手はどうやらバーサーカー。

説得は困難だ。

ここは迎え撃つしか無い」

アーチャーさんお帰りなさい。

なんとか無事に帰ってこれたようですね。

「三途の川を追い出された後は、何やら懐かしい道場に連行されたけどな。

二度とあんな手を使わないでくれ。

いいか、絶対だぞ！」

「…アーチャー、それはフリだよね？」

「違う!!」

「ぬぬっ！エロゲ主人公の成れの果てのような GANGRO よ。

お主、さてはハーレム主義者だな？

よろしい、全殺しだワン！

汝はジゴロ！罪ありき！」

…アーチャーさん、貴方なにやらロックオンされているのですが。

まだ何か因縁があるんですか？

「さすがに今回は身に覚えがないぞ！」

「…やむを得ない。」

私とアーチャーでキャットの相手をする。

キシナミ、その間に打開策を考えておいて」
わかった。

2人とも気を付けて。

《すまない。カルデアチームは消耗が激しく、これ以上の戦闘は困難だ。

……いや、藤丸君はある意味ではこれ以上無いぐらい元気なだけだね。

元気になりすぎて、逆に身動きがとれないというか。

こちらから出来るのは情報収集とナビゲートだけになってしまう。

本当にすまない》

お心遣いありがとうございますロマンさん。

藤丸君にはしつかり休むよう伝えておいて下さい。

「あ、あの！わたしはまだいけます！」

イリヤちゃん？

《イリヤさんは比較的消耗が少なかったですからね》

魔力もある程度は自己精製できますし。

クロエさんも『悔しい！でも感じちゃう！ビクンビクン』な状態でなければ、まだ戦えたんですけどね♪》

「…ありがとうイリヤちゃん。

でも、ここは私達に任せてほしい。

キヤットは藤丸君もターゲットにしているみたいだから、彼の護衛にまわってほしい」

「話はそこまでだ、マスター。

来るぞ!!」

「ブツ血KILL!!」

アーチャーさんとタマモキヤットの戦いが始まった。

キヤットが驚異的な素早さでアーチャーさんに徒手空拳で挑み、アーチャーさんがそれを双剣で捌く。

双剣は碎けるが、アーチャーさんはすぐに双剣を再投影をしカウンターを入れた。かなりいいカウンターが入ったはずだが。

「…アーチャー?」

「ああ。素早さはランサー・クーフーリンに匹敵しているが、動きが単純すぎる。

守りを固めれば、やれなくはないと思うが…」

「…でも、あまり効いてなさそう」

「手応えはあったが傷がすぐに消えている。」

「これは厄介だな」

《スキヤンの結果が出た！》

耐久力はさほどではないけど、保有魔力が桁違いだ。

その膨大な魔力の大半を常に自己回復に回している。

生半可な攻撃ではすぐに回復されてしまうよ！》

「…手数では勝負できない。」

強力な一撃が必要。

アーチャー、令呪1画を回す。

宝具の使用を。

ただし、結界からカルデアチームは除いておいて」

「いいのかマスター？」

正直な話、私の宝具でも有効打にはならないかもしれないかもしれんぞ？」

「…大丈夫。」

私達が時間を稼げば、キシナミ達が突破口を開いてくれる。

私はそう信じている。

アーチャー、『令呪を以て命ずる！宝具を開放して!!』
「承知したマスター！」

アーチャーさんは己の切り札を発動させた。

自身の生涯そのものと言える宝具を。

禁忌の大魔術である『固有結界』を。

「I am the bone of my sword. (――体は剣で出来ている)」

「Steel is my body, and fire is my blood.

(血潮は鉄で、心は硝子)」

「I have created over a thousand blades.

(幾たびの戦場を越えて不敗)」

「Unknown to Death. (ただの一度も敗走はなく)」

「Nor known to Life. (ただの一度も理解されない)」

「Have withstood pain to create many wea-

p ons. (彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う)」

「Yet, those hands will never hold anything.

(故に、その生涯に意味はなく)」

「So as I pray, (その体は、)」

「UNLIMITED BLADE WORKS. (きっと剣で出来ていた)!!!」

その詠唱の終わりとともに、世界は炎に包まれた。

炎が通りすぎた後、周囲は一変していた。

黄昏の空には不気味な歯車が浮き。

赤茶けた大地には、墓標のように無数の剣が突き立つ。

とても、とても寂しい光景だ。

詠唱の内容も救いが無い。

……正直な話、詠唱の内容はともかく、長い詠唱をしながら必殺技を放つという展

開は男心をくすぐるものがあるが。

「…アーチャー！遠距離から飽和射撃。

近づけさせないで！」

はくの人達も本格的に動き始めた。

彼女は自分達を信じてくれた。

ならば、その期待に応えよう。

というわけでBB、どうすればいい？

《はい！おバカなキシナミ先輩にも分かるよう、万能後輩BBちゃんが懇切丁寧に説明してあげます！》

今のタマモキヤットは無理矢理地上に現界しています。

魔力で自己強化をせずに、自己回復しかしていないぐらいですから。

ですので、やる事は簡単。

大ダメージを与えて、一瞬でいいので現界を維持できなくすればいいんです。

そうすればこちらから干渉して、ムーンセルに強制送還する事が出来ます》

なるほど、大ダメージか。

セイバーの宝具も、エリちゃんの宝具も使ってしまった。

たとえ使えたとしても、アーチャーさんとの戦いの様子からすると、火力が足りないだろう。

ならば、やはりアレしかないか。

《……ま、それしか無いでしょうね。

健気なBBちゃんはダメダメな先輩達のために、ここからサポートしてあげます。

せいぜい頑張って下さい！》

そういう事をわざわざ口に出しちゃうあたり、BBはやはりめんどくさ可愛いな！

《な、なにを言っているんですか！》

というか『めんどくさ可愛い』って、実はd i sっていませんか!?!》

H A H A H A ! 気のせいだよ！

ともかく、B B がサポートしてくれるのは本当に助かる。

「む、奏者よ。余の出番はもう無いのか？

やはり余は、あれだけでは物足りんぞ！」

とんでもない！

セイバーこそ、こちらの切り札だよ。

エリちゃんは……沢山歌ったから、今はバックダンサーに徹してくれ。

ロマンさん達は画面越しに応援ヨロシク！

「……………仕方ないわね。

ネロ！お手並み拝見よ！」

《それでキシナミ君。

一体どうするつもりだい？》

自分達ムーンセルチームの真の切り札『神話礼装』を使います。

《『神話礼装』？それは一体？》

説明すると長いんで、実際に見てもらった方が早いです。

セイバー！BB！準備はいいかい？

「うむ！勝負服だな！

あれはお気に入りだ！」

《こっちはもういつでも大丈夫ですよ。

キシナミ先輩がぐずぐずしてたから、もう準備万端です。

ハクノ先輩が心配です。

とつとと終わらせちゃいましょう》

わかった。

では、神話礼装発動！！

《マスター『岸波白野typeB』からのリミッター解除要請、承諾。

セイバー『ネロ・クラウディウス』の神話礼装『皇帝』への形態変化、開始。

霊基との同調、安定。

神話礼装、顕現します》

自分の目の前で白い拘束衣装を来ていたセイバーが赤い光に包まれる。

その赤い光は彼女の情熱の如し。

その光の中から、赤と金の衣装に彩られたセイバーが現れた。

セイバーの愛剣『原初の火（アエストウス エストウス）』も本来の赤色に戻っている。

その姿は、どこことなく火山を思わせ、『皇帝』という概念の塊のようにも見えた。

これこそがセイバーの最終決戦フォーム、『皇帝の神話礼装』だ。

「このタイミングで衣装換え、ですって!？」

さすがネロ、恐るべきアイドル力ね!」

《この数値……『神話礼装』って!？」

サーヴァントに英霊の生前の力を持たせるところか、魂が持つ原初の力を開放させているのか!

潜在能力を限界近くまで開放、ムーンセルはこんな事まで出来るなんて!

いくらなんでもムチャクチャだ!!》

《ネロさん。本来ならば、地上での神話礼装を使った戦闘は10秒が限界です。

それ以上は高出力に霊基が耐えられず、霊基崩壊を起こしてしまいます。

ただし今回はBBちゃんの細やかなサポートにより、戦闘可能時間が大幅に増えています。

それでも、神話礼装解除の時間も考えると、全力を出せるのは1分間だけです。

いいですか? カウントスタートから1分以内に決着をつけてください》

1分間、か。

「……………否、1分もいらぬ!

今の余なら一撃で十分だ！

奏者よ！号令を!!」

よし！はくのん！

こつちはいつでもいけるぞ！

「……アーチャー、大技を一発。

その後すぐに離脱を」

「わかった。ならば！」

アーチャーさんの手に金色の光が集う。

あれこそは、アーチャーさんの投影宝具の中でも最強の一撃。

固有結界内部でのみ、ギリギリ投影できる聖剣の頂点。

「この光は永久に届かぬ王の剣！」

……この町に来た今なら分かる。

あの剣は、アーチャーさんにとつての『特別』なのだ。

アーチャーさん、もしくはアーチャーさんの中の『彼』は、あのアーサー王と何か強い縁で結ばれていたのだ。

「『永久に遥か黄金の剣（エクスカリバー・イマージュ）』!!!」

「ははははははっ!!」

金色の斬撃がタマモキヤットを吹き飛ばした。

今なら、回避も防御も出来ない。

一気に畳み掛けるぞ、セイバー!

「…………アルターエゴ・タマモナインの一人、タマモキヤット。

お主も、はくのんを、そして我が奏者を愛し求める者なのだな…

だが許せ。

『岸波白野』は、余の…私のものだ!」

《セイバー『ネロ・クラウディウス』、戦闘態勢に移行を確認。

カウントスタート!》

「しばし私情を語ろう…」

セイバーが剣を上段にかざす。

…えっ!? このタイミングでその技!?

「告白するぞっ!」

炎を纏った剣を水平に構え。

ちよ、みんな見てるよ!?

「余は奏者が!」

神話礼装でブーストされたスピードで錬鉄の丘を一瞬で駆け抜ける。

そしてタマモキヤットを突き刺し。

ちよつとセイバー！さすがの自分でもコレは恥ずかしいってば!?

「大・好き・だつっつ!!」

「解せぬっつっ!?!」

セイバーの告白と同時に、突き刺されたタマモキヤットが爆炎に包まれた。

うわあああつ！やつちやつたあああ!?

《はいはいご馳走さま。

もうキシナミ先輩は、今の告白剣みたいに大爆発すればいいんじゃないかと提案します。

……タマモキヤットの現界維持に揺らぎあり、強制送還始まります!

同時に神話礼装解除処理も開始!》

セイバーの姿が白い拘束衣装に戻った。

短時間とは言え限界以上の力を使ったせいか、かなり疲労しているようだ。

「思いつきり力を出せるのは良いが、やはり疲れる。

余は早く帰って湯浴みをしたい!」

もうちよつと待つてね。

今回の戦いの後片付けが終わってからだ。

「…キシナミ。タマモキヤットが…」

はくのと自分の目の前で、タマモキヤットは新たに出来た空間の割れ目に吸い込まれつつあった。

その姿は自分達との戦いでボロボロであり。

セイバーの爆発剣でどこどころ焼け焦げていて。

そして……………泣いていた。

「……………ご主人……………ご主人…」

その目から涙を流し、自分達に向けて必死に手を伸ばしていた。

……………はくのん。

「…そうだね」

自分とはくのは、少しだけタマモキヤットに歩み寄った。

《先輩!》

大丈夫だよBB。

タマモキヤット、自分達は君達のオリジナルである『玉藻の前』が己のサーヴァントだった事を思い出している。

「…ならばタママモニンが引き起こした月の争いを、もう無視できない」
自分達は、近い内に月に帰るつもりだ。

そこで再び会おう。

「…再会した時、私達が貴女達を受け入れるのか、それとも拒絶するのか。

それはまだわからない」

でも、断言できる事が一つある。

それは、自分達が出会うべき場所は地上では無いという事だ。

だから

「…月で待っていてくれ」

「……………そうか。そうなのだな。」

ご主人達は…ちゃんと月に帰ってくるのだな？

ならば、いいのだ！

アタシは、オリジナルと違って待てるネコである。

特製オムライスを作って、待っているワン！

お土産はゴールデンネコ缶でヨロシク。

ところでご主人、ご主人的にはメイド服と裸エプロン、どちらがお好みか？

次に会う時までを考えておいてほしいのだ！」

そうして……目の前にいたタマモキヤットは、笑顔で月へと帰っていった。

《……先輩。そういう言動をするから、変な女の子が寄ってくるって、いい加減自覚して下さい!!》

うぐつ!? 変な女の子筆頭のBBに言われると説得力があるね。

「……でも、あの涙は止めなくてはいけない。

そう思ったから……」

《……まったく。あまりタマモナインに気を許しすぎないで下さいね!》

さつきから気になっていたんだけど……

BBは元々サーヴァントを敵視していたが、なんかタマモの事は特別に危険視しているみたいだね?

《……先輩達が正規契約する可能性のあるサーヴァントは4騎。

ですが、うち1騎のバーサーカーは、英雄王の契約割り込みにより記録が失われてしまいました。

ですので、現在ムーンセルに登録されている『岸波白野』の契約サーヴァントは

セイバー『ネロ・クラウディウス』

アーチャー『無銘』

キャスター『玉藻の前』

の3騎になります。

この3騎は、程度の差はありますが、実はかなり問題があるサーヴァントなんです」
「…問題？」

《ネロ・クラウディウス》は生前から『ある疑惑』がある人物でした。

『無銘』は複数の聖杯戦争、特に冬木聖杯戦争に深く関わっています。

そして肝心の『玉藻の前』ですが……先輩、もう彼女のマトリクスは思い出していますよね？》

うん。たしか彼女は太陽神の分霊だったよね？

《太陽神・天照の分霊。

つまりそれは、尾が9本揃えば、『月』であるムーンセルを内側から食い破れる事を意味しています。

『月』では『太陽』には勝てませんから。

それに彼女は女神です。

歴史&神話オタクの先輩なら、女神の愛の恐ろしさや理不尽さは分かっていただけだと思いますが？

正直、タマモ達の危険性からすれば、他の2騎の問題点なんて気にならないぐらいです》

なるほど。

BBがタマモを敵視していたのは、彼女達がムーンセルを破壊する可能性があるから。

そして、女神の愛で『岸波白野』の魂が囚われる可能性があったからか。

それでも…

「…それでも、タマモは私達のサーヴァントなんだ。

絶対に会わなければならぬ」

《はいはい！先輩達なら、記憶が戻ったらそう言うだろう事は分かっていますよ！

そんな頑固で分からず屋な先輩達のために、BBちゃんはムーンセル帰還用プログラムを作成済です。

『白い方』に渡しておきますので、準備が出来たら連絡しちゃって下さい。

その端末でムーンセルに音声連絡出来るよう、アップデートしておきましたから。

わたしはなんか色々あって疲れちゃいましたから、お風呂入ってきます！》

ありがとうBB。

…本当に色々ありがとう。

「…BB。たしかに私達はタマモナインと対峙するために月に帰る。

でも、帰る理由はそれだけじゃない」

なんの因果か、お互い消滅せずいられたんだ。だから
「…BBと再会する為にも月に帰るんだ」

直接会って色々と話したいしね！

《……本当に…先輩は…どこまで行っても先輩なんです…》

BB？

《な、なんでもありません！

お疲れ様でした!!》

あ、通信が切れた。

しかしあれだね。

やっぱり

「…BBはめんどくさ可愛いな!!」

「……おい、マスター。」

私はいつまで固有結界を維持していればいいのかね？

そろそろキツくなってきたのだが」

「…すっかり忘れていた。

もう解除して大丈夫だよね？」

あ、ちよつと待って。

ロマンさん！今の戦闘の事ですけど…

《心配しないでいいよ。》

『神話礼装』の事は記録からは削除済だ。

…というか、こんなの残せないよ！

本当にムーンセルはとんでもないね!?!》

いえ、そつちは別にいいです。

お願いしたいのは、アーチャーさんの投影の事にして。

《なるほど、聖剣の投影の事だね。》

わかった、改竄しておくよ》

お願いします。

もしモードレッドさんにバレたら、アーチャーさんが八つ裂きにされてしまいますから。

「キシナミさん！ハクノさん！」

アーチャーさんの結界を解除したら、待っていた藤丸君達と無事合流できた。

「皆さんご無事で何よりです！」

ありがとうマシユちゃん。

こちらはなんとかムーンセル版タモキヤットを退ける事が出来た。

決着は月でつける事になるけどね。

「……………月、ですか。」

という事は……」

「……うん。カルデアチームが冬木を離れるように、私達ムーンセルチームも月に帰る事にした」

「そうですね……」

自分達は監督役に今回の事を説明したら、なるべく早く帰るつもりだけど。

カルデアチームはどうするつもりだい？

「まだ帰れない以上、何処かに拠点が欲しいですが……」

《うくん？ ロマニ、まだレイシフトの計算は終わらないの？》

《戦闘のナビゲートもしていたからね。》

あと5日はかかるかも》

「……ふむ。計算、か。」

ならば、協力できるかもしれない。

さっきの戦闘後から、私達の端末と月が繋がっている。だから……」

よし、さっそく。

BBはお風呂中だっけか。

だったら、桜！聞こえる？

《はい！先輩、お久しぶりです！》

BBから話は聞いています。

今すぐ、ムーンセルに帰還しますか？》

それはもうちよつと待ってくれ。

今回は頼みたい事がある。

「……桜。私達と行動を共にしているカルデアチームのレイシフトに関する計算を手伝ってほしい。

私達の端末を経由すれば、カルデアと繋がれるはずなんだ」

《……ちよつと難しいと思います。

今の私が管理できるリソースは以前よりだいぶ減ってしまっているので、あまりお力にはなれないかもしれません》

ダメ、なのかな？

《……出来る限りの事はやってみます。

えーと、先輩達の端末の『フィニス・カルデア』ですよね？》

うん。お願い。

《では、アクセス開始します》

《お、来た来た。

この『B01』というやつだね。

アクセス承認……つて、なんじやこりやあああああつ!?》

フアツ!?

ダ・ヴィンチちゃん!?

《ど、どうしたんだレオナルド!

オツサンみたいな声を出して!

……えええええええ!?》

《あの、すいません。

レイシフトの計算つて、本当にこれだけでいいんですか?》

ダ・ヴィンチちゃんとロマンさんの驚きようからすると…

「…なるほど。計算が一瞬で終わってしまったんだね」

《桁違いじゃない!

次元が違いすぎる!

いやこれは、根幹の技術がそもそも違う!

大気圏内でどんなにスピードを出しても、宇宙空間での速さには敵わない。

これは、それぐらいの差があるぞ!》

《くそ！悔しいな！

私は天才なのに、さつきからムーンセルには驚かされてばかりだよ。

…そして天才の私が断言しよう。

地球人類ではムーンセルを越える演算装置は作れない、と。

これを越えるには、異星文明の技術を取り込むとかしないと絶対に無理だ》

《驚いたのはこちらもです。

カルデアは21世紀前半の組織なんですよね？

この『霊子演算装置・トリスメギストス』、明らかにオーバートテクノロジーなんですけど
…盛り上がっているところ、悪いけど。

《あ、ゴメンゴメン！

これなら、今すぐにでも藤丸君達の帰還は可能だ。

本当にありがとう!》

《いえ、お力になれて幸いです》

「…桜、ありがとう。

私達も近いうちにそちらに戻る。

再会を楽しみにしていてくれ」
《わかりました。

先輩達の帰還をお待ちしております。

帰る時になったら、改めて連絡をお願いしますね。

それでは失礼いたします！》

桜は自身の業務に戻ったみたいだね。

さて藤丸君、改めて聞こう。

この後はどうする？

「キシナミさん達と一緒に、ですかね。

冬木聖杯戦争の監督役に話せる限りの事を話し、自分達の居るべき場所に帰ります。

僕らにもするべき戦いがあるのですから！」

ああ、そうだね。

お互いやるべき事がある。

ならば休暇は終わりだ。

それぞれの戦場に戻ろう。

……ところで、その、監督役の所に行くのはいいんだけどさ。

藤丸君、体は大丈夫？

ちよつと元気になりすぎているらしいけど。

どつかで休息をとったり、『ご休憩』したりしなくていいのかい？

「……なんとか、大丈夫です。」

軽く休憩をしたら、だいぶ気分が良くなりました。

時々キヤスター陣が作った怪しげな薬を食事に盛られていましたから、多少は耐性が出来ているようです。

煩惱を我慢出来ないようでは、カルデアのマスターは務まりません。

ただ、さすがに今マシユ達に密着されたら自制出来ないかもしれませんが」

「……………カルデアのマスターって、本当に大変なんだね。」

s i d e o u t

会合

sideキシナミ

自分達は一度江宮邸に帰ってきた。

戦闘の連続だったので、さすがに一息入れる必要があつたからだ。

藤丸君は大丈夫だと言っていたが、やはり一度落ち着いた方がいいだろう。

帰つたらすぐにセイバーとエリちゃんはお風呂に直行した。

その際、発情中のクロエちゃんと巻き添えのイリヤちゃんも同行した。

1時間後、お風呂からツヤツヤしたクロエちゃんとゲツソリしたイリヤちゃんが出てきた。

セイバーとエリちゃんは顔を真っ赤にしていた。

覗き見していたルビー曰く

《いや〜なかなか良い画が録れました。

美遊さんへのお土産はこれで決まりです！

ちよつと意外だったんですが、セイバーさんつて結構ウブだったんですね♪》
との事だった。

藤丸君は一人で蔵に閉じ籠っていた。

何をしているのかと覗いてみたら、ただひたすら腕立て伏せやクランチトレーニングをやっていた。

まさか、性欲を筋トレで解消しているのか！

…初対面時、海パン姿の藤丸君を見て「同年代のはずなのに、ずいぶん筋肉を鍛えているな？」と思っていたのだが…

………本当に、本当にカルデアのマスターは大変なんだな。

アーチャーさんの夕御飯が出来るまで、皆それぞれの時間を過ごしていた。

そんななか、自分は代表として電話をしていた。

相手は冬木聖杯戦争の監督役『言峰教会』の神父、言峰璃正さん。

「自分達の事について説明したいので今晚9時に教会に行つていいか」「聖杯戦争参加スターにも説明したいので、使い魔でいいので来てほしい。ただし、アインツベルンと遠坂は代表者が直接来るように伝えていただきたい」とお願いしたら、快く引き受けてくれた。

…あの様子だと、やはり自分達の戦いは見られていたようだな。

アーチャーさんの夕飯を食べた後、みんなで打ち合わせもした。結局、ムーンセルに関してはアーチャーさんに、カルデアに関してはロマンさんに説明を一任する事になった。

時間になり、自分達は教会へと向かった。

ちなみにキヤスパリーグは今回もお留守番だ。

教会の入口では、一人の若い神父が自分達を出迎えてくれた。

……言峰教会という名称から、ある程度予想していたが。

ある時は胡散臭い監督役。

ある時は何でも温める購買の店員。

ある時は自分達に麻婆の道を示した伝道師。

そう、貴方は！

「……やはり居たか。言峰……綺礼神父」

自分達の知っている神父と比べると10才ほど若く、雰囲気もだいぶ違うな。

なんというか、月に居た神父と比べると威圧感や余裕が無いような気がするね。

「……私の名を知っている？」

その件も含めて、自分達の事情について話にきました。

申し遅れました、自分はムーンセル所属のキシナミと言う者です。

「…私はムーンセル所属のハクノです」

「僕はカルデア所属の藤丸立香です」

「私はカルデア所属のマシユ・キリエライトと申します」

「私は聖堂教会所属の言峰綺礼だ。」

監督役でもある我が父の璃正、そして御三家のマスター達が待っている。

外部参加のマスター達の使い魔も既に来ているようだ。

君達も中に入ってくれ」

教会に入った自分達を待っていたのは監督役の言峰璃正さん、アインツベルン陣営のアイリスフィールさんとセイバー・アーサー王、そして遠坂陣営の遠坂時臣さんだった。使い魔らしきネズミもアチコチ彷徨っている。

アインツベルン陣営は真のマスターである切嗣さんではなく、仮のマスターであるアイリスフィールさんが来たというわけか。

そのアイリスフィールさんは、藤丸君の後ろにいるイリヤちゃん達を見て涙ぐんでい

た。

ちなみにアーサー王は護衛に専念し、会合には参加しないようだ。

ただ、その目線はカルデアチーム、特にモードレッドさんに固定されていた。

…この2人の因縁を思えば、この対応も仕方ないか。

遠坂時臣さんは……その表情は一世一代のバクチを大爆死したかのような青ざめたものだった。

うむ、A U Oの件は間が悪かったのだ。

そして、そのA U Oは来ていない。

表情の事を除けば、時臣さんは赤が似合うダンディーなおじ様という雰囲気なのだが。

赤が似合う『遠坂』……なんか、あの少女を思い出すな。

言峰璃正さんは、厳格ながら心優しい聖職者という印象を受けた。

…年の割には異様にガタイがいい。

月でコードキャスト（物理）を使った言峰神父といい、先程の若い言峰神父といい、聖職者は筋トレする決まりでもあるのか!?

「それでは、今晚は君達の事を話してくれるというわけだが…」

お互い簡単な自己紹介した後、言峰璃正さんのその言葉でいよいよ本題に入る事に

なった。

さて、どうなる事やら。

結論から言うと、説明はあっさり終わった。

いくつかの質問はあったものの、ムーンセルとカルデアの事が予想外に簡単に受け入れられた。

アーチャーさん曰く

「向こうとしては、我らの言い分を信じるしか無いのだろう。」

こちらにはサーヴァントが複数所属し、英雄王や神霊を退けるほどの戦力が揃っている。

下手な対応をすれば、カルデアチームに手を出した間桐の二の舞だろうからな」

との事だった。

こちらから「キャスター青髭の討伐は人命重視のため」「間桐邸での戦いとA U O戦はあくまでも正当防衛」であった事を強調した。

念のためロマンさんに藤丸君と間桐家当主のやり取りを流してもらい、向こうに確認してもらった。

あ、遠坂さんが頭抱えている。

さらにこちらから「大聖杯に異常の可能性あり。A U Oなら何か知っているかも」という事を、幾つかの状況証拠を追加しながら説明した。

アイリスフィールさんが青ざめ、遠坂さんの顔色が真っ白になった。

最終的には「間桐邸での戦いを始めとした、両チームによる戦闘行動については不問」
「両チームは明日の深夜に冬木市を去る」「大聖杯の調査が終わるまで、冬木聖杯戦争は
一時中断。情報操作がされないように、調査には参加マスター全員が立ち会う」という
あたりが落とし所になった。

さらに伝達役兼見張りとして、明日の夜まで言峰綺礼神父が自分達に同行する事になった。

こうして会談は終わったが、藤丸君の提案により多少個人的な会話の時間が設けられた。

……あの子達の為だろうね。

彼女達以外にもいくつかの話があった。

caselハクノと言峰綺礼

あれは、はくのと神父か？

「ではその月の聖杯戦争の監督役が、私を模しているというのだな？」

「……その通り。」

今の神父より10才ぐらい年上だと思うけど。

あと、雰囲気が若干違う。

月の神父は、どこことなく余裕のような物があった」

「……余裕？」

まさか、10年後の私は何か答えを得ているのか!？」

「……今の神父は何か悩みがあるのか。」

ならば、コレを」

「……………麻婆豆腐？」

この器は泰山か？

だが泰山の麻婆豆腐より赤いが…」

「…食え」

「は？」

「…いいから食え」

「ま、待ってくれ」

「…ただひたすら食え」

「だから、少し待っててくれ！」

「…ごめん。レンジが無かったね。」

今、客人用を留意する」

「そうではない！」

麻婆豆腐がいつたい何だというのだ!!」

「…食えば分かる。」

食わなければ分からない。

私は食って、1つの真理を得た」

「……………真理…だと!？」

「…ちなみに私に麻婆豆腐を薦めたのは、月の神父だった。

ならば、これこそが彼が得た真理に違いない」

「……何……だと……」

「……さあ食べなさい。」

月の神父が掴み、未来の貴方が掴むであろう真理が、其処にある」

「……わかった。」

ではさっそく。

……ぐっ!?!」

「……」

「ガハッ!ぐっ!?!」

「……どう?」

「……辛い。」

とてつもなく辛い。

だが……」

「……だが?」

「今、私はたしかに満たされている。

身体に空いていた穴が埋っていくかのようだ。

そして、何よりもこの熱さ!」

「……その喉を、胃を焼く熱さ。」

「それこそが命の証」

「これが命の証。」

「私は…生きていますのか？」

「…貴方は生きています。」

「たしかに、今ここに」

「……なんだ、こんなに簡単な事だったのか」

「…おめでどう神父、貴方の願いがここに叶った。」

「だが貴方はまだ真理を垣間見ただけだ。」

「ならば次はどうすればいいのか。」

「……分かるよね？」

「ああ！まずは調理師免許だな!!」

「迷える神父を導くとは、さすがはくのか。」

「そして、おめでどう神父。」

「貴方は今、麻婆道への第一歩を踏み出した。」

case2イリヤ&クロエとアイリスフィール

重い空気が流れる一画がある。

イリヤちゃん達とアイリスフィールさんの所だ。

…かなり複雑な事情らしいからなあ。

「……………」

「……………」

「……………」

《……………あのイリヤさんクロエさん？》

あまり時間も無いのですから、いつまでもにらめっこしているわけには…》

「……………ふう。それもそうね。」

はじめましてアイリスフィール。

わたしの名前はクロエ・フォン・アインツベルン。

イリヤの姉のような者よ」

「……………は、はじめまして、アイリスフィール…さん。」

わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルンです…」

《説明すると長くなりますので、ルビーちゃんの事は今回は無視してください♪》

「…え、ええ。…はじめまして、私がアイリスフィール・フォン・アインツベルン。

こちらの世界の『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』の母親よ。

貴女達は双子…なの？」

「……周りには双子だとか親戚だとか、適当に言つて誤魔化しているけどね。

アインツベルンの女である貴女には、本当の事を伝えておくわ。

わたしは、パパとママが封印した『イリヤスフィールの小聖杯としての機能と人格』、

それが色々あつて受肉した存在よ」

『小聖杯』の封印、ですって！

そつちの世界の私達に何があつたの？」

「……わたしも当時の事はそんなにはつきり覚えていないんだけどね。

わたし達のママは使命よりも娘を選び、パパは理想よりも家族を選んだ。

わたしが覚えているのは、それだけよ」

「……そんな……」

切嗣が、理想を…捨て…た!？」

「……『そういう選択肢もあつた』、これはただそれだけの話。

『小聖杯』としての力を封印されたイリヤは、普通の小学生として育てられた。

それが色々あつて魔法少女をやる事になつて、自分の出生なども知らされて、気がついたらカルデアで人理修復の手伝いをする事になつていたというわけ。

トラブルもあつたし、苦勞もしているけど、わたし達はそれなりに元気にやっているわ」

「……………」

「そんな辛そうな顔しないでちょうだい。

「こちらの世界の貴女達と同じ選択をして、わたし達と同じ結果になるとは限らないのよ?」

《そうですね》

凜さん、若き遠坂家の当主が『アインツベルン』や『聖杯戦争』を知りませんでした。分岐点はかなり昔になると思います。

ですけど、イリヤさんの御両親の選択も大きな分岐点であつたのは間違いないでしょう《》

「……………切嗣……………」

……………私達は……………」

「あ、あの! アイリスフィールさん!」

「……………イリヤちゃん?」

「この戦いが終わったら、この世界のイリヤちゃんに顔を見せてあげて下さい！」
「……………え？」

「わたし達のパパとママは、海外に行ったきりなかなか帰ってこないんです。

毎日楽しいけど、やっぱりパパとママに会いたいなって思う時があるから…

だから、その…」

「……………っ!？」

《……………あの、クロエさん？》

ひよつとしてイリヤさん、アイリスフィールさんにクリティカルヒットなセリフを
言ってしまったのでは？》

「……………多分、こちらの世界のパパにも効果大でしょうね」

…今、泣き出してしまったアイリスフィールさんをイリヤちゃんとクロエちゃんが必
死に慰めている。

何か声をかけるべきかと思ったが、何を言えばいいのか全く分からない。

…『家族の記憶』を持たない自分では、分からなくて当然か。

それにこの光景を見ると、自分が声をかけなくて正解なのかもしれない。

世界が違えど、久々の家族の再会なのだから。

そつとしておこう。

case3キシナミと遠坂時臣

「少しいいだろうか?」

そう言つて自分に声をかけてきたのは、A U Oのマスターこと遠坂時臣さん。

…その顔色は真つ白だった。

あの、大丈夫ですか?

「……………正直、あまり大丈夫ではないな。

英雄王の件、聖杯の件、さらに壊滅した間桐の件。

考える事、やるべき事が山積みだ。

だが君達から聖杯についての情報提供が無ければ、事態はさらに悪化していた可能性もあつた。

情報提供、本当に感謝する」

えーと、どういたしました?」

「それらの件とは別に君に聞きたい事がある。

月の聖杯戦争の勝利者であり、一時的とはいえ英雄王と契約していた君に」
「なんでしょうか？」

「……聖杯の状態など関係なしに、おそらく今回の聖杯戦争は中止する事になるだろう。
だが、聖杯は我が遠坂の悲願。

私が駄目でも、我が子孫が次の聖杯戦争に挑む事になるだろう。

……それで、出来たら彼らのために何か『聖杯戦争に関してのアドバイス』みたいなものが欲しいのだが……」
なるほど。

遠坂さんは既に『次』を見ているのか。

……うーむ、でも。

月と冬木だとルールがだいぶ違うみたいだしなあ。

それにA U Oとの契約ですが、契約締結までの段階に関しては遠坂さんの方が上だと
思いますよ。

「むっ・それはどういう事かな？」

自分はA U Oとは途中契約でしたが、その契約の時に令呪三画全てを捧げる事になりました。

『聞く機会』『語る光栄』『見る無礼』で各一画ずつです。

ちなみに月の聖杯戦争では、令呪を使い切ると失格扱いになります。

そして失格者に待っているのは『死』です。

月でA U Oと契約するのは、文字通り命懸けでした。

ですので令呪を残した状態でA U Oと契約できた遠坂さんは、本当に凄いですよ。

「な、なんとという事だ。」

まさか、英雄王との契約がそれほどまでに危険だったとは……」

…そういえば遠坂さん。

A U Oとの契約について、1つ気になった点があるのですが。

「なにかな？」

遠坂さんをご存知の通り、A U Oと契約するのは非常に難しい。

その契約を維持するのも大変です。

ですが、彼は『王』だ。

『我がルールだ！フハハハハッ!!』な性格ですが、少なくともA U Oは自身が定めた法は必ず守るはずなんですよ。

一度契約した以上、余程の事が無い限り契約を破らないと思います。

それが、いくら自分達がいたからと言って、こんなにあっさりマスターである遠坂さんの令呪を奪うというのが不可解でして……

「……………ふむ」

……………あの、遠坂さん。

ひよつとして、A U Oに何か隠し事していませんか？

それも、かなりヤバイ事で。

「ッ!!」

あ、遠坂さんの顔色がさらに悪く……

これは当たりかな。

多分、それが原因でしょう。

遠坂さん自身に危害が無いという事は、A U Oは『遠坂さんが何か隠し事をしている』というのには気づいていても、内容までは知らないかもですね。

隠し事の内容次第では殺されていた可能性も十分あったでしょうし。

あの恐るべき視野と知恵を持つA U O相手に、隠し事なんて無理ですよ。

とりあえず命があるだけラッキーだったと思わなければ……………あれ？遠坂さん？

遠坂さん!?

……………ダメだ。立ったまま気絶している。

もうアドバイスどころではないね、コレでは。

s i d e o u t

そうして、月と星見の魔術師達は冬木の魔術師達と別れた。彼らの休暇も、最後の1日になった。

魔術師達の帰還

sideキシナミ

冬木で過ごす、最後の日。

それはあつという間に、時間が過ぎていった。

顔馴染みになった商店街の人達に挨拶をしたり。

御近所さん達にも挨拶したり。

特に大河さんを始めとした藤村組の皆さんは、自分達との別れを本当に悲しんでくれた。

大河さんとは再会の約束をしたけど……お祖父さんの雷画さんは、あの様子では気づいていたかもしれない。

これが今生の別れであると。

ちなみに自分達と行動を共にしていた言峰綺礼神父曰く

「君達はあまりにもこの街の人々と馴染みすぎた。

暗示で君達に関しての記憶を完全に消すのは、もはや不可能だ。

おそらく、『いなくなった君達を気にしない、追わない』というような暗示をかける事になるだろう」

との事だ。

あちこちへの挨拶を済ませ。

最後の食事として、両チーム合同でバーベキュー大会を行った。

その最中に冬木聖杯戦争のライダー組が飛び入り参加したり、ライダーの真名を聞いたカルデアチームが仰天したりしていた。

全くの余談ではあるが、この時エリちゃんも料理を作り、自分と藤丸君の口からエーテルが噴出する事になった。

食事が終わった後は、皆で家の大掃除をした。

……短い間だったけど、お世話になった我が家。

最後は綺麗にしていきたい。

そうこうしているうちに、ついに夜が来た。

自分達が帰る時が来たのだ。

今、自分達は大聖杯への洞窟の入口に来ている。
当然、カルデアチームも一緒だ。

そして、神父とはここでお別れだ。

「君達が洞窟に入ったのを確認したら、私は一度教会に戻る。」

その1時間後にマスター達を召集し、調査を始める事になっている」
わかりました。

入ってから1時間以内に月やカルデアに帰ればいいんですね？

「…神父。今日一日、色々ありがとう。」

貴方との麻婆談義、本当に楽しかった」

「礼を言うのは此方の方だ。」

ハクノ、君のおかげで私は進むべき道を見つける事が出来た。

本当に感謝する」

「…麻婆道に終わりは無い。

精進するんだよ神父」

「ああ!!」

うむ。こうやって麻婆の輪は広がっていくのだな。

……………ん？アーチャーさん、どうしました？

なんか、微妙な顔をしていますか？

「……………いや、なんと言うか。」

「こういう可能性もあるんだな、と呆れてな」

神父と別れた自分達は洞窟の奥へと進み、大聖杯の空間に到着した。

……………カルデアチームともお別れだ。

「あの、キシナミさん。」

「本当にこの制服を貰ってしまったも？」

藤丸君は、かつて自分が月の表側で着ていた『月見原学園制服』を着ている。

うん。持つて行っっちゃっていいよ。

自分にはこの旧制服があるし。

「奏者には、余が選んだ服もある！」

「制服の1つや2つ、問題なかるう！」

「では、お言葉に甘えて。」

「この制服はいただきます」

何よりも、別れの時にも海パン姿なんて、いくらなんでもあんまりだろう。

「はははっ！それもそうですね！」

「…マシユ、ここでお別れだね。」

最後に、もう一度揉んでいい？」

「ハ、ハクノさん!?流石にアレは御容赦を！」

「マスター。頼むから、最後までだけは真面目にやってくれ」

「…私はいつも真面目だよ？」

自分の欲望に忠実に全力なだけで…」

「なお悪いわ！」

そうこうしているうちに、時間が来てしまった。

カルデアチームの足下から光が登り始めている。

「じゃあな！」

色々と楽しかったぜ！」

「あんた達も月でまだ戦うのでしょ？」

せいぜい頑張りなさい」

モードレッドさん、ジャンヌさん。

「本当にありがとうございます！」

「まさか、あの英雄王と戦わされるとは思わなかったわ。

でも、良い経験にはなったかな」

《今回の件、色々と参考になりそうな事がありましたからね》

戻ったら、整理してバックアップをとっておかないと。

そして……クツクツクツクツ♪》

イリヤちゃん、クロエちゃん、ルビー。

《ここでお別れなのは、本当に残念だ。

あゝあ、もつとムーンセルの事とか聞きたかったな》

《本当にありがとう、藤丸君と一緒に戦ってくれて。

僅かな時とはいえ、こういう共闘の記憶は大きな支えになるはずだ。

この前の合同会議の件は、僕が責任をもって解決するからね！》

ダ・ヴィンチちゃん、ロマンさん。

「キシナミさんやハクノさん達に出会えて、本当に良かったです。

なんか……新しい『先輩』が出来たみたいで嬉しかったです。

本当にお世話になりました！」

「フオオウツ！」

マシユちゃん、キャスパリーグ。

「キシナミさんハクノさん。

僕、頑張ります！

色々辛い事もあるけど、人類の歴史を取り戻すために。

そして何よりも、僕自身が生きるために！

だから、皆さんも………」

藤丸君。

ああ、そうだね。

「……私達の戦いの最初の動機も『生きるため』だった。

そして、それは今も変わらない」

自分達も生きるために頑張る。

そして、いつの日かまた会おう！

「は、=」

そうして。

星見の魔術師とサーヴァント達は。

自分達の世界に帰っていった。

s i d e o u t

s i d e 藤丸立香

レイシフトの浮遊感が消え、光が収まってくる。

目を開けると、そこは見慣れた場所だった。

ああ、帰ってきたんだな。

「お帰り、藤丸君」

ただいまドクター。

「今回は全員無事に帰ってこれたよ。

念のため、藤丸君とマシユはメデイカルチェックを早めに受けてくれるかい？」

「わかりましたドクター」

「あくあと……その……」

「……ドクター？」

ドクター、どうかしました？

「……藤丸君は、1週間ぐらい単独行動は控えてくれ。

常に男性サーヴァントが側にいる状態を維持してくれないかな」

え？

「……女性サーヴァントのみんな、藤丸君を自室に引きずり込もうと虎視眈々として
るみたいなんだ」

……

「ちなみに『例の3人組』は、藤丸君のマイルームに四六時中いるみたいなんだ」

……

「だから……落ち着くまでは……」

……キシナミさん、ハクノさん。

僕、頑張ると言いました。

……早くも心が折れそうです。

「……ん？この反応は!?!マズイ!」

ドクターのその声がかきつけかけになったかのように、レイシフト施設に警報が鳴り響く。

ドクター、これは!?

『例の3人組』に、藤丸君の帰還を気づかれた!!

騒ぎになる可能性があったから、あの3人には伝えていなかったのに!」

そうこうしているうちに、外から戦闘音が。

『炎門の守護者（テルモピュライ・エノモタイア）』アアアツ!!」

『『牛王招雷・天網恢々（ごおうしょうらい・てんもうかいかい）』！

ふふ……あはははははっ！

矮小十把、塵芥に成るがいい!」

「むんぬあー!まだまだあっ!!」

「あらあら、まあまあ♪」

「ぐはっ!!(こ)こまでか……(ご)武運を……!」

「……(ご)めんなさい」

「ぐあっ!……:……マスター申し訳ありません……どうか御無事で……」

「シャアアアア!!」

「ぐっ! 悪いなマスター……生きてくれよ……」

そ、そんな!?

あの3人がこうもあつさり!?

マズイ! 早くゴールデンと呪腕さん、メル友の玉藻を連れてこないと………!!

そして

僕の目の前で

扉が切り裂かれて

そこには………

side out

sideキシナミ

……なぜだろうか。

今、藤丸君がかつてないレベルの危機に襲われているような気がするのだが。

「いやキシナミ。」

彼は自分の拠点に帰ったのだから、そんなピンチがあるはずないのだが？」

うーん、考えすぎかな？

「……次は私達の番。」

桜？聞こえている？」

《はい！》

ムーンセル帰還用プログラム、展開。

対象は岸波白野type A、岸波白野type B、アーチャー・無銘、セイバー・ネロ、ランサー・エリザベートの計5名。

行き先は月の裏側、サクラ勢力の拠点入口に固定。

…準備完了です。

いつでもいけます!」

「…わかった。皆、大丈夫?」

「余は問題ない!

商店街の皆からの饒別も、ほれこの通り」

「私も問題ない。

ガスの元栓もしつかり閉めてきたしな」

「私は忘れ物はしてないけど、ちよつと物足りなかつたわね。

野外ライブが出来たのは最高だったけど、町を見て回る時間ほとんど無かつたし」

自分も大丈夫、いつでも行けるよ。

「…では桜。ムーンセルチーム、帰還する」

《命令承諾。転移、開始します!》

自分達の足元から、光が登り始めた。

…この光は、カルデアのレイシフトと同じ?

「…キシナミ」

ん? どうかしたはくのん?

「…とても楽しかつたね」

……そうだね。

「…みんな、良い人達だったね」

藤村組の人達に、商店街の人々。

そして、カルデアチームの皆。

ああ、本当に良い出会いが出来た。

「…月での戦い、また頑張ろうね」

うん。頑張ろう。

目の前で、自分の分身である少女が微笑む。

と、同時に足元の光が強さを増し…

自分の視界と意識は光に染まっていった……………

s i d e o u t

sideハクノ

どこまでも昇っていくような。

どこまでも墜ちていくような。

それがずっと続くかと思いきや、いつの間にか足が地面についたような感触が。

周囲の光が弱くなってきたので、そっと目を開くと…

「ふむ。ここは……月の裏側の『旧校舎』か。

なるほど。たしかに月の裏側を攻略するならば、既にある拠点を利用した方が効率が
良いからな」

そうだねアーチャー。

私達が今いるのは『サクラ迷宮』の入口の樹の下。

…月の裏側での戦いの日々が、そして散っていった仲間達の顔が脳裏を掠める。
…今は頭を切り替えよう。

キシナミ、これからどうしようか。

最初はマイルームに荷物を置いてくる事になると思うけど、その後はどうする？
やっぱり、桜がいる保健室に行くのがいいかな？

………キシナミ？

「………奏者？………奏者は……どこだ？」

………え？

「なに!!キシナミがいない!」

「そんな!まさか子豚の事、地上に置いてきちやったの!」

…キシナミが…いなくなってしまった!?

地上に残ってしまったのか!?

それとも、S.E. R.A. P.Hの何処かに飛ばされてしまったの!?

まさか、虚数空間に落ちたとか!?

…それとも…!!

《ハクノ先輩!聞こえますか!ハクノ先輩!!》

…混乱している私の耳に聞こえてきたのは、校内放送で私達に話しかけている桜の

声。

…桜。キシナミが…キシナミがいないんだよ……!!

《…その、キシナミ先輩の件でお伝えする事があります。

急いで生徒会室に向かってください。

そこで待っている『彼ら』から話を聞いて下さい》

…『彼ら』？あの、桜は？

《…わたしはBBの緊急治療を行うので、同席できません。

BBのコンピュータが8割近く破壊されてしまい、一刻の猶予も無いのです。

すいませんハクノ先輩、修復オペレーション開始の時間になってしまったので、わた

しはそろそろ失礼いたします》

BBにもトラブルが？

一体、何が起きているんだ!?

「マスター。まずは落ち着け。

かなり酷い顔をしているぞ。

そして情報を集め、一つ一つ自分の出来る事をしていこう。

君達は、私達はずっとそうしてきただろ?」

アーチャー……そうだったね。

立ち止まらずに、進み続ける事が『岸波白野』の唯一の取り柄だった。
ちよつと動揺しすぎていたみたい。

……うん。私はもう大丈夫。

セイバー、その、大丈夫？

「……奏者の不屈さは知っているが、やはり心配だ。

それによつと側にいた奏者がいないというのは……思つた以上に堪える。

……だが、今はここで立ち止まっているわけにはいかぬ。

何もせずに泣いているようでは……それこそ余は、奏者の剣を名乗る事はできぬ！

だから、余は、私は諦めない。

奏者と絶対に探してみせる!!」

「それでこそネロね。

私のドル友なら、泣き顔なんて見せている場合じゃないわよ。

アイドルなら、いつもスマイル！」

「うむー」

セイバー、エリちゃん。

私達は諦めない。

いつも通り、諦めない。

「皆、落ち着いたようだな。

そろそろ桜君の指示通りに」

うん。生徒会室に行こう。

…キシナミ。

私達は貴方との再会を諦めない。

絶対に諦めない。

だから……………

s i d e o u t

s i d e キシナミ

…ここは…どこだ…？

t o b e c o n t i n u e ?